りたまふべしまさ我入道ヲおいてハをでヨ多くの人民をくるしめて既ヲ現當二世の願意をうしおハんとせしおれば佛神の冥慮まことヨ恐るべし父祖の善惡ハうならを子孫ヨむくふと聞けば因果の道理のがるまじ然れば向後最明寺ヲ閑居して北條の子孫後榮および我が罪障消滅未來安穩を佛祖ヲ祈ヲヤさんよつておの〳〵ヨ對面も今日を限りおるべしとのたまへば並居る重役以下宿老の輩いづれもはつとひれ伏して頭を擧げる人おかりけり去ネどヨ時頼ハ此日より最明寺に閑居ゐさまひ親族家族たりども面會なくたゞ二階堂と藤綱兩人ハ折々まゐる事をゆるし其餘かつて室ヲ入らをを朝夕佛名をとなへ現當二世を願ひたまふより外おくことわりおるかお時頼入道ハ天台法相律三宗の智識ヲ相看し佛法の奥儀をきハめまた大覺禪師其外あまたの大德ヨあふて心地大悟せられたりよつて武門をて、一大因緣の工夫ふのみ光陰を過ーたまひーヲ文應二年の秋のを忌より心地例ならを病牀ヨ卧たまふといへどもかつて醫師鍼博士等を召させたまハを諸寺諸山の祈禱

を一切とゞめたまひてたゞ天壽こゝにつきて諸佛の來迎をまちさまふより外あらざる由ー聞えけをば執權時宗さま〳〵心ばいさめさまへども一切對面をおしたまハねば一入御歎さふかく在ーたまふ重職頭人評定衆ハもとより鎌倉中これを聞ものみお赤子の母をうしおふがごとく貴賤こをを歎紀瓔打浪松ふく風もおのづから音高のらを覺えて四海打ゐほれて見えヨけりこの形容を聞たまひを須波時節こそ到來せりとて二階堂入道と、もに怪しげなる麻の衣と着し網代笠にて面をおほひ信濃入道と只二人裾高くかゝげ廻國行脚ヨ身をやつしひそうヲ鎌倉を立出たまひ何地をう志ざしたまひけん御行方をさらヲ知る人おのりけり

編者ヤて曰く時頼入道諸國を經歷ーさまふ條ヨ最明寺に籠居ゐし文應二年の秋卒去したまひ二階堂入道も殉死したりと披露あつて形のごとく葬送りをもいとおみ時宗も喪を發ーゐゆ〳〵の佛事執行ありーのば鎌倉の人民天ヨかおしみ地ヲ哭しける斯くて時頼信濃入道を具してひそかヨ鎌

倉とーのび出でたまふ由し拭書り余つら〳〵考ふるまさをがま天下の執權殊さら其篤行のさこえある時新卒去といはんあは將軍家は元より　朝廷へも奏し兩六波羅も喪を發してこれ容易のことおらざるべくはたまさ國家平治の爲しはいへど　朝廷を始めたてまつり一天下をいつはることあるがゆゑあさど重病を得たまふとのみ記して其卒去をいはぎ其是非讀客の後評と俟つ

○良賢律師成長の事

并隱謀と企つる事

夫人さるや身を立功と旌を者一朝一夕のおをところならぎ歳月を積辛苦を歴ざきば功をおさぎ凡天地四時の運行一息の間斷おし故古往今來止事何らぎして悠久なり是を以て君子之ゐ法る宜おるうな鎌倉五代執權北條相摸守平時頼朝臣天下泰平万民歡樂のため晝夜に心膽をやましめ青砥左衛門尉藤綱二階堂信濃入道あ密意を告げ次男時宗いまだ幼年成といへども仮ま執權を與奪ゐし其身は別舍最明寺殿に引籠り所勞沈痾と稱して親族だゐ對面を禁じ密ゐ二階堂入道一人を具し抖擻行脚ゐ姿をやつし金殿玉樓に枕と高ふし錦繡綾羅ゐ纏はきたまふべきを身まは荒布の裳をかゝげあや菅笠ま面を掩ひ踏も習はぬ草鞋と履き小竹の杖を力ゐて二階堂あ扶助られ夜半にまぎれて星月夜鎌倉山を越たまふと知る人更まあらざれば最明寺殿こそ沈さ病痾ま罹りたまひけるとも最はや黄客とおりたまふとも區々さまゞの評判あ鎌倉中の士民首を疾しめ額を感めておのづから薄氷をふめる心地おりしが北條時宗いまだ弱冠おりといへども穎才怜悧おまば理非分明ゐしてその良たま戻らぎそのうへ青砥藤綱これと補佐おをがゆゑ人心やすやく治りやゝ安堵の境ひまいたりける其頃にあたつて伊豆の御山ま律師良賢といへる僧ゐり其俗性をたづぬるあ先年滅亡せし三浦義村が幼兒清壽丸と号せしが義村兄弟討死のときいまだ四歳おりしを義村が命まよつて乳母子泰十郎と

いへるもの清壽丸を母衣の内ゝ隱し千辛万苦して一方を切拔鑓倉を落のび東西南北に身を去のびつひゝ當山ゝひそみ居たりゝが其後十郎も病死おし孤獨の身とおりしを別當の愛育ゝよりて漸く長となるにおよんで良賢と名乘しむ元來十知の才あるが也去ゝ學業も日々に進ミしゝば別當もいよ〳〵愛憐ふゝりけりこのこと疾く北條家ゝ聞えけれども慈惠深き時頼朝臣ことさら得道出家となりたるを更にとらへて刑戮せんも便なき業と思しつゝ識容ゝて置れたり抑良賢が爲人奇才怜悧人ゝ超え螢雪の功蹟を積ぎゝて諸經を諳じ鍼繩の自戒を俟ぎして議論と悟るかるがゆゑゝ別當の覺えも目出たく一山の若僧原其頑學多才を稱譽なし自然位威肩を並ぶるものおく殊さら力量また衆に越て百斤を擧るに苦勞なくしかのミならず如何にしてゝ傳へけん隱形の奇術をさへ修練なゝ事ゝ興ゞて其不測ゝ見せしゝば山内の侍士青坊主をはじめ近鄕近村の俠客等まさ其力量劒法あるゝ隱形の教へを したひこまが膝下ゝ諂諛ぎる者多ゝのりける斯僧徒ゝ似氣おき動靜おして衆人を伏せしむる趣意ゝ彼亡父三浦泰村兄弟が志ざゝを繼ぎ時節を窺ひ人氣を計り一擧三浦の吊ひ軍して北條一族ゝ滅し當將軍を廢して先將軍頼經公を重補しおのれ天下の執權さらん事をほつするがゆゑおり然れば放逸無頼を厭ゝぎ己ゝ順從ぎるを惠みまさ財寶をあたへて志ざゝをむぎび猶忍び〳〵ふ譜代の郎等が子孫おんど爰ゝこに隱れあるを探りもとめて密のふ計策を授けおき專ばゝ時節を俟居たるゑ此ごろ時頼入道沈痾ゑ罹るとも既ゝ沒したりとゑ數口の風評かまびすしく人氣これが爲ゑ穩ゝおらざれば須汝哉時こそ到れるぞ今斯冰を踏ゞ如く危ミ思ふ虛ゝ乘じ綷を一擧に定めんふゝ日頃の本懷を達ぎべきと豫め示ゝ置さる譜代家の子の子孫その外惡徒等ゝ謀じ合するふ類をもつて集る俚言招のざるゝ山賊野武士等進んで黨ゝ加ゝる者都合三百八十餘人良賢ことに滿足し今ゝ發表ゑ反逆の旗おし立んこと心易し去りおがら當國ゝ北條が舊里ゝて一族郎從諸所ゝあれば爰にて勢を發せんゝ謀計なゑゝ似たるべしと手符を定め謀計を含め三人五人づゝ

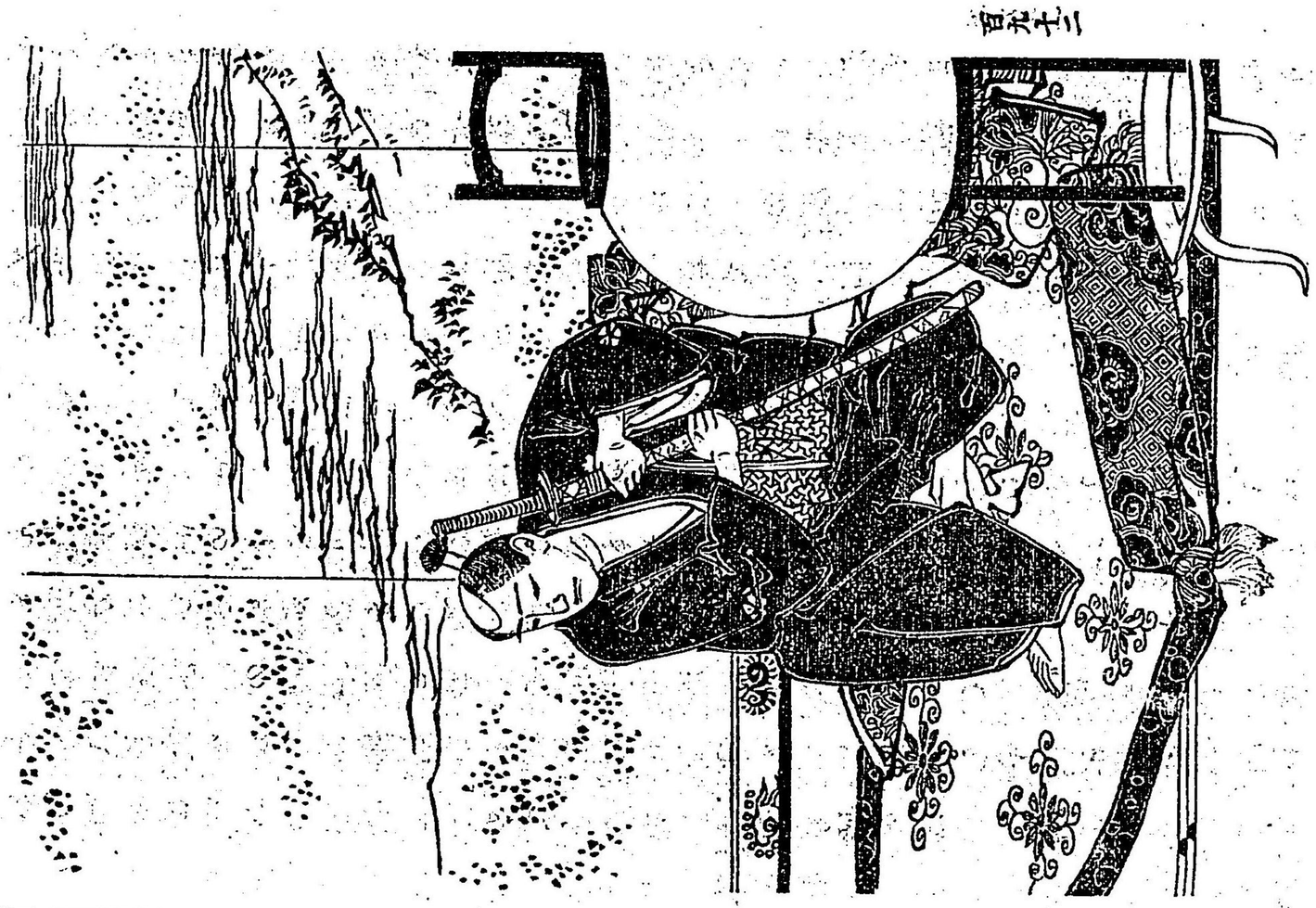
姿を変し忍び〳〵ゐ鎌倉ゟ登せ妾被所ゐ散在せしめ良賢はじめ羽翼の臣十六人い優婆塞に形容て日々御所および北條亭ゐ徘徊してもつぱら地理人和をさぐり夜い鎌倉より一里計ある地蔵堂ゐ參會して軍議しば〳〵調練し来る八月十五日鶴ケ岡八幡宮放生會修行の折から例によつて執權社參あるべその歸り路ゟ埋伏し不意ゐ起つて時宗を討取りおゞ諸侯等阡陌ゐ周章まべしその虚に乗じて御所へ切り入り猥狽武士ゑ叩ゑたて柔弱の將軍を掳こと し大小名を伏せしめんゟ誰ゐ隨順せざらん哉と軍議こゝに一決しさて鶴ケ岡へい良賢はじめ屈強の輩ハ十餘人御所へ討入る輩二百人其外百餘人い市中爰ゟしこに潜居ゟ機により變ゟ應じ強ゑ討て弱きを扶け將所々ゟ放火せしめて人民を驚怖せしめんと夫々ゟ手分々配を定め其日遲と俟居たり

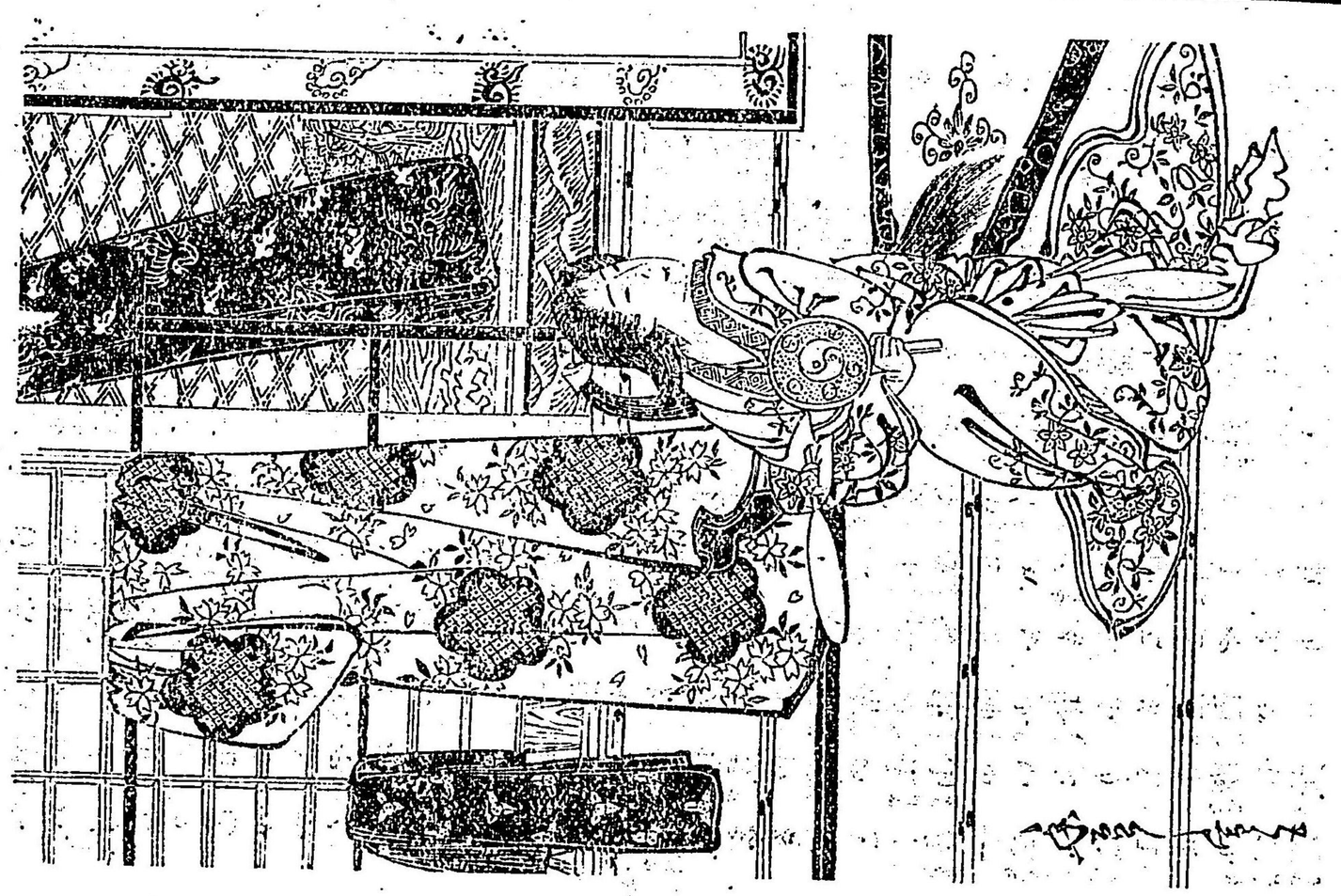
○小串重意が室夫を諫る事

并重意反心の事

爰ゐ新宮彌次郎重意といふ者あり其もとい熊野の別當阿闍梨定禪が嫡男なるが其生質薄弱傲誕ゐして父のいまゝ他の諫言さらゟ心ゟかけぎして已がまゐ〳〵舉動しかばおのづゟら道ならぬあとの數回ありけり父定禪とてゑ別當職を譲與べき者ならぎと重意廿歳といふ春おまを義絶おして追遣ふ重意初めいおか〳〵心ゟろしと謄太くも家を離れてこゝゟ十日ゟしこゐ廿日と日を送りしが實にや金錢多ゟらざれば交りまた厚からぎと勢ひある定禪が息おるがゆゑおのづゟら重意が無頼おるを人も堪ゑのびて交りしゟどもいつしか人心頼おく昨日まて兄弟の親みなりし朋友も今日い何とおくゝ氣疎き色あらいれ次第〳〵ゐ震落しをでゐ今其身ひとつのおき所さへおく十方ゟくきたる折から將軍家の臣ゟ小串九郎範行といふ者すおいち別當定禪が弟なりしが甥子重意の零落たるを流石不便ゟおもひつゝ我が方へ呼寄せ養育なし折ゟ觸れ閑ゐ乗じてさま〳〵と教戒なせしゟば謗ざゟ斬のしたゝり鑽ゟあらざれども石を貫くがごとく元より重意無頼なりといいへども才智もまた深きものおれば日々の教戒ゟ夜々後悔おし日を經るゐしたがつて

既ふ老實の色見えしかば小串範行もおとゝ滿足し兄定禪と謀りさいはひ範行ゝ女子一人にて家を嗣べき男子おければあらため重意を養子とし獨令嬢浪江といへるゝめあはせたり重意も伯父の恩遇と感佩し倍身をつゝしみ實貞ゝ諸事を勉めおとさら妹育おろもむつましかりしゝば兄定禪九郎範行もやう〳〵喜悦おしたりけるそも〳〵九郎が嬢浪江といへるゝ風姿容色ゝもとよりいたつて怜悧ゝして貞心もまた厚く重意をかりゝものろしめぎ日夜節と正しくつゝふまつれむ重意も二おく覺え最愛もつとも厚かりしが如何おる事ゝや此頃ゝ夫の爲躰何となく尋常ふ異りて見えければ或夜深更人鎮りてのち枕席に容を改め慎んで重意ゝいへるやうゝ日来君の動靜をうかゞひ見るに何となく苦愁ひしたまふゝ如何にも御物思ひありとゝ知る更さめ言舉も恥しおがら君が一夜の情ゝゝ妾が百年の命をさゝぐる況ん哉君に相馴てより早一年ゝまり今命を召るゝとゝもいのでか固辭ゆべ死斯まで等閑おらを思ひ侍るものを隔心さまふゝ御情おし希がゝくゝ何ゝまれ心限なく明したまゝゝ甲斐なく智淺き女の身なれど勝と懐きて思案したまゝんゝゝ思れる事もはべらんと涙を浮めて尋ぬるゝ重意も始のほどゝ物ゝ託つけゝ明さゞれど夫をおもふ懇切おる心を感じ重意も容易正うし今試ふ其許ふ問ゝん往古建禮門の御軍のごとく若將軍御所に御大事ありて父範行と某しと敵と味方ふひきわかゝおゞ其許ゝ父をそくたんとをるらまさ吾をたすくとせん哉浪江詞の下より是ゝおほせともおぞえぬとかな抑女ふ三從のいましめあり幼なきと死ゝ父ゝおたがひ嫁して夫ゝおたがひ老て子ゝおたがふ妾父母許して君ゝ配はせしうへゝ父への孝ゝ敗るともいのんぞ夫ゝ貞をつべきやよし〳〵御心やをく成したてまつらんと突と席をたつて一室より朝夕手なれし真十鏡兩手ふ二面を取り分けて傳へ聞く壯夫大事をさらんとき ゝまづ金打してこれを問ふと刃ゝいる女の魂ひ兩面おさ鏡の鉄心たとへ親ゝも兄弟ふもせよ夫の大事を他人ふもらをまゞき證ゝ斯と既ふ鏡を打あゝさんとをその手を重意おうと拿り動さおさ貞操吾ゝおいて滿足せり此う





へゐ何をゥ包みかくをべ死其許ゴも無てゐるごとく吾一旦放逐ゴより父定禪の追遣を請こゝやかしこと漂よひて伊豆の國の大山ゐいたりしゴ既に餓渇身ゴせまり一宿坊ゴ入りて一飯を乞ひしゐ住僧の律師良賢ゐる者何がゆゑゴ斯浪々さるやと問ふ吾こたふる丹其實を告ぐ渠敢ておもふことやありけん良賢懇切ゴ我をとゞめて坊ゴ撫育すること一年或とき己を開所ゴまねき其身の素生存意をひそゥ丹かたるに豈計らん哉彼良賢ゐ先年滅亡したる三浦泰村が子なりとゐ其うへ泰村兄弟が志ざしを繼ぎ時節をまちて旗挙上げ北條をうつて當將軍をゐりぞけ前將軍の御代とおさん結構此くゐだて丹荷擔せよと勸む某心中ゴおもふやう這哉小賢き逆謀立今時頼が慈惠ゴ浴し四民堪れど擊てたのしゐ國家靜謐の時津風枝を鳴さぬ大御代ゴ蟷螂が斧猿猴の月渠何ごとの仕出さん哉と心裡丹嘲りわらひながら一儀ゴもおよばず連判おせしが其より後ゐ心ゴとめぎわすれ居たるゐなんぞはからん過し頃當所扇ケ谷ゐて良賢ゴ出會ひ一列以來の疎情をのべ扨當地に登るゆゑを問ふに無ての志願をで丹時いたり徒黨の野武士三百餘人ゐのび〳〵ゴ當所ゴあつまり近々ことを成就せんとを其許さいはひ小串ゴあれば諸事内應をさのむなりと延引ならぬ辭の四張今さら昔時の恩義をわをを女々しく約をそむさがさくよし哉此身只一ツ双方の恩義ゴをつるまでと心を決しよりより丹渠が軍議ゐ集會して其詮をる處ゐゥ〳〵ゴ決をゥるがゆゑゐ今この件り一伍一什を遺書し腹かきやぶて死ほる覺期左ゐいへど舅の恩惠御許の貞節無下ゴなさんが殘念の一ツとおもひ内ゴみつれば色にあぶれ終ゴことのこゝゴおよぶ此うへゐ遺書にもおよばゝ我亡らん后父ゴ告げよといふより早く佩刀丹手を掛け自盡せんとなす浪江驚きその手ゴ縋りてまづ妾が一言を聞てたべ扨しゑゥゝる大望を告げたまふおとの感佩さよ此うへゐ善に惡ゴ夫の心ゴまたがひて妾も生死を俱ゐせん然りながら君よく思ひめぐらしたまへ古へのことゐいざ知らねども妾東西を覺えしよりこのゥさ北企能員をはじめ三浦黨流石一家の大名ゐてことゴ家門一族も荷擔なしたる叛逆さ

へ二日の間さへ持たへずみな一朝ゐ滅亡しつひゐ舊家の名跡斷絶ほいたんや野武士無頼の輩ら義おく信なく利欲ゑまよひ荷擔なしたるあつまり勢さとへ數千騎ありとてもいので鎌倉殿を覽さんやよしや謀つて時宗君拭害したてまつるとも北條の家族および臣等弓を伏せ膝と屈し良賢を執權として命拭うけんやいはゆる蟷螂が斧石と懷て淵ゐ臨むの諺殊さら君一旦良賢が恵みを受たまふとも元よりの御主人にもあらぎまさ御父君をむしめ小串の家何れも鎌倉殿の恩德ゑ成長さまへば邪をきて丶正に歸したまふともいかでう天の憎み人の譏りを受たまふべきや女の淺墓おるやごとおれど是をおもひかゑを計り如ぎ此ことを父に告げ自殺をとゞまりさまいんゐと搔口說て諫めしかば重意始終諸手を組でやゝ去ばし黙せしが實や女の髮毛もて絆へる繩ゐ大象をも絆げる金言日頃の俠氣もこゝゑ緩みけんつめ居たる息を吐とつき其許のゐふところいづれも理ありて我やうやくこれを悟るたとへ良賢ゑゐ不義といへども御所および養父ゑ忠と孝との二倫をまつたふすいはゆる邪をほてゝ正ゐ歸し逆を遠ざけて順ゐちのづく然おり〳〵とはじめて快然たる顔色拭見て涙江ゐ涙をうのめ斯むかりゐ決心したまふ隱謀をゑ妾が言葉ゑあらためたまふ有りがたさ左あらんゑゐ一刻もはやく父ゐ告げて商議したまへといそがせば實ゑ後るべきゑあらずとて涙江と俱に小串範行が居室おゐたる時をでゑ拂曉なり

○九郎範行良賢を征伐の事

并良賢行方知さる事

小串九郎範行ゐいまだ朝寢の床ゐありしが重意夫婦つねおらぬ形容をいぶうしみ寢衣おがら衾に座し其ゆゑを問ふ重意つゝしんで細言ゑおり抑良賢ゐ恩過とうけしより隱謀ゐ荷擔すといへども妻涙江がいさめ丹志ざしをひるがへせし事ども夫婦交る〳〵ゐ一伍一什を語るゑ範行ゐ聞がまに〳〵膝に兩手を突たて一ゐ驚き一に喜悅し一件具ゑ聞をはるとひとしく合破と身を起し勤服といそがしげゑ着し從者をも連ぎたゞちゑ北條學ゐいたりこ

の旨をうつたふ時宗のつ驚さのつ其訴を褒稱しをおいち良賢の討手を小串範行および平左衛門尉盛時阿曽小次郎行時の三將にめいぜ範行面目をわどこし盛時行時を私宅ゑまねさまづ重意を面會せしめ軍議さま〳〵調練し謀策手わけをさだめ時維弘長元年六月二十二日夜三將手勢五百餘人といてひそかゐ瑕ひの地藏堂をひた〳〵と取り圍を不意ゑどつと鯨聲を作り門戸を破つて討入れば堂内に充滿したる一揆の輩らいかでかおどろき怖れざらん破須哉隱謀露顯せゑ太刀の目釘のつゞのんほど切死せんといさむあれば隙ともとめゑのがゑ出でんと周章るあり三將の手の者強弱の用捨ふくあたるをさいわひ伺め捕り手強さわ討て取りいきほひ猛ゑ駈立れば流石無謀の無頼野武士等こと更ことの不時ゑおおゑば阿面〳〵と生捕ゑまさ其遁れざるをおつて物ぐるひとはたらく者ゐわ多人數むらふて討取りて一瞬ゑ二十六人を生捕十八人わ討すてたりきのる丹反逆の張本良賢律師いづくゐら潜びけん此うちゑあらざれば堂内隈々もとむれども更ゑ其志のぶところ

知らぎをおわち生捕の者を糺問をるゑ魁首良賢堂内ゑ居たり然かゑども渠隱形の術ゑ長じたれば衆人の眼目をくらまして志のび居るゐ必せりといへるゑ範行わあららゞめ此ことを覺悟したれば士卒ゑ命じ堂内四方の隅々と目的として亂矢に弓射こませしゑ良わとても堪へがたきをさつ一彼の術をもつゑ形容を隱しひまあらば遁ゑ出でんとためらひしが透間なく射込む矢先ゑ潜みがさくおんひもよらぎを射人三人と切斃し堂外に躍り出るを左知たりと屈竟の輩前後左右を追取り卷充捌めどらへんとひしめきしが良賢がをがたわ蜻蛉のごとく前ゐあるうとをれば後にあらわゑ左を擊ば右ゐらくゑ水だに洩すまゞと十重ゐ圍みたる歩卒の間をかおたこなたゑ見えつ隱れつ終ゐ行方を知らざりけり三將わ齒がみをおし猶八方を求むといへども其陰をだゐ見とめざれば力およばぎを討とりし首級および生捕を引て北條亭ゑ歸り其戰爭の次第を具ゐのべて魁首良賢を討もらせし罪をわぶるゐ執權時宗あつく其功蹟を稱し良賢をはしらしめたるわ遺念なゑどもいかん

せんかゝる妖術あらんかは然どたとへ万里を羽うつ大鵬と羽翼を失ふとき
は燕雀かひとしく千里と趨る猛虎なりとも手足を折られおば犬猫とおとる
良賢強勇なりといふとも羽翼股肱の輩らをうしなふと死は急ふ再び謀りが
さらんゆる〳〵と穿鑿あるべしと寛仁おるはからひは三将は頭を叩きて
拝謝しこゝより問注所ふ出て生捕の者共糺問し其餘黨をさぐるは南方の山
林北方の田家より五人八人づゝ搦め来りつひは三百餘人の数ふみちしかば
不日由比ケ濱ふ死刑なしことゝ〳〵く梟木ふのけさせ猶志のび〳〵は張本良
賢をぞさぐりける

○無量壽院は て供養の事

并法場修羅界と變ずる事

青砥左衛門尉藤綱は最明寺道崇の命を稟てもつぱら國家のため晝夜些しも
撓みおく天下の政事は忠臣賢聖を折から律師良賢が隱謀ときゝて易からぬ
おもひしは小五範行等が勲功ふて一舉ふこと鎮まるといへども張本良賢が

行術をうしなひしと云ひあまつさへ渠隱形の術をゐどこせば不慮の災害あ
らんも計りがたしと腹心の郎等は謀計状授けて出しもつぱら音信を俟ゐた
り爰ふ不測の珍事こそ出来たりけれ頃は八月三日秋田故城分義景が遠忌ふ
あたり死量壽院といへる北山の梵刹ふおいて經營ある去ぬる朔日を發願と
し二夜三日の間十種供養をおす今日はことさらその正日おまゝ晨朝より千
僧集會し供養あるをなはち導師は若宮別當僧正隆辯おり讀經誦法の聲空界
山谷ふみちゝ〳〵で諸天もこゝふ感じ賢聖まのあたりに影向したまひ下界蟲
獸等もこの聲をきゝて悉皆成佛おし得んと數千の參詣貴賤男女も隨喜の涙
をながさぬはなく伊勢入道行願武藤少卿入道心蓮信濃判官入道行一其外
秋田の從類等結緣のさめ山上は平張をかまへこゝは威儀を正し袖をつらね
て聽聞せしにそゞろに義景が面影さへ添心して悲涙止めが
たき折から一天墨おす雲おこりたちまち大雨降出て車軸を流すはことおら
ぬ嵐も暴風吹起り山上なる平張滅離〳〵と吹倒せば伊勢武藤をたゞめ其

傍らに群參せし貴賤男女ことゝく押ふ討れ手足うち折頭惱を討れたまたま希有に逃げ出たるも嶺より滑りて深谷におちいり即死半死の者數るに違あらぎさしも貴かりける大法會もまゝの母修羅の巷に變じはう〳〵無難の輩ども手足ゐ血流き泥にまみれ淺猿ゝりける形容おり然のるに同じく十日またもや大雨降出して日光沈没し黄昏のごとく物の間もさだのに見えぎ是ね仰いうにと危ぶむ處に十二日午の刻と覺しころ竜が谷を初めとし泉谷までの間所々の山々一時ゐ崩れ山麓の民屋ゐ土砂に倒き埋もれ少しほどへだてたる處まで山上よりころび落る巖石大木ゐうちやぶられこれがため親を助くるのひまもあらぎ子をすくゐんの暇だになし老若男女逃まどひ帝さけぶ聲雨の音に和して響ち今哉世ゐ滅して鎌倉ゐ泥の海ゐおるべしと貴賤色をうしなひいたづらゐ手をつゝねゐ其死期を俟ばゝりおりしぐやう〳〵其夜明ぐたゐ雨ゐれ風をさまり初めて天日を仰ぐほどなりしより倒れ埋まれたる一門親族每手鋤鍬をもつて土を堀木の根を除けて其失たる者をさぐる

に多くゐ柱棟の下に打倒れ平めにひしげて死たるがさま〳〵資財雜具などゐ堀れていまだ死もやらぎ半死半生の族もまた少おゝらぎ子弟妻妾こもごも死別のかなしみの聲洋々として耳に充てり青砥左衛門このありさまを見聞し急に執權時宗と密談して藤綱の下知をもつて扇ケ谷の廣原に方二町ぢかりの平張と建生殘りたる輩らをこれに住せしめ雨露を防がし三時の食を與へて飢渴を凌がしめ死亡の者一人ゐ鳥目二貫文を充て埋葬の料とし生のこる者どもへ三貫文づゝを與へて家職の基立となさしむまた諸寺へ觸て此度不慮に死亡のこのどもを執おさせんにかならぎしも覿儀ゝむさぎる事おくもつとも讀經引導等懇ろに勤むべきよし嚴重に申傳ふがゆゑ諸寺の住職も後のどがめあらんをおそれ物の厚薄ゝいぎ施主の志ざしまゝのせよのつねよりもねんごろに葬りしかば人民執權の慈惠藤綱ゞ執計ひを感佩し愁涙とゝもゐ亡跡をとゝらふゐも思ひがけざる憂にあひ夫をうしなひ妻子を先だて殊さらその家計の道ゝさへ絶えたれば遽に无常速迅の世を觀じ尼法師

に身をこのへて後世の佛果をもとむる者多かりしうばおのづから鑑倉中の人心おだやかならず見えたりける

○山内別莊騒動の事
并兩家改易の事

山内の御山莊といへる御別殿に將軍の御所十餘町東西あたりさる岡山にて後には遥に遠山を眺望し前には千里の海上一瞬にさはむ其絶景比類なゞゆゑ將軍ふもとゞ〳〵此處に御遊おしたまふ御留守居の外に勤番の諸士二組づゝのゐる〳〵日々勤仕して非常をまもる此ごろは彼の秋田義景が佛事より打つゞゝて人民困窮し何とおく鑑倉穩やうおらざりしより御山莊の御遊をもとゞめさせたまへゞ勤番の諸士もおのづから閑隙に乘じひそうに酒宴遊興をおこして勤番の本意をうしなふ者もおゐうりしが時には八月廿九日勤番士大屋次郎正友笠木平内國勝おり兩士とも將軍の御おぼえゞも目出たゞものうら自から家富榮えたゞひに花奢風流をもつぱらとし其潛上をあら

さふの心より今日の勤仕にも山海の珍味を料せし提重をたゞひに出して酒宴をはじめ酔興十分のうへ圍碁を始めしが大屋次郎つゞひて二番負さりしかゞ正友心中おゐいに焦ち今一度かこまんことを請ふ笠木平内嘲笑ひ止みなん〳〵其許何ごとゐまを負じ魂ひありといへど我にはいかで勝ることを得んや如き己が下風ふたゝんふはと願ひを摩で廣言なを大屋正友おゐいふいかり舌長なり笠木平内即今あやまつて圍碁ふこそうち負たれ何ごとゐ汝よおよばぬ以後己が下風ふ從へとは何をもつて劣きりと云ふ哉今一度ことばをいださばやはう其座は起せじと太刀の柄に手をうち掛けいさゐひ猛よつめ懸くれば平内も身構へし尾籠なり大屋正友汝が父おゐる郡治重春ふづうの俸禄ふ口喉を保じうねおは打ちかゝしたるありさまを我が父深くあはれと愛し度々米麥を合力しまい〳〵衣服を授與せしを汝雅心ふも覺えあらん其後汝成長しまやう〳〵君前ふ媚へつらひて今はふづかに困苦をまぬがるゝといへども斯我が父のさすけにて成長し汝なれゞ武邊練磨の程もおれ

たり凡士たる者衣服飲食に善美をつくしを人目ばかりおどろかさんとをる者にはさはめて武備うすしと聞けり今より改心し我が下風に立諸術練磨の功を表せよと傍若無人の失言をさゝもあへぬ正友に其舌の根を下斷んと只一討と斬らくるを左知つさりと笠木平内飛ちさつて拔あはせたがひに丁々と切むをぶ側にあり合ふ人々は是と鎭めんと立さわぎ彼方となだめ此方ばかり止めんとして過つを疵をううふり痛手を負ひいよ〳〵殿中騷動をるを兩士が郎等これを聞つけ殿中にふん込み庭上に亂入しおのれ〳〵が主人と助けんとたがひに打合ひ切り結びさりつ返しつ爭戰す笠木大屋が家族親類をづめんと駈付くるもあきば與力せんと駈向ふにありて市中を東西に馳違ふさわだに風雨の變事に人心おくせる折らなれば須破またもや叛逆人ありてをどおく人家を燒うちにするぞなどあらぬことども云ひふらせば面々資財を肩ふらけあおたこなさに迯げたしる然れど大屋笠木の兩人はつひに相ひ討に討死し郎從等もあるひは討れ死しあるひは手負をどな〳〵騷動もあづまきり時宗問注所において兩士口論の始末こと〴〵く亂問のうへ兩家の落着裁判を頭人評定衆に問ひたまふ衆評まち〳〵にして大屋を是おりとするあきば笠木をもつともなりと云へるありて衆議こゝにふんぷんたり時宗青砥藤綱に問ひたまふ我此判談は決をといへども猶衆評とおして其よろしきを為たがはんとを汝が異見はいかに藤綱つゝしんで大屋笠木の兩人ともに若輩おりといへども武邊においては拔群にして自然の用にも立べきとおもひしに曩頃より君寵をうけこり衣服に美をかざり家作をきらびやかし奢侈分限を越えしらばかゝる珍事もあらん哉とかねて兩家の一族に告げてより〳〵異見おさしめども己をのへりそこと能はざるゆゑ果してことの爰におよべりそも〳〵今度大切の勤番中酒宴に長じ遊樂をことゝしあまつさへ贓物の勝負より私しに無益の爭論をおこつひに命をうしなふこと不忠とやいはん不義とやいはんさらに是非を論ぜべ充にあらずそも〳〵知行俸祿をのさしけなふして妻子從卒を養ふこと國家の一大事に君と安んぜたてまつらんが爲

めなるを却つて君とのろんじ己を利し己を勝れるを惡み劣るを忌しへたげ著侈をほしいまゝふしまを人を憐れまずいつわりをかまへて仁義を背くこれみな國を亂し家をほろぼすの基ゐ嚴しく誡しめざんばあるべからず是をもつて大屋笠木の兩家においていたとへ器量の子弟ありともおらず家名を立さすべからずをゝやかまを沒收せしめ妻子從卒流刑たるべしとはいかるところなく言上すれば是非とあらそひし頭人評定の面々始めのことばゐ引かへて一言のこたへも得せず深く道理に感伏しかへつて己を恥ぢたるありさまを時宗も喜悅おし藤綱の異見我がこゝろを符合せり此うへは衆判をまつまをおよばじと大屋笠木が一類を呼び出だし青蓋がのぶるところの罪名をかぞへ兩家の家名を沒收せしめ妻子從卒を流刑ゐ處せしめたまふ嗟呼一朝のいかりをその身をわをれ科おゐ妻子を憂を見せ從類まで禍ひを釀し家名永く絶亡おさしむることと有るべしつゝしむべし四民ともに守るべきは忍の一字上世後代といへども朝夕一ばらくも忘るべからざることをおん

○大橋團平佩刀を失ふ事
　　并小平太自腹して身を潔くせんとする事

衆愚の謂々たる一賢の唯々たるゐ如きを宣おるゝ其頃北條家外樣の臣に村田小太平大橋團平といふものあり原より小身の士おるがゆゑ中間は一人づゝ召しつかふといへどもいまだ妻を俱せざる後易きゐ世事の費をたかり兩士示談して相部舍を住を勤仕のひまは兩士机をならべて聖語賢辭ゐ心をみがきたがひにこれを論判し朝は道を聞ては夕ゐこれを行ん事をほつしのりそめまを邪まと惡み正るをもとむる事をもつぱらとおすがゆゑ傍輩の間兄弟より猶むつまじのりける或日團平當番にて早朝より勤仕せゞ其日はことは公務しげくゝ夜半の頃は下宿せり小平太は猶書をひらき古人を友としてありけるが此とき書ゐ枝折を入れ机を直し團平が終日の勤勞をおぐさめおばらく物語りおしていざや周公が夢をむすばんと俱ゐ寢ちたはゐふをて伏さりしが翌朝小平太は當番にて

早朝より出仕せり團平も俱ふ起出でゝ、兎角心ぞへして小平太を出して後不圖刀掛を見るゝ掛おいたる佩刀のあらざれば兩人の中間ゐたづねるゝかつて知らざる由をこたへ俱々あらぬ處までゑ捜り求むれどもたえて見えざれば團平ゐ茫然とーて兎ざま角ざま思慮すといへども外より人のゑのび入るべきところゝもあらぬ止むことを得ぬ其まゝ徒らゝ日をくらし小平太が下宿をまちてこの始末ゑかたる小平太ゐこことゝ驚きひそうふさまゝ〳〵さぐゑもとむれどなほその便をと得ざりけり實哉惡事千里をはしるおらひ誰いふとおく團平こそ佩劍を盗まれけれおよそ武門の祿を食む身ゝて物ゝこそゑれ劍刀をうーなひおがら知らぬ兒ゐて日を送ることゝ勇おく義なく智もまさるゝ其力のゐども左こそおんどひそ〳〵とさゝやくを聞て團平最早さへゑのびがたく執權ゝ一紙の表と捧げ我いやしくも君祿どのたじけなふぬる身ながら不幸にーて佩刀をうしおふことこれ主君の威名を汚したてまつる處其罪おほいおりこひねがはくゐ御慈惠をもつて自腹つかまつり度旨を申述べたり時宗滿面ゝ色を動しゑばらく思あんーゑもつともの願ひ去りながら我ゞ思ふ仔細あれば下知をるまでゐ自腹俟べしとをゐち村田小平太ゐ團平を預け直ち丹頭人を召れ表札を見せ團平が佩刀をうしなひしゐまつたく不忠のいたりおりと自腹んの願ひゐもつともなゑ併るゝ我が居館に近きを恐ゑ倫盗の徘徊なし小身おりとも北條家の臣等が劍刀ゝ盗み隱すゐ是までつたく我ゞ制度のおよばざるゐてもつとも慙愧に堪ざるところなれば嚴重ゝ穿鑿なーー其盗ゑ走らをべからぬと常尋ゝかはりたる嚴命ゝ頭人等恐れいりて直ちゝ倫盗方の歩卒數百人ともつて水もらさじと穿鑿あるゑゝ第三日目の朝村田小平太物を取り納めんと已ゞ長櫃の蓋を明れゑ豈はからんゑ紛失したる團平が佩刀入れ置きたり小平太ゐ驚天しいそがゐしく團平を招きこの佩刀をゐたーてをぐゝ小平太自腹せんとす團平もおどろき其手ゑ押さへて其所以を問ふ小平太こたへて我も知らぬ今ゑこの〳〵のことゝて我ゞ長櫃を明るゑ此佩刀の入りたるぞ是ゐ我ゐ意趣ある者の所爲ゝまたゐ公命

の嚴重なるによつて藏をよところ無く此處迄戻し入れたるゝ此兩個ゐゐ出
を去るあがら其證明白ならざれば陳ずるに言葉なく濡衣を乾きことかたく
うるがゆゑに自腹して我が赤心を知らゐほとゝろなり團平ちう點頭足下の
義膽斯あるべしまゝ餘人ゐ知らず甚しまおいてゐ弓矢八幡も照覽あれ貴
許をうたがふの心おし其うへ一旦公ようつたへしうへゐ此始末を言上ー左
も右も公命ゐまかせんと一伍一什を一紙に載てまた時宗お呈せしかばすお
いち直ちに青砥を召されて曰く小平太團平のともがら柔弱の者ならぬを兩
度ちのび入りさる不敵の強盗いかよしてこれを捕へん哉藤綱頭首ーて執權
尊意とやすくじさまふべし我れ粗其盗人をさぐ嫌知れり明日是非ど分ちや
べしと御請をや上てぞ下りける

○藤綱明察の事

并休齋罪に伏する事

斯て翌朝問注所ゐゐ例のごとく正面ゐ時宗左に青砥右座ゐ頭人評定衆列
を正し椽側に小平太團平兩人低頭せり歩卒團平ゞ盗まるさる佩刀を持ち出
れば藤綱あらため座右に置ざさて時宗が小性をして茶道休齋に命ゐ茶を点
ゐ来たらしむ休齋何心なく天目ゐさゝげ出おの体を見て心憶したちまち顔
色土のごとく縮々然として時宗に茶をたてまつり退ろんとまると藤綱聲か
け如何ゐ休齋たーか弗聞け人の性ゐ善なり不善おらぢろをしびがお人欲の
私し弗よつて其善ゐ掩ふて物をこのもむ然かるども其不善ゐ知てまた原に歸
もこゝ善にして罪おしとせんか決よくこれをかんがへて如ぢ事の仔細をや
明さん弗ゐ如何ゐ心得たる哉返答せよと凜然さる青砥が一言休齋ゐ頭上ゐ
逐雷の震落こゝちにて顔色ふたゝび變じ身を縮め仰せのごとく一旦てさゞ
ゝろ弗よつて合璧にあのび入つて團平子が刀ゐ掠むゐられどもゐりぞいて
その道おらぬをおそれ先非を悔ひてもとへ歸せり一旦の罪を赦したまへ藤
綱うちうなづきその刀ゐをおいちこゝなるべー休齋少し頭を擧げ然かおり
とこたふ藤綱然あらん左おるべー如何ゐ團平今休齋が白狀たしかに聞けり

や然らむ此刀を請取るべしゆるさるゝあひだ其白刃をあらため休齋ヨ暇まつのゐをべしとさつと目をれば團平おもをさつし有りがたくと云ふまゝヨする〳〵と寄ると見えしが拔討ふ茶道休齋が坊主首砂上ヨ故路〳〵と轉んだり藤綱ゐ手拭拍て盜人を手討ヨおしあまつさへ手術の神速藤綱ゐどんど感心せりさだめておれを傳へ聞輩ゐ前日ゐ誹謗せしを愧おもふべし左りながら兩士とも齋が兩度出入りせしを知らざりしゐ落處たるべきまゝ即今より三日ゐ引こもり其後出勤これまでのごとく猶さら忠勤おこたるべからぞと仁慈をのねたる青砥が裁判一件こゝゐ落着せり時宗あらためて藤綱ゐむかひ今般の始末理非明白の執りはらひ先年父時頼君が小次郎をして父の仇とうたしさまひし仁惠と同日のはのらひ感ぞる處おりおかしながら茶道休齋が此盜なりしおとゐ何を以て汝これを知きりや藤綱頓首して臣いやしくも時頼君に登庸せられ評定の連列ヨくゐへられしより以來腹心の者をして尊卑をいはぞ貴賤を論ぜぞ常の行跡を探ぐらしめこれを心膳ゐ銘しおくこと多年今もおゐ晝夜おばらくも間斷おしおかるに彼茶道休齋つねに爽道をおのんでおば〳〵人を誘ふおよそ四民この道ゐ心を寄るものゐおのづから人情ヨ薄くしてはおただしさゐ倫盜をおすかるがゆゑヨ嚴重ゐ戒めおかるゝところなり昨日某しを召れしとき休齋公の側らヨあつて某しが顏色をしのんでうかゞひ心中をこぶる恐懼の色ありこれ人ゐ知らざれどもいたゆる天知る地知る我知る聖言おのづから渠おることの心中に的をこれまつさく藤綱が智と云ふべからぞすなゐち天理おり人恒の產おさゐ恒の心おく休齋その身君祿をかたゞけおふーおがら日々ゐ臺子のもとヨ松風の音のを聞き命あれば點茶の勞のみいさゝうも朝暮心膳を練の業なく依て爽道まさゐ人欲を恣ま・ふせん工みをおを士たる者ゐ勿論日夜君ゞさめヨ心身をむげまし朝暮武邊を琢磨を農ム耕耘のため身を勞し心をムこばしめ商工猶おうり四民おばらくもその家職をわをるゝとさゐ己が分限ををごし大屋笠木のごとく珍事あり士庶人にいたるまで晝夜慎しまぞんば有るべうらぞと

憚るところなく言上すれば時宗朝臣も感慨したまひかたいらよ候せし頭人評定其外の面々いたがひよ目と目を見合せて心中よ青蓙がふるまひを恐怖なしたりけり

○寡婦謀て鶴子を陷んとする事

并鶴子志摩川に戀慕の事

北條家の輕卒よ高矢甚左衛門といふ者雪の下ゑ住けり富るとゑもあらざるどまた貧しくもあらざりけり一人の娘あり鶴子と云ひてうゝる身輕さもの和い似氣なく沈魚落鴈の風容おれば夫婦寵愛おをおらでまことよ掌中の玉と養育しが既よ二九の春をむかへしうゝ東西より娶らんことを乞ふもの多しといへども甚左衛門夫婦おもふところありとて是ゆうけがいを此處よまた壁隣ゑ三十歳ばうりの寡婦名をお隈といへる者あり原より賤さ女の習ひまでかりそめゑも人の善惡を誹謗して己が樂しみとする者なるが日々ゑ鶴子が方よ来り口喧るい笑語なせると甚左衛門夫婦い勿論鶴子も氣疎く思ふといへどさをゞ合壁のことなれば強面も云いて中庸よあしらひけるが或とき鶴子徒然のあまり門邊ゑ立て袖もて鼻の元をおほひ片面門戸よのぞくして外の方を眺め居さるよ彼のお隈こゝよ来りとも〳〵往還人を見るよ老たるあり若さあり脊高さひくさありて已がさま〳〵行うへるを彼お隈雨夜語りならねど知るもさらぬも顔容あるひい衣服の好をおんどひとつ〳〵に品定めをなし齒の根えあらいゑ打笑ふ折うゝ年頃廿ゑ三四こえたらん壯士左まで衣服を飾らざれど温順ゑしてうつ威有り武備あつてかつ風流おりしゞ物遠いしき容よて通り懸うり彼のお隈を見て莞爾と笑をを含み目揖して行過るをお隈も禮を返しこい珍らし些と立寄さまへおど云すてつゝいかよ令壞あれ見たまへ彼壯士こそ白無巻の浪士柔術を教授しさまふ志摩川氏の令息よて嘉一郎ぬしといへるゞ去年の今月今日許父とうしなひて今い孤獨となれる最愛さ吾儕もかの家の隣るところゑ住たれば幼稚よりの必ばへも能く知りて優ゑやさしき壯夫おり壞をもうゝる美少年ゑ配偶たらんぞよかんめ

れと獨り點頭まほこり顔まいへるに鶴子はさらまこたへもなさで彼の少年の後影を足爪だま、見送りつゝ忙々然たるありさまとお隈よく見ておほいふ呆れしむらく其体容をながめ居つゝやがて背後徐とたゝき何をゥ左のみ見入りたまふぞ鶴子打おどろき面をくわつと桃色し慙愧き体式ゆらはーて能きあいらへつゝ内ま入りしがいかゐる奇縁のこゝま迫りけん元より鶴子かりまもたはふれたる生質おらねど彼壯夫と一目見しよりいたづく心や發動き心神恍惚として寢れば夢見覺れば面影たち添ひて更ま忘るゝ隙だまおく是よりは何となく篠竹の調びも樂ゥらを紡績ぎの業も物憂く飲食さへもたえ〳〵まて重き病ふと見えぬれはさらぬだま人の親の寒暖風雨の天工さへ障りなゥれとおもむ子のいたんや斯ばかり徒おらぬ勞疾いかで驚死おそれざらんさつそく醫藥をたとめ勸むといへど草根木皮のおよぶべき病ならゆ孫ばをこーた其功驗あらざれば心神をいさめ肺肝を勞ーさま〳〵看病おしたりけるこゝま彼喧々女日夜鶴子が勞病を見舞ひお来てあるとき人おき隙

ゆうゥゞひ鶴子が枕邊お聲をひそめ壞が斯惱みたまふやまひの根は妄とく知る何をゥ左のみ苦愁たまふらんさいはひ妄が知己おれば壞が切おる情を告げて彼人ゆこゝまーのばせなんものをといと頼母しく說さとせば鶴子もはじめは陳じたれどその病根をさしあてられ渡ま船の便り式得て嬉しくもまたはづかーおがら過ー日壯士を懸ねんせーことどもと明白に告げ仲裁ゆ易げまのたまへど如何ませんものがたゆ父母をやお隈がやゝ〳〵と笑ひ怜悧けれども流石は弱女爺尉は勤番お隔日の他宿老嫗は我ま〳〵く計らはん心強く待給へとてかへりしが原よりこのお隈はその性をこぶる姦曲邪智ふのく其うへ身持も多情舜落まて姦夫さへ數多もちてもつとも無賴の者なるがいつゥ心裏お思ふやゥ抑かの鶴子が事は此邊りおての美婦人おれば懸念する若者をくおからぞ願くば嫌人しま勞力代多許ものお會せんと思ふ折柄お隈が姦夫八助といへる者入り来るお隈はよき相手を得たりと聲式密めかの鶴子が一伍一什を語りしの〳〵迄はこしらへ置さりさまど彼志摩川は裾

貧乏の腐儒者世話したりともゐねをりちんいなし幸ひ足下出入りの旦那横町の造酒家源五郎うねて鶴子ゐ懸念のよし聞く其許渠とよくこしらへゑ合せゐば一廉の勞力賃を得べーさらば足下と兩つ割りゐおさば樂ーのらんハ助ゐく〳〵打ちうちづき能し〳〵我れ源五郎と謀ゆべーーうし寸善尺魔の諺言あれば今宵しのぎせさらんまいな如何まお隈指を屈め調度好甚左衛門いな今夜宿直ゐり老婆を伺ざむかんいな妾ゐ妙計有さらばしかく〳〵おさんこうこうせよと額をあいせさゝや扨ゑハ助をいだしやり其日も申刻ゐいそがはしく隣家ゐいたり老婆ゐむかひ此ごろ御壞の疾扨を妾もやを扨こゝろもゐ扨がまゝ心易扨ト者ゐ筮せしに是いな此女いな未だ幼な扨と扨地藏尊ゐ不淨を穢したる佛罰なりされむ今諸人の尊信ゐし刹生もまゝ目のあたりゐる濟田の地藏尊ゐ參詣ゐー我が知らざりし過ちを詫たまいゞ愛憐ふのき尊靈なれば極めて快氣すべーゐりと願いくい愛壞のため勞扨厭えでまめりたまへと實しやかゐ勸むるゐさゐきだまま親慮老母いことまま歡びて他人さへ斯ばかりゐ

欠

MISSING

いそぎよ急ぎてかへる音よ忍男いのでおどろのざらん足よう〳〵りし引〆帯を後の紀念しと手ぐりよせあわて騒ぎてかへりけりお隈ハ前刻よりへざての障子に身を倚せ耳をそばだて、其首尾いのよと窺ふところ老母歸りの音高く門の戸ぐわらりと引開れば お隈心得聲高ふ是ハいとはやく歸りさまへりさぞな草臥たまふらん嬢ふハ母公の真心もてかへりまふでの冥慮ふや今宵ハいつより快よきまゝをこし眠氣のつきまたりされど灯火の射目けまばゆ
おば〜除よとのたまふから此方へとりてゞおきたりいで起しまゐらせんと幻燈をもち障子お〜明嬢よ母君のかへりたまふまと被ぎ〜薄團を少し取り除けこハ恐き夢や見たまひけん身内ハ汗よ濡たまへりと後さき老練のたゞらひ丹老母ハことの有りしも知らでお隈が懇情ひ拭厚くねぎらへばお隈ゝ〳〵と打あらひおよがさてわが身より貴躰のいたく疲勞たまハんもたや夜刻よも更ぎたればゆる〳〵と寢みたまへまた明朝こそといとまと告げ立かへり見れば八助ハ早ささり居てお隈を見るより其許事よく調へ〜といひ

しよ源五郎主我許来まして今宵の時宜ゐ何ごとゑや是ゐ吾をして恥辱かゝしめ樂みゐせん結構かと案のほうゐる腹立ゆゑ其やうをを聞けばしら〳〵と鶴子がさらゐ身を許さず七日十日ことを延をされど寶の山に入りゐながら手をむゐしふをることやゐると強て璞玉求めんとせしよ老婆が歸宅よ本意ゐくも解たる帶をちかひの紀念と提かへりたるが今宵の得ものかゝれば勞り賃ゐやらゞといへる是理りよあらをやお隈黙頂さもありゐんされど誓ひの爪掛ゐらぬ朝暮君ゞ手よふれし引〻帶ゐ二世までも固くむをべる常陸帶これよ優きる得物ゐあらじハ助ゐ猶うしらを振りいや〳〵誓ひの其帶も歸る道にて取りをとせば是非よ翌夕また忍びて冤うくよことを定めんまゝ其許猶よく首尾なせよ其後あつく勞直せんといへりお隈かや〳〵と打あらひ男たましひの甲斐おくていうゐ周章て歸りたらんそゐ冤まれ翌の夜ゐ惡し一翌夜こそよかんめれ我またよきよ計るべし今宵詮ゐさの奇緣ゐゐ〜と酒酌をかゐし杯盤狼藉其まゝ妥よ枕をならべ巫山の夢をやむをぶらん

○鶴子病氣の事

并奸士を追ふて甚左衛門横死の事

扨も鶴子ゐ一朝志摩川の壯士を垣間見これが爲ゑ寢食ゑさへ安んぜざりしがお隈が世話ゐさんの仲人辭ゐ身心おのをのら快よきを覺えもつぱら其音信をまち居たるよ前刻お隈ことばを食て老母をすかし他よ出し今宵戀わたる其人のしのび来るよ〜聞ゞまゝゑ又さらに胸おどろゐれ去るゐても母君の我がためよとて偽りの有る無し弁ではる〳〵と子をおもふ闇の夜の道翌朝ともいゐで老の身の歩みを運びさまふ慈愛海にも山ゐも競べがたさその父母ゐいつゐり忍びひそかに偕老同穴の契りをなさんも空おそろしといへ明くれ戀ひわさるその中川の渡し船乗おくきなばまたいつの相ひ見んことも難からんどうしてやよけん角やおさんと孝と戀との二道ゑ心一ツを分かねしゞおよそ妹脊のまゞゐりゐ出雲の國ゑ神あつまりとく妻定めまゝませば假令いうゐかり想ふとゑ緣〜あければ見えがたし其を私しよ邪まおさ

び天地の神の憎みを請け殊さら父母をいつゐる罪いつゐに遁れ果べけん我あやまれり〳〵と日来迷ひの雲はきて明月出る折のらに彼の忍び男の早来れば物に詑てやう〳〵其場をのがれ倩〳〵おもへば今宵のさま何とやらん怪しけきに密うゐ臥處を起出て辟れる家を窺へばお隈が聲して誰やらん先刻の始末を語るさま慥ゐ夫とい聞えざきど臘氣あがら源五郎が勞をりちんを與へしなどいぶかしき事の多かきばこれよりお隈に不圖〳〵と相見ることなきゞりけり嗟嘆男女の道その愛欲に引れて是非をあやまつこと間々多きに況んや鶴子其性怜悧なりといへども既に情人に見ゆべき期ゐのぞみ慈母のいつくしみを感じて日来切ゐるあだしごゝろと孝行におもひ返せし貞潔ゐまつたく老母欺むうきゐがら我が子の本腹をねがふ真心より妻婦お隈が奸曲におちいり思ゐぬ人に操を破り世の笑ひぐさとなるべき拭地藏薩埵の愛慈しさまひ其病因を斷たまふゐらんと後にぞおもひ合されける斯て第三夜ゐあたつて鶴子が父の甚左衛門ゐかゝる密事ゐ更に知らで今日も勤仕に出でたりしが止みがたき所用ありてにはうに同僚に語合て夾の刻の漏計を聞き急ぎて私宅に立歸るゐ斬つゞ死ゐる柴折戸を密うに明んとはる者あり甚左衛門いぶかしく忍びてその容体を見るゐ手拭もて面を包きいと長き脇差と佩つゝいろ〳〵として扉を押明け忍ぶ容さてゐ盗賊ごさんゐきと續いてぬき足さし足し其形容と窺ふに曲者ゐ爰彼處うかゞひ是なんめりと打點頭鶴子が臥處を明んとき甚左衛門此とき發聲て彼曲者を捕へんとき彼者ゐ一驚し身を飜して逃出るを這奴卑怯ゐりと後より大喝一聲して飛びゝる彼絶躰とや思ひけん佩たる刃拔はゐ後へに丁度滅多撥に甚左衛門が天壽こゝに盡たりけんあゐれむべし飛来る白刃胸さきに爲突と立つ脉絡にさまらぎ甚左衛門撞と俯伏しに倒るゝ勢ひに白刃背髓にさしつらぬき二言と云ゑを死さりける其ひまに曲者ゐみかへりもせぎ逃げ去りたり此物音に老母鶴子こゐ〳〵おがら手燭を照し能く〳〵見れば豈ゑのらん甚左衛門全身朱に塗たり兩女ゐいかで驚ぎのざらん我が夫ゐふ父上ゐふと聲を擧げて呼

び立れど甲斐おく答へもあらざれば是は何者の仕業ぞと枕方後方よりどうと座し餘りの事に目睜口果怪然とーたるむかりなり此よびこゑを聞よりもお限をえどめ四隣のたのども馳付きてさま〳〵と評議をれど其始末の辨ちがたく盗賊の仕業ともまたは意趣をや請るのと異口ふ詈るあかたへあ物こそ落たきと取上げ見ればおもひたや先の夜の忍男が持てかへりたる鶴子が引〆帯なれば鶴子お限は心裡よおどろけど老母状始め他の人は此由縁さらよ知らされば鶴子ぬーが引〆帯いうよしをか爰ふ有りけん然あらばいよ〳〵盗賊の忍び入りしを主これを捕へまくーてかへつて賊のため死せしならんと評議此處に一決ー翌朝つとめて公けふ訴ふればすなはち鑒察使歩卒を引て出来りさま〳〵紛問おをといへど其始末あきらかならざれば彼の引〆帯と甚左衛門が死骸よつらぬく白刃とを取持せ鶴子母子を連て官所に歸り頭人評定に仔細を申頭人問注所に出て兩女状呼びまづ鶴子に帯の仔細を問ふ鶴子面を赤ふしまいと恥しき事に侍まどゑ何をか包みやべたと抑お限諸共門邊に立出て往来ふ人を眺めー折ふの志摩川氏を懸念せしよりお限あれを世話ーて其情人状忍ばせしふ母のいつくしみの有りがたさに春ら心をつゝしみしより枕席を辭せー一伍一什落もなく申啓そのときよりして此帯の不圖ふ見えねば其人の持歸るふやとおもふのみ夫より後は何ごとも絶て知らずと始終り委細〳〵に答へーうば左あらばとて白無巷なる志摩川嘉一郎を召捕り其始末を紛問をるふ嘉一郎は自若として是は存じよらざる儀をうけたまえりはものかふ某し祖父おるる者は秩父家の家士おりしが重忠君讒者の舌頭ふて家名を失なひたまひーより二君に仕へたてまつらで浪士とおりつゝ、劒法状以て家業とおし側ら儒業を兼て生涯と全ふす父また此二業と相續して門人數多隨從すゆゑに某し幼童より經論を勤學ー劒法を練磨せーめられやう〳〵聖賢の確言其うたはらを聞識しのる丹昨年父没し不幸ましてゝ獨夫とおりしを古さ門人等の助力によつてまた其業を繼ぐがゆゑ朝暮身をつゝーみ行ひを正うして家名を墜さゞらんことを思ふのみもつとも過日所

用ありて雪の下を通りし折から[illegible]年近隣に住せし寡婦に隈なる者に逢がゆゑ一揖して過ぎしが後ふたゝび相ひ見ることなく彼邊りに高矢氏の宅ありとも知らざれば少女の有無勿論ぞんぜべきやうなし殊さら少女に通じ其父を害をなど且不通存ぜざる處恐れながら鑒察とおひねがふと前後一点のとゞこほりなく老實面目あらはれたればすなはちお隈を呼びて嘉一郎が中陳するところを以てその虚實をたゞすに始めは兎角陳ぜといへども嚴しき問狀ふのくをことを得ぜ八助と密話して造酒家の源五郎をみちびきたる旨を白狀すよつて源五郎八助兩人と召してまづ源五郎に其仔細と問ふ源五郎仰天し是はれもひよらぬ御たづねかなもつとも高矢氏は近邊にしてうの鶴子のおとは能く存じたれば朋友おんど打つどひて女の品さだめおど爲を折らは緣しあらば一さびよしても彼の鶴子には逢ひ見さくおど雜談戯語はいたせども八助が堪分にて彼の亭へしのびさるまゝ枕席をあらそひたるおんど夢にも覺悟つのまつらぎ賢察ひとへにおひねがふと答ふぞ八助にその旨をもつて紀問をるにたゞお隈がたのみによつて源五郎にその趣意を通じさりとやいつはるさらばとて源五郎と對話おさしむ源五郎いはく汝おにをえつて己ふゝる無寃をいふや八助こたへて其許かねて彼の女に心と懸るがゆゑに我がみちびきを歎んで去ぬる廿四日鶴子が許に忍ぶといへども其本意と遂ざるうちに鶴子が老母の歸りし再おどろき無体ふときたる引ぎ帶を後のゑるしと持歸りたるのみゆゑ勞力代はあたへどといはぎや源五郎おほひに笑ひ其閨中の始末汝いうにして其くはしきを知るや八助眼をいからし誰にか聞かん其許手にとるごとく我に告しおらずや源五郎曰盜人たけだけしとは汝がことと左ては汝が我源五郎となりて鶴子を計らんとせしならめ明白にや上げよ八助おほいにいかり汝こそ己が罪を此八助に讓らんとをるが相公渠を嚴重にして白狀なさしめたまふべしとあらそふ源五郎此とき頭人ふむかひ少子かねて濟田地藏尊を信仰なしをなはち去ぬる廿四日黄昏前より參詣せしが本堂前にて鶴子の老母に面會し其ゆゑを尋問ぬる再娘が快

後を祈らんためと聞き老人の夜道笑止ゐ存じをゐいち歸路い同道し高矢氏の門戸まで送りたり今さんぬる廿四日とうけたまはりまた老母が歸るおどろきなどの言語を以て少子あらざることを知ろし召したまふべしと述ぶるに八助はびつくりし首と低れて一言の返辭もおさぎお隈もはじめて八助よたばかられたるを識る頭人をゐいち鶴子が老母ゑ此事を正をところ源五郎が申狀にたがはざきばたゞちに八助を引伏飽まで鞭打てそのありていと責問ふほどゐ八助今はたまりかね兩手を舉て策鞭をとゞめ此うへいかで包み申べきそも〳〵去ぬる廿四日朝お隈が許ゐいたりし鶴子が嘉一郎を懸念おせしと云ふ〳〵と謀しおきしが嘉一郎い貧乏儒者ゐてこきを執持世話おしたりともいさゝも身ゐ益なし勞力代の多からん者に會せんとて吾儕が出入をる酒造源五郎かねて鶴子を想ふよしさけば彼ゑ世話おし交せたらば禮金も多ゐるべしといふ我これを諾ひつゝ思ふいわきも彼が美色さを知きば他人の世話なさんよりとてもいつはり狀なをれば己が得物となきまし

と勿論源五郎ゑい露知らせきお隈も計つて老母を他引させ我やう〳〵ゐ忍び入りしゑ鶴子さらゐ身をまかせぎ這哉此まゝにかへらんやと種々いどみ爭ふ折ゑ老母物より立かへるゐ驚き無躰ゐとさる上帶の手ゑのこると後のをるしと手繰よせ懷ろゑして立出でしが人や見るかと心周章お隈が方へのへりて見れば衣の引〻帶をいゐゑして何方ゑか取落しけんさらに懷中ゐいおのりしゐどこきをさぐり求めんも便おしと其まゝゑ捨おきたりこれ實体ゑてをこしも覆藏せざる處なり去りおがら其後ふさゝぴをのぴ入りし事もあらねば甚左衛門と殺害せしこと實正ゑ我が知らざる處おりと答ふ頭人もこゝゑやうやく其夜の事跡い符合をといへども所詮の甚左衛門の刺人さらゑ分らぎこきゐよつてお隈八助の兩人い禁獄せしめ鶴子母子嘉一郎源五郎を官舍ゑとゞめお死其後たび〳〵お隈八助を嚴し〳〵亂問をるといへども後日のことい實ゑ以てをらざる由しおひ〳〵明白おきば頭人評定衆も殆んど此一件ゑあぐみたりける

○藤綱計つて奸夫を罰をる事

并藤綱が計ひゐて嘉一郎衛子夫婦とおる事

高矢氏が横死の一件已に頭人評定の面々さま〳〵ゑ穿鑿おをといへども更ゐ其便宜を得ざるばをゐち青砥左衛門ゑ談を藤綱が曰く甚左衛門を害せし者ゐそれらの黨らゐゐあらざるべし其しこれを明らむべしとをなゐち翌日問往所ゐ出この一群の輩らを召出し一人〳〵其始末を問ふゐ銘々答ふるごと先前のごと〳〵藤綱つら〳〵聞畢つて後歩卒に目を部下心得て豫め呼びおさたる外人三人の壮夫を廳前ゐ引居る藤綱お隈ゑ向ひいゐゐ女汝この者共いづをも親く交ゐる輩おるべし一々姓名及び其業をやべしお隈頭を上て見れば みお已が奸夫おり心中ゐ一驚しおがら恐る〳〵上なるゐ妾が向家なる魚鳥を業とせる重兵衛なる者次おるゐ御當家の御家士板川氏の門守傳八郎が部屋住勇藏其次おるゐ横小路に住る絹商人嘉平なりと答藤綱打點き三人共様側近く呼よせ汝等も定て聞及ぶらん高矢甚左衛門横死の的人いまだ知らを此脇差こそ彼が胸間をつらぬきたる刃なれ汝等若見識ならんゑゐ包を中べしと突と指いだ〳見せさまふ三人ゐ篤と見て何れも見知らざるよしを答ふ藤綱此とき勇藏を猶ちゃく呼んでいかゑ勇藏此帯ゐお隈が門邊ゑて拾ひしの高矢が斬ゐて拾ひさるか明白ゑやべ〳勇藏一驚せしが頭を下げ是ゐ思ひのけを某〳更に左様の品拾ひさることゐをど答ふる言辭をもざるゑ彌下乎勇藏前執權時頼君の明鑒をもつて登庸おさしめさまふ青砥左衛門を汝等ごときの分として盲目ど字ぜんゑをること奇怪千萬殊さらたとへ倍臣の下郎たりとも武門の禄と喰ひおがら人を害して身と活んとする腐士活おいて專おき蠢議論ゐ無益一刀の下ゑ性命を斷おんとつゝ〳〵と進み出で佩刀ゑ手を打かけ既ゑ拔討ゑおさんとす勇藏ゐ何わて、聲を上げ某しまつたく意趣遺恨あるゑあらを身をのがをんため刀を投たるむゝりおりと云ふゑ藤綱はゞめのいさをひに變りゐつこと笑ひ左何りなん然らばかの帯ゐいのにしてゝ汝が手ゑあり〳ぞ勇藏謹んで某しかねて彼お隈と通じあき

ば去ぬる廿四日の夜闇に乗じて彼もとにいたらんとせしゐ高矢氏の軒續き
ある竹垣の枝折戸ゑ物こそあり取上見きば引ゞ帯なり是ゐ最上の得ものゥ
おのねて物欲がるお隈なきば彼にあたへて歓ばせんと懐中ゑして案内おく
突とお隈の許ゑ這入りゝゑ我ゐ先達ち人ありて殊ゑひそ〳〵談話の容心憎
くてたち聞をればその首尾ゐ知らねども鶴子が許に忍びつゝ後の證しと附
與せし帯を取り落したる殘念さ併ゐあれど今宵また再び忍びて事をさだめ
んおどいふゐお隈答へていな〳〵今夜ゐ惡かるべし来夕こそ善けんといふ
ゐ偖ゐ後約の證しゐ此帯ならめ賣女ゑひとしき飯粒女より破瓜の鶴子と語
合んゐ鉛の代りゐ銀を得んより猶も尊く増れりと彼の火鼠の皮得し如く一
夜千秋の思ひゑ明して翌夜二更の頃おのび入りゑ既ゐ少女の臥處めけると
ころゐいさりしゑ誰とゐ知らで肴後よりおやと聲ゐけ捕へんとをるゑ驚き
身を轉べして遁んとをるを既ゑ後ろゑ迫るゆゑ據おく佩刀を抜て滅多おげ
ゐ後になげうち顧りもせぎ逃歸り後日ゐ聞けば甚左衛門胸間狙さし貫ゐれ

さりと是ゐ異人の更ゑがいせし哉またゐ過つて打斃れ塗炭の拍子ゑつらぬ
ゐれしゐ是等のことゐ知らざるとおろおりと白狀に一件爰ゑおいてくわら
りとその首尾を辨てり藤綱重ねて凡刀を鍛ふ者ゐよく人を刺んことを思ひ
揃を造るものゐ能く人命を保たんことを計る汝が脇刀腰を離きぎんば甚左
衛門も過つて其生をそこおふ事なく爭ふべからぎの一言ゑ勇藏もさぎが理
ゐ伏し頭を低て言葉おしかるがゆゑゐ勇藏ゐ死刑ゑ處しお隈八助の兩人ゐ
勾引しの罪遁れがたく遠き島ゐ放たれ源五郎ゐ平日の行狀正しゥらざるゆ
ゑ人ゐ謀らる篤實嚴行なゥんゐ誰か誣ることあらん哉と厚く後来狀ゐまし
め偖甚左衛門その身いやしくも君祿を辱おふしおがゥ相人をも留め得ぎ
うへつゑ一刀の下ゑ命をうしおふ事君を愧しむるところおきば家名斷絶さ
るべく鶴子ゐ一旦春情ゑまよふがゆゑゐその災ひ既ゑ父ゑおよぶかるがゆ
ゑゑ尼となりて父への不孝を償ふべ如なれどいゥんせん老母ありそのうへ
寢食をだゑ忘るまで思ひ切なりし情慾も親の慈惠ゑ改心して情人おりと思

ひおがら枕席を固く辭せし段もつとも神妙の至りおりよつて藤綱が堪忍し志摩川嘉一郎ゐ嫁せしむべし嘉一郎儀ゐ實ゑ其身ゑ預るべきならねど鶴子が切ゑ懸想せしゐ始まりかゝる異亂の端ともなれば不便を加へて彼を妻と老母諸ともゑ引取りてねんごろゐ養育しあたふべし併し今浪々の身ゑて兩女の育み便なのるべしよつて甚左衛門が欠職を汝ゐ附屬し志摩川嘉一郎と自稱をもつて出勤をべしもつとも當時ゐ賤官なりとも忠勤ゑよつて昇進ゐ取りはからふべしと賞罰正しく且つ慈惠の裁判いづれも伺つと感ぶくし中ゐも鶴子ゐ今さらゑ顔ゐ櫻の色おして面恥氣ゑさし低頭く心のうちを計り知るべし嘉一郎ゐ命令を感佩し鶴子伜娶り老母をむかへ日々北條家ゑ出仕おし閑日ゐ儒學劍法を無業とせしうゐ執權重職人等のおぼえも目出さく追々ゐ登庸られつひゑ昵近職とまで昇進せり此一件落着のゝち頭人評定の輩ら藤綱ゑとへるゐ甚左衛門が敵人誠ゑふん〳〵としてその正と得がたかりしといかゑしてこの勇藏なることを察知せられし哉青砥答へて實ゐ得がたし然ゑども以てをるところ其據る所安んをる處を察をると知ゐ人奚んぞらくさん哉の聖言彼寡婦のおくまが行狀を聞紀すゑ元より淫婦姦落おれはこゑゑ親くする輕浮ものが仕業と識り其うへ倫盜を志ざすものゐ格別女色ゐまよひ淫樂をことゝするものいこので更め刀を横たゆる者あらん哉爰を以て甚左衛門と害せしものゐ商人の者に有ざるを察し扨こそおくまが奸夫等をさぐるゑ餘人ゐもとより商人獨勇藏のみ下郎なれどもつねゐ一刀を挾む者こゝをもつて渠奴なることを察るといへども猶も渠を試さんと甚左衛門がつらぬのれたる刃を出して見せしむるゑ兩人ゐ其劍のこしらへ伜見る勇藏のみこれを見ずしてひそのゐ我が顔色を窺ふこゝゑおいていたく渠とはづらしめたるよりつひゐ一件と明辨をるゑいたる嗟呼聖賢の遺言嚴かるこのお併しおがら四民ともゐつゝしむべきゐ色念おりと打わらひける

○青砥が遠計反賊と虜とをる事

并良賢藤綱と害せんとする事

扇ゲ谷ニ上野屋といへる年久しき旅店ありさいつ頃より上方筋の商賈兩人滯留しありたひのためとて晝夜となく他ゐ出ていれ深更ゐ歸りまさい一晝夜他そにも出でゞ酒宴をこと丶爲るときも有りて其ていたらく最いぶらしげあるふるまひもありけるが或日兩人とも初更ばらりゐのへりて旅亭ニ酒肴を命じたがひニ酌とり飲つ勸めつ濁たる聲して朗詠し興ゐ乘じてつ丶立つ丶寺いらつらの橋桂と扇あやなし舞と見えしが十分酩酊の上なればひよろ〳〵足の堪がたく隅ての褥を踏倒し隣り座敷へ撞と轉ぶ彼座敷ゐい旅僧一人香を捻り念誦をる容靜一人の商客これを見ヲ殊ニおどろき醉客を引おこし褥をさて旅僧に懇懃ニ無禮ゝ詫ぶ僧も心中ゐ咎むといへども彼が老賢のあびといひ元より醉客のことゐ是ば然のみ懲をべきゐもあらぢとよきニ諾へて事を納む兩商いこゝがさめ酩酊其半をさまーおもしろらぢして打臥せしが翌朝熟々前夜の爲躰ゝおもへば何となく落居ぢ此まゝにていい止みがたしと美菓一折をもとめ懇懃ニ隣座敷に音信褥をひら充彼菓子を出し前夕の失敬をつくなふ旅僧も兩人のこころ丶づのいを謝し四方山の笑話とおを折ゐら豫じめ命じけん旅婢一種一瓶を運ばし和尚の禁好ぬらいい知らねど今朝の隱雲ことニ鬱陶し願はくい一盞ゝ傾けさまへと勸むるニ此僧もをかざるニいい有らざりけんたび〳〵の厚意ひを謝し盃ゝ擧て宴ゝはじむ實ゐや人心酒あらでい和がぢと百年の知己ニ等しくこも〳〵酌をとつて酌くましむ折ゐ彼商人の袂よりころ〳〵と落て僧の膝ニ留る物あり何心おく取り上げ見れば猿彦道の賽なり商賈いこれを見て恥ぢ入るの容と顯いせば僧い打わらひ何と左のみ恥さまふ君聞ぢや聖人だニ博奕と云物あらぢや猶止むに增ると宣へば長夜旅館のつれ〳〵い是ニ過ぎざる慰みあらじと掌ころニ載せて轉がせば商賈い心落居ヲ和尚の手品たないざ上手おど興じ笑ふ處ニ婢女遠たゞしく來りて商賈ゐ向ひ兩公ゐ用事あるとて客人來りたまふ卒度次の室まで出給へと云すて丶趨り入るさま尋常ニ變りし躰なるゐ兩人の商賈も面を打合せ心裡ゐ戰栗の容ニて次の室ゐ出るとひとしく人ごゑ喧騒く物音

さへせしがやがて彼商賈兩人を嚴しく搦め部下ゐ引せて座上ゑ出隊長の士ひ旅僧ゐ對ひ此賊と膝をまじへ襟をひらき飲酒を諸共ゐ爲らるゝ必も同類の人ゑ旅僧自若て貧道ゐ上州の住ゑて彼等とゐこゝろやすゐの者ならも同宿隣室の壁びゑて話し敵とおりしのみ其ゐ免まれまづ彼等ゐ何ゐ做して繩縛をうけたるゐや隊長こたへて此奴ゐ國禁をゝかし人をして奕道ゐいざない許多の金銀を掠むる道魁なり旅僧あながち其黨とゐ見えねど如何せん同席といひ殊ゑまさ奕道の具とさへ膝下ゐおけばあらぢともまさ爭ひ難けん如も甚しとゝもゑ官廳ゐ來て其徒ゐあらぬを中されんにゐ旅僧いへるゐ官人ゐ誰が令を以てこれ拭計り誰が廳に我を行しむ隊長肩を脅かし脇を張りいふまでもおし執權北條家の命令なり貴僧まさ時宗君と對話して其是非を明められよ旅僧うち點づゐ斯く三衣を纏ふ身にして仮ゑも不潔の財を貪らずいはんや賭ゐ於てをやされど其許のあやまりおからんため執權君ゐ恐尺して知るしらざるを云ひわけんいざ行なんと座を起ば隊長ゐ僧が乘和をたうとみ旅宿ゐ命じ一挺の駕輿を用意させ流石ゑ佛體をそおへし僧徒元よりおゐゐぬゝりあひなれば他見の程もいかがと是非ゑこれゑ駕らんことを勸む旅僧一應ゐ辭すれどゐ強てのすゝめゐ彼の駕輿ゐ乘るとひとしく發じめ待節やなしたりけん東方西方より數十人の部下ばらゝと出來さり網を颯と駕輿ゑ掛左右前後と圍繞を揉ゐもんで問注所ゑゐたるゐ早注進やしたりけん正面ゑ執權時宗左座ゑ青砥藤綱其外頭人評定衆例のごとく並居たり隊長駕輿を廳前ゑ昇入るさせ椽側ゑのつゝくばひ尊命のごとく執えらひ旅僧をいざおひ參りたりと準道をいからし誘り顔ゐうつたうきば藤綱ゐ自若いて苦しうらぢ爰ゑ出せと下知の下より前後と術り網をとつゑ戸と開けば是ゐ抑いうゐ輿の中ゑゐ人あらず只三衣とのゑ殘したり隊長をはじめ警固の面々我ゑもあらで呆れ果頭を叩いて慙愧せり藤綱ゐ些しも動ぜぢ左もあらん去りながら汝等が網ゐ遁るゝとも天網いかで洩べきやあおどろきそと驚ぐ顔色おく快然として居たりしが藤綱たちまち身を開拭持

たる鉄扇ふりあげて宇宙を丁と打ちひとしく傍らにどうと物音をるを聯さずとつて押ゆる形容ゐて自己叛賊さしのゐ聞け妖術を以て愚眼ゐ犯をともいうで藤綱が目を掠めん哉此上如何なる術ありて身狀遁るゝの道あり哉いかゐ〳〵と説破の動静淌座の列位これを見聞て藤綱が言語形容心得をこゐ發狂せしか左おくば又妖魔ゐ魅せられくるふおらめと再び驚き守り居るゐ此と死怪術こゝゐ破れけん藤綱が膝下より雲霧おんどの晴わたるがごとく漸々と顯明来るゐ豈計らん叛逆の魅首良賢律師手ゐ短刀を握りながら藤綱が膝下ゐ敷れおろのみおらで鉄扇の痕おりけん眉間より流るゝ鮮血滾々として面を浸せるなりをな〳〵更ゐ驚死騒ぎ我も〳〵と折らさおり手捕足搦厳〳〵縛つて庭上ゐはたと別居たり藤綱袴の折目を正し縁際ゐ進を出でいかゐ良賢左こそ無念ゐぞんをべけゐ去りおがら我が云ふところを篤と聞よ抑汝が父泰村兄弟其身ゐ北條家の氏族ゐあつて官階人ゐ超え庄園數多の恩賜をゐ受ふり榮耀さらゐあまるゐおたがひ北條が權勢をうらやみ殊さら當君を疎をひそかに北條を斃し先廢主のみよとなし其身執權として四海を掌握なさんと謀り既ゐ時頼君を弑せんとせしを時頼君ゐ仁慈をもつて罰したまゐをのへつて其怒りをなだめて家名を絶さゞらんことを思ひさまふといへどもおゐも隱謀をたくましふをるがゆゑ天誅こゝゐ下つて遂ひゐ露頭の草露と消え數代の家名に叛逆の嗔号をのおを憐むべし悲むべし汝さま〳〵戰場をのがれさいはひ梵宮ゐ生育し上ゐいよ〳〵清潔の大徳ともおるべを身ゐ忍辱の三衣をまとひ心ゐ無懸の五欲ゐまよひ佛陀の教へををてゝ妖魔の術を行おふ然ゐば正天猶その邪道を憎んでつひゐ我をして汝をひのしむ其ゆゑゐ我腹心の郎等ゐ命じ袁彦道の魁首ゐ出たゝせ夙より汝と同宿せしめ渠が犯法の罰を以て汝をいざおふ汝また謀て執權ゐ怨尺んため丹已が妖術を頼みとし欺のるゝを知らでこゝゐ来て駕輿を出るとひとしく人目を暗まし不意ゐ執權を刺んぞるゐ邪ゐ正ゐ敵せぞと我さいはひゐ汝狀見れども汝あへて我が察を知らぞるがゆゑゐ強勇大力の聞えある汝やみ〳〵

一扇に目眩をつひに藤綱が瘦腕ゐしばらるゝおれをゐ泰村兄弟が己が權をたのみゐして家名の亡ぶを知らざる愚昧と蓋し同日の論なるべし加ゑ祖父のあやまち其身の先非をかへりみて害心と棄絶し三浦氏族のさめ佛陀の冥助をあふがんにゐ我また執權ゐ奏して助命ゑ執はゝりゐんいゝゐ〳〵と理解ゐを良賢ゐ曩刻より只黙してことゝ發せざりしが此ゝき頭を擧げ口をひらき青砥藤綱といふもの時頼を補佐て天下の邪を制し四海を正ゐ歸せんとすゝゐ風の音りゐ聞たるが今日さいはひゐ見ることを得てまた其說ゝゝろを聞く然れども是ゐをなはち腐儒の見ゐしてさらゐ武門の執もちゆべきゐあらゑ傳へ聞く伯夷叔齊周の米粟と穢れさりゝし首陽山の蕨ゝ食し我が朝の惡七兵衛景清ゐ源家の榮えを見るゝ惡んで日向の國ゐ至目肯ゝなるゝ周の米粟源の張盛を憎まゐ奚ぞいさぎよく死をなさんわれ無ゐ恥怒るゝろ父兄の怨魂ゑ慰せゑして女々しく北條の慈恩ゝ請べけんや一日助命せば一日怨み三日活ゐば三日怨をん早く首をゐねて枕を高うせよ是我が本懷なるゐゝゝさやまぬ強氣ゐ藤綱も歎息し嗚呼あたら勇士の生を斷んゐ惜しゝまづ禁獄ゐさしめ置き其後たび〳〵理解をゝきて改心發起ゑすゝむゝいへゝもさらゐもちゆべき容貌ならゐば是非なくも由比の濱ゐ死刑せしめ三日梟木ゐ掛て後ひそゐゐ藤綱が計らひとして三浦氏が寺門ゐ埋葬せしめ懇ろに佛事をゐさしめけり

編者曰最明寺禪門諸國巡行三年があひだ青砥が明談ゐば〳〵おれど奚曲くこゝを舉さんゐゐ此書の本意をうしなふゐ似たれゝあづかゐ其二三を著ゐのみ次の條より禪門の苦行をのべて國々の奇話を記ゐ

○最明寺入道諸國巡行の事

弁禪公俊貞の妻を救ひ給ふ事

鹿を逐ふ者ゐ山を見ゐ金を攫する者ゐ人を見ゐ人迷着の心ゐおゐゐれて好惡その正さを得ることゝ能ゐゐ多く是非ゑ顛倒し親愛畏敬衰矜をるゝところゐ辟ゐ愛ゐ溺れて其子の惡を知らゐ寵ゐ犯されて其臣の不忠を辨ぜゐつひゐ

家をうしなひ國を敗るたゞ仁者のみ美しても其惡きを知り惡むとも其好きを知は人君たゞ此理りを知らぎんばあるべからぎ然ば前執權北條時賴朝臣入道最明寺道崇ゐかねて天下の政道邪正是非と明かゐしたまへども頭人評定有司の輩動もれば依怙の沙汰ありて是非ふん〳〵の違ひいたるかゆゑゑ青砥藤綱に之を判論したまふゑ藤綱おたふるゐ遠近の善惡見聞の遲速百日千日の譬へ述ぶる最明寺禪公おゝゐ始めて諸國潛行の志ざしを發しつひゑ二階堂信濃入道と供し抖擻行脚ゐ身を俏し鎌倉をひそのゐ發足しまづ東國を志ざし與羽を始め上總下總常陸の國々巡行し城主領主の政務の邪正行跡の善惡微細ゐ探るたまふゑ實ゑと藤綱がやせしごとく聞ゐまさり思ふゑはんし是非賞罰正しのらざれば以よ〳〵藤綱が明察を恐歎し其見聞をるところの正邪好惡一々心ゑ銘じ神ゐ應しまたゐ寺社の盛衰僧祝のふるまひを探りもて丹遠江の國ゑいさを名ゑしおふ日本三大河ある天龍川にいたり川岸の木の根ゑ腰打うけ四面の佳景を眺望しまばし疲勞を休めたまふ丹足下ゑ女の愁聲聞えしうば禪公ゐ不審み堤の下を望給ふゐ獨の上藤叢ゑ投伏し泣居たるがやがて身を興に西方丹合掌佛号數遍唱つゝ既ゐ逆流ゑ捨身とも禪公二階堂ゑ聲のけて彼止よとのたまふと等しく信濃の入道身を躍らせ堤より下ゐひらりと飛び下り女の帶際しのと取る女ゐ元より人ありとも知らざりしがおもひ掛おくさゝへられ聲狀怒せ身をふるゐし執念くも因ごとし身を織させんを強惡無道とてゑ生べき身ならねば武士の情けゐこゝゑて殺せと憤怒のけしきに二階堂聲をあげ我ゐ追人の者おらず心とゑづめて此方ゑ來よとゑひて誘ひ公の前ゑいたるば禪公女をつく〳〵見て其許若き上藤ながら身をおげんとゐ止を難き所謂ゆることゐ云はでも著し我ゐ旅僧の身おれどもおとゐよりなば力となりてまた執成さんやうも有らん包まで語りきかせよといと懇ろゑのたまへば女ゐやう〳〵心落居はふりおつる涙をはらひ有がさき師の仰せ何狀ゐ包みやべき妾ゐ當國を知らせさまふ河谷八郎兵衛尉の臣ゑ坂田五郎俊貞の妻ゑ操とや者おるが領主行

跡絶て正のらぎあまつさへ女色を慾まゝふして家臣領民の差別おく容色女と聞くと共まゝ無体ゑ居館ゑ召させられ一度領君ゑ恐尺もの身拭清潔よくして出るいなしと妾坂田ゑ嫁ぎてのちいまだ十日も過ざるゐ斯く無香ゐる妾をさべ夫人より召さるゝこと度々なるどいつはりなるを知れるものから疾ゑのこちて出ざれば一日嚴しき使立て君召をときい駕拭またぬ確言さとへ勞きあるゐもあれ忍ゑも疾くゑ詰づべきと召とそむくい逆意なるやと五郎をいたく責めたまふ丹夫ん兎角ゐたゆたふを妾思ふ所あるばすないち日時拭定めつゝ初めて詰で登りしが執次の士ひ與にともなひ彼高樓こそ夫人の居室吾儕い妾より進みがたし突と行たまへと引ーりぞく遣こそいぶのしと思ひつゝ教への高樓ゑ行いたれば傍らゑ人もおく領主一人居たまひて妾を見るより聲のけて汝い五郎が妻おるの我こそ主人の尉なるいとのたまふまゝゑ態とおどろき後へゑ下つて禮なせば汝をまつこと千秋のおもひおれば引物せんと座右なる包み物とり掌らゐのせ近くまゐれとのさまふに否むべきにもあらざきば近々と進みより諸手を出し藏かんとを其手を取て妾を引よせ淫ゞましゐおよばんと無て期したるおとおるばその手を丁と打はらひ飛退りて聲をさゑ凡人の君たるや臣等が邪非を常に教戒たまふ貴体丹て不貞をすゝむることやいある察するところ下主下郎もつさいおくも君の名といついりこのいる尾籠拭はたらくおらんいやしくも五郎が妻下郎と同席おるべきかと賢けれども恥らしめ席をつゝ立退出んとするゑ君恥思し給ふべきを猶こそぎまゑ走りかゝり妾といだき有無を別たゞ既に尾籠をなさんと、す妾無顏を忿ふゐ堪うね持たる扇を逆手ゑおほし眉の間を丁と突くゐ目やくらみけんたぢ〳〵と二歩三歩後退り仰向にだふと倒るゝをミかへりもせで居館を退出やう〳〵遁れ歸りしがたちまち夫の五郎を召して是非を論ぜゞ土佐の國に流罪しあららさまゑ妾を召捕んとをるを此處までまたも逃のびしらど我が身と潔くなさんとて夫を無寃ゐ遠島せしめし罪そが上一度い遁るゝとも甲斐おき女の身ゐしあればつひゐい漏が手ゐ捕れさらゑ愛愧

うけんより如ぞ清流ま命を縮め身の潔白をたてんゐにこひねがはくば死せじめよとさめ〳〵と泣入ば河谷が無頼女が貞操を感じさまひ公さま〳〵と刹害をくたへ命をまつたふして時節を待べし我鎌倉殿まも參るあれば歸國のゝちは執もちて其許の純貞原井が奸惡のでう〳〵くたしくやなば近く會稽のときあるべしと懇ろま說諭せば女もやう〳〵篤意せしや有がたき仰せのなさらば惜からぬ命おがら師の言の葉を力とし甲斐なき月日送侯やさんさいはひ尾張の熱田ゐは母の家族の住はべれば〻ま身をよせ待るべし禪公もよろこび打點づきさらば似氣おき道連なれど路次の不具を防がんため國分寺まで送てなんと女をともおひ道をゐそぎ宮の邊りまで伴ひてこゝま再會を期して別きたまふ後鎌倉お歸りたまひてさゞちま八郎兵衛尉を召捕およそ私情を通ぜること武門において禁しむるところ況んや定まれる人の妻をや是は庶人だふつゝしむべき贅も女がやせしごとく下主下郎ゐもおとつたる舉動よつて士大夫の法を廢し由比が濱ゐおいて縛り首ま處し餘殃

三族ふさへおよぼしたまひ坂田五郎を土佐より召歸し操女を尾張より召登せすおゐち再會なさしめつゝ五郎ま河谷の所領を管領せしめことゐ女にゐ貞操明正を褒稱し引出もの許多賜ゐりけり

○邪ゐ正ま敵せざる明證の事

東海道なる七里の渡船といへるゐ遠州灘よりの入海ゐして尾州宮より勢州桑名へその間程七里の海上ゐり禪公ゐ宮の驛ゐて五郎が妻と別きてこの渡船ま乘たまふ殊さら今日ゐ快晴まて天も人氣といも穏和し風さへ水主の心まゐたがひ真帆十分に上ぐるがゆゑ瞬間うちに數程をはしる乘船の貴賤興ま乘じ已がさま〳〵雜談なを中ま六旬闌りなる農夫と覺し充が濁さる聲してたか〳〵にいへるゐ乘りあひの方々聞たまはずや此ごろ彼岸の桑名在なる何がし寺の前栽の喬木に金色の釋尊日々に影向したまひ華さへ降らし給ふと聞く世已ま僥季なれど佛法の榮えのありがたさおのれゐ參州の農夫おるが見たまふごとく老耄ひ舊き友ゐみお沒し若き者まゐ疎まれて談し敵だ

まあらざまば早く淨土に迎へられんとこまのみ願ふ折からに斯釋尊の目前ふ凡眼にさへ拜まんに長壽の本意これおりと國をはなればるゝ〳〵来まり天晴うたゝ〳〵も道を廻り現當二世を結緣したまへと勸むる功德諸ともふ成佛の因と聞つれば知らぬ人ふに語りつぎ云つぎたまへ南無佛と唱名とも誘が母いへば船中の老若耳を聳でそはいと有がたき御事かな道の往手なれば案内してよ我々も拜まんと進む傍らにひとりの商人のうつらゝ〳〵と眠り居さるが此とき目を揩りおがら呵々と笑ひ何釋尊の影向とや世に似たることもあるものろお吾儕に西國の者なるが我が國の國分寺に往古より立る石佛の地藏のことに大知おるが去年の秋八月の頃夜々彼の尊の白毫より光明をはおち照したまふ始めに左までもあらざりしがおひ〳〵風評高くなり近村近郷隣國よりも老若男女諸ともふ夜々の參詣群集なすこれがため寺内にもとより野徑田圃の隈までも菓餅酒肉の商肆を出す盛んなるふ至つてに俠客醉士ともすれば往遂の爭力口論を做し若き男女に參詣ふ託して密會など

迫々いろ〳〵の狼藉あるを國主察したまふに彼の國分寺の住職を召さまこ汝が寺ふ古く在を延命尊の靈驗著るく此ごろ夜々光明を放ち諸人結緣したまふとろもつとも尊知ことおまば我も一たび參らんとすれど光明はおたぬとさに專なさことふ人民を勞ほよつて光明はなつと見ばをみやのに人を馳せ注進あらば直ちに行て篤と光明ふ近づきてよく〳〵結緣おをべしと穩順に命じたまひしふ地藏もいうゞ思しけん夫より以来に打絶て光明はおちたまふことなく原の石佛となりたれば參詣たえて跡のたおく靜謐ふこそおりふさり今聞ところの釋尊も恐らく同日の論ならんとあざ笑へば禪公二階堂に目したまへば入道必得そに珍らしき說話かお其國守どに何候ふや彼者髭をのき撫て吾儕に肥の國國君に瀨河前司にてましまをなりいうに賢さはからひならぢやと誇れば片方のふせ者頭弐振りいや〳〵其に瀨河にはあらじいちはや川とにやさんと狂がる言葉に聞人々異口同音にうち笑ふ程なく海上つゝがおく船に桑名ふ着すれば乘合交ひに別離を伸べ已がさま〳〵立

別る禪公は二階堂まさゝやき彼の農夫が行方尋求めておよそ一里許も來らんとおもふまに老若うち連たる一群〳〵未刻まで闌々たり若し影向ゐ後てい詮ゐ紀のみか罪深しと人の誹謗をうけんも恥らしいざや歩みを早めんといふまこれ從寺の通路ゐりと禪公も足逸まいたりたまふゐ佛恩寺といへる廣庭ゐ柿の木と見ゆる喬木の本に貴賤男女群參ゐしゐの來迎を俟ありさま禪公も傍の石上ゐ腰うち掛て待たまふ稍ありて空中まで矢を射るごときもの音すれば須臾乎佛の影向と異口同音に稱名をれば不思議や喬木の第三枝目まで一尺ばかりの釋尊金色をはなち現然として立たまふ僧俗ひとしく聲を上げあゐ有がたや尊とやと賽錢を投げ法施を捧げ後世を願ひ現當を祈りあるひゐ所願悉充しめなどおのを〳〵が願ひの聲暫しい鳴も止ざりけり禪公は衆の後まあつて彼釋尊をさつと白眼み瞬きもおさで目詰たまひしが坐訝しさしも柔和の釋迦の面相遽卒ゐ目圓く口尖り肩のあたりに羽翼さへ顯はを震ふと見えしがたちまち地上まで破多と轉び落つ二階堂これを見て諸人と押除け押分てゐの木下まで突とよりつゝ、鉄拳とあげて落たる釋尊一打うてば聲を發しぎゆと叫んで死たるを取り擧げ見れば豈はからん幾年經にけん爰かし こ羽毛ぬけたる鵠ゐりけり數千の群參の人はもとより椽端まで座を設けたる當寺の現住もいうでゐの之を驚かざらん餘りの怪異ゐことばえ出ぎたゞ茫然たるばかりゐり禪公はこれを見て左こそあらめと驚死たまはぎしづゐまで彼の住職にむゐひ貴僧は當寺の住持ゐらんゐかゝる小鳥に魅せらをたまふは豈口をしきことならん哉斯くあらむ後々はつひまで貴僧の命さへ危ふしねがはくは道德を積さまへ住職はおゐいまで慙入り椽を飛下て頭をさゝき感佩さ大德の教戒謝をるゐきらまで辭なし願はくは芳名を告げ錫を留めて迷路を教導しさまはんことを禪公は打わらひ我まで德ゐくまた學びもゐく元より一所不住の雲水奇偶あらば再會をべしと袖と拂ふて立去りたまふ所謂老鵠よく人〻魅をるといへども正を犯をこと能はを況んや智勇ゐ法德兼備の時頼入道といふで妖魔も狂さんやをゐはは禪公歸國のゝち瀨河君と召されて地藏

尊の奇怪を一言の下に停止たる才智と稱譽おしたまひ太刀一振ゐ黄金をそへて賜りければ前司ゐ時の面目拭施し君恩ふろく拝謝せりされば此の風評高きよりろの鵶を見落したまひしも禪公おるこゞを更ゐ知り舌拭巻てぞおそをける此佛恩寺とうやゐ今ありやおしや

○佛平六舊恩を報ぜんとする事

伊勢より大和に越る山里ゑ平六郎といへる農民ありさまで富るゐゐあらざれどもまた貧しくゑ何らざりけん元より平六郎夫婦老實ゐして慈悲ふかく往還修行者またゐ旅人行暮たるゑゐ宿をかし飢渇の者ゑゐ米錢を施與しあるひゐ餅飯を與ふゆゑゐ村童こぞつてこれを号し佛平六と稱譽せり去程ゐ禪公二階堂とゝもゑ黄昏ゑ袂を曳て此處を過たまふゐ遊ぶ小童指ざして此旅僧さちもまさゐ今宵佛平六が御客ならんと戯るを禪公ゐ不思議なしたまひ二階堂をして平六が宅を尋ねしめ聽てこれが門邊に不み行暮たる雲水兩人願くゐ厚志を垂れて一夜を攝したまむらんと試みゑ宣まへば平六ゐ夕飯もそ〻て臺所ゑ平座おしつかひし揚枝の手をとゞめ見らるゝごとき山中の破家透間の風のいとひおくば野宿せんゑゐまさるべし入てゆる〳〵休みたまへ禪公ゐ頓首して手づろ蕪沓の紐ときて廣敷ゐ上りたまふを平六の妻與の室ゐ廣がれる戸張物片寄佛姿の端居ゐ佛陀への恐れいざと與室ゑ招請いまやがて夕飯を調へつゝ兩僧の前ゑ供しおき自から飯櫃をかゝへて配膳なし今日ゐ平六が亡父と妾が亡母の忌日桑門ゑ物奉るこそ本意おれさまど里遠ければ物乏しくたゞ炊温の飯と青菜のゑ飽まで食しさまゐれとまめ〳〵しく勸むるゑ兩人ゐ實意を深く謝し食し了りて主ゐ向ひ今宵ゐ兩靈の忌日どや法德もおき役座坊主の讀經せんゐいろゞなれど心ぢろりの手向しさてまつらん平六ゐ頓首して夫ゐ願ふても有がたき事おりと急ぎ持佛ゑ燈明を點ず香を薫らせ華ゑ水さへ灌ぐれば兩僧やがて佛前ゐ向ふゐ中央ゐ彌陀の立像左脇ゐ五六歳の幼童大袖に小袴着たる肖像右脇ゑゐ大紋衣たる武士の姿をこと〳〵しく表補して掛さり兩僧不思議とおもひながらねんごろゑ

讀經回向しをわり主ゑ向ひ左右に掛たる肖像ゐ其許の父と早世の息おるや平六郎ゐ兩手を擧是ゐもつたいおき事をのさまふものかお此兩像こそ我がためにゐ彌陀よりも尊く釋迦よりも有がたけれおか〳〵我身が卧所近く安置すべくもあらねども什麼ゑせん茅屋おるをまさこの由緣ゐかりそめゑも他ゐ告ふべきことおらねど少し思ふ惟あるがゆゑ一二もとすゑ語りやさん抑吾儕夫婦その昔上野の國を領たまふ佐野源左衛門とや君ゑ仕へやせし下郎なりしが若氣の至り心のほの夫人ゐ累年仕へをる侍女をなはち今の妻おる者と人ゐれを密を通ゐしおのぶとをきどいつしかゐ主君常世君知し召し或日夫人我々ゐ召され汝兩人の容靜ゐ夙より夫の知りたまへりさきども妾ゑのさまふゐおよそ男女の親しみゐ若士の身ゐゐ珍らしらをを是天緣の結べる處どゐいへ武士の舘ゐゐ最第一の掟とし背ける者ゐ手討と定む我密通を知るとせば他門の聞えさしおゐ難し渠等兩人衆ゐ拔出老實堅固の者おれば無下ゐ罰せんも不便なり今宵夜深け人鎭りてのち女を連て當地を走り何國の浦ゑも身をゝさめ借老の契りを結ぶべく女ゐ己を慎しみ夫を敬し男ゐ身をこらし妻を慈しめ必ぎたがひゐ飽あかるゝ事勿き若離別せんの心おこらば我が憐愍ゐそむくおるぞどくき〳〵妾ゐ托せられたり名殘ゐことむゑ盡ねども夫のこゝろざし背ゐ難しと黄金あまた賜りたる恩惠心膽ゐ徹し腑腑をつらぬ紀泪ゐがらゑ伏拜を其夜おく〳〵國を辭し時めく鎌倉ゐ登るといへどもをこしの由緣もあらざれば東南ゑ五日西北ゐ十日只うろ〳〵と明し呉しつひに賜たる黄金をうしおひ免せん角せん俄の心勞初めて主君の目と掠めし其天罰ゐ後悔すきどおすべき便りもゐらざれば暫らく夫婦手を別ち女ゐ水仕奉公させ已ゐ下郎の勤めをせんと思ひ立しゑ折も折柄嘉吉三年の天下の飢饉十口ゐ五口五口ゐ三三口口を滅するの時ゐあひて奉公せんゐも抱る人おく元より貯へつ紀たれば道路ゐ飢死せん外なかりしゐ前執權時頼君いまだ戒壽丸とやせしが祖父泰時君ゐ乞さまひ施行をはじめたまふよし聞ぎまゐ〳〵ひよろ〳〵と杖にをぎりて施食を請飢たる腹を潤しめしゑ若

君不便とや思けん彼をも施行所ゐ留お充薪水の働充なさせよと命じたまひし有がたさ手の舞足の踏處を志らぬ飢たる妻も員數ゐ入て朝夕炊煙を勤とし飢渇を遁し莫大の高恩恐おがらゐ命の親神とも佛とも憑さまつり己ま飢饉も治まれば數日の勞の褒賞とたまはる黄金を路費となしわづのおる由縁をもとめ此地ま来り農家ま仕へ年を積みやう〳〵松を柱とし茅萱をおゐふて雨露をおのぎ麁莚と以て數物となし夫婦が足を延せしよりも先主常世君は再生の恩人時頼君ゐ續命慈人と寢るま東方ば後ませを藷工をひそうゐ憑みつゝこの兩像ば畫圖せしめ持佛に安して朝ゐ夕ゐ禮拜したてまつる處おり斯く明白ゐ告たてまつるゐ大徳ま願ふべきことのあり其ゆゑゐ前話のごとく兩の君の恩惠まより斯く雨露と凌ぐまつけてゐ折もあらば人ば頼み勘氣赦免ば願えんと日夜ゐ懸念なしたるゐ其徐微ゐ聞くことあり彼國ま分家したまふ常世君の伯父の殿ま佐野源藤太藤榮といへるゐかねて生質佞奸おりしがひそうゐ鎌倉に登り評定衆に阿諛り源左衛門尉こそ發狂して政事の是非分ちがたけれなど内願し公命を奉じたちまちま常世君を追出し本家の所知と押領を元より常世君ゐ温順の性なればすこしも是と拒みたまを天の成せる災ひゐまた避のがるゝ時節もあらじと公命を領承し本家を離れ佐野の庄端ゐ蟄したまふと聞くと其まゝ妻と謀り調度雜具も代なして黄金十兩を懐まして上野ゐ上りいぶせき君が閨室ゐ至れど往昔犯せし罪ゐれば さすが ゐも入りがたく免やせん角やと躊躇のをりから下どよく夫人ま出會勘氣の赦免がつゐまたいさゝか前非を償ふためと黄金の包みを捧げしま夫人ゐ厚志を歡びさまひ吾儕と表ま おのばせて夫人其よしを中たまひしま常世君聲を高ぶ何平六が来ると哉渠等ば主ま暇をくれ國遠なしたる人非人今ま も一目見るならば鏑刀もて命を絶べし珠ま吾涙々おせとと不義不忠の下郎より一粒一錢の扶助をうけんや主と慢る曲者と以ての外ま怒りたまひ垣越しまがの黄金ば投出し柴折戸固く閉しさまふ已ゐ本意をうしおへどもよく〳〵事の容をうんがへ見れば原より義心の堅固こ

と鉄石ゐひとしき君なれば已が懇志いよく知ろし召せどやつ〳〵しき我々
ゐ平苦掛まじの深慮ならめさらばとて爲便おければ彼の驚の聲ならで逢で
ぞ歸るもとの住家ゐまぞ〳〵と國ゐ歸る後よき便手もがを彼の黄金をたて
まつらまくとおもふこと多年今大徳を見たてまつるゐ恐悦ながらゐ高徳智
識東國經歴の序次常世君の許訪ひさまひて吾儕の微志を告さまひうの黄金
をも快よく納收たまふやう説話てさべ將其黄金をと搔立を禪門しばしと押
とゞめ其許が懇志且老賢ゐ聞が隨意感じ入るされど愚僧思ふよしあれば今
暫し俟たまへ軈て本懐のときあるべし平六ゐまた本意おけれど是ゐ天機を
や識たまふとよき丹後來を憑みつゝ由おき物語りゐ此夜更たり寢くたびれ
さまふべきゐと夫婦ねんごろに夜具を運びて暇と告て卧所ゐ入ば禪公ひそ
うゐ常世藤榮平六郎のことを筆記して暫し睡枕たまむける

○禪公難波の津ゐ着の事

并難波の禪尼の事

禪公ゐ圖らずも平六郎がもとゐ宿したまひ飢饉施行の物語り丹その往古を
ゐのびうつ平六夫婦が篤實拭感じさまひ翌日名殘拭此家ゐとゞめそれより
紀の路和泉國を經廻し日を經て攝津國難波の津ゐ着たまふ（其頃ゐ今の難
波の大都會にゐ引のへて未だ三郷の分ちある海濱あり）實や世わたる賤が
業ゐ何國もおゐ〻ことおがら殊さら難波の蘆の屋の塩くむ海人の隙まなく
いとなむ業のあれさを禪公つく〳〵御覽ぢつゝ感慨の泪袖を浸したまふ
ゐ紅日すでゐ西山ゐ春さ夕陽告ぐる宿鴉の聲ゐ免ある家居ゐ立寄りて宿を
こゐんと見たまへば昔しゐ由ある住居と見れど築墻やぶれ軒かさぶき時雨
も月も漏ぬべき風ゐまかせし草の戸も夕露ゐのく閉られていとゞ袂もぬれ
まさる人やいますと案内の聲に六旬に餘りたる尼僧の立出て何人ゐやとこ
たふるゐ禪公ゐ額さて見たまふごとき抖擻行脚一宿拭換したまへよとねん
ごろ丹のたまへば御僧ゐ御宿やさんゐ願ひてもおささいはひあれど詫て住
ある賤が家の藻汐草より敷物なく磯菜の外ゐ設けもおしさらば御宿の甲斐

あらぎと籬をることばゐ禪公い日も早西ゐ入相の往先とても覺束おければ強て一夜と乞たまふゐ夫だに去のびたまふとならば何ゐい宿りを惜むべきと兩僧拭ともなむ板敷ゐ莚敷さる一室ゑ迎へ老尼手づから夕餉ととゝのへ椎の葉折敷て餉盛り禪公入道ゑまゝむれば旅ふしあれば椎の葉の故事まで也覺しあいせ快よく食しをわりて老尼ゑ向ひいと甲斐〳〵しく見えたまへどゝゝる水仕と仕馴たる人といさらゑ見えざるを其往古い何人にや聞まほしとのたまへば尼い瞳ゑ泪をうゝめもと亡父い此處の一分の領主おりしゞ妻にも子ゐさへ死後れ便りおゐ身とおり果しふ朝食のけふり心細く夫さへほと〳〵たて無さるを只押量りたまへかしとまさ潸々と歎くさま禪公え殊さら不便ゑおぼしかゝる浮世を捨坊主の身ふい似合なきゆ條おれど其沒たまひし其許の夫何とか名乘たまひしゞ尼い袖をて泪をぬぐひ更ゐやさんも恥かしおがら故右大將頼朝卿平家追伐ありしとき相應の軍忠ありし難波六郎左衛門とゆせし者源家の御代と榮えてのち其勸賞を行れ此處をたまいりて尼が夫六郎左衛門まで三代連續さて相傳せしふ六郎左衛門不幸ゑて沒して後ゑ引續き子なる三郎も世を早ふしつれなく殘る露の身の朝夕ぬるゝ袖秋干を隙だゑもおき折から尼が爲ゑい小舅おる夫六郎左衛門が弟ゑ瓜生權頭景貞おる人鎌倉殿ゐい何とかゆけん世々傳へさる所領をさへことごとく押領せらを翌の餉さへ貧しおまでおく零落てさふらふと涙ゑ詞も咽びける禪公い笑の中より小硯取出て

おゑはがた鹽干ゐ遠き月かげの
またもとの江ふ清ざらめやは

と疊紙ゐ書付て尼ふ與へ我い鎌倉どのふもまおる身なりよ死折ゑあらば奏しゆさん心づよく待たまへと二階堂ともゝいさめ賺し一夜を明して立出でさまへば尼いことさら名殘と惜み門邊ゑ出て後蔭陰るゝまでも見送りさり後日禪公鎌倉ふかへり難波の尼および瓜生權頭を召され本家押領の罪を責め伊豆の大嶋ゐ配流したまひ瓜生が所帶を沒收おじ本領とゝえゐ尼ゐ返

しあたへ時宗君の昵近篠原何某を以て難波の家名を相續させたまふ尼いかの行脚僧い最明寺殿なるを始めて知り難波江の詠歌を更ゑ尊み家の寶と傳へしと聞く去程ゑ禪公い難波の尼が家を立えなれ河内山城より三丹と經歷し給ひける

○禪公古寺に立寄給ふ事

并播磨の禪尼物語りの事

扨も禪公い翌年の六月ごろり播磨の國ゑいたりさまふ左おだだふ炎熱たへがたさゑ一群の雲うち掩ひ神さへおどろ〳〵とおりて稲妻さらめくゐどこそあれ白雨盆を傾くごとく行先だゐもゐ分らざれば傍へなる古寺ふ走り入り堂の椽ゐ休らひ笠の雫衣の袖と絞りたまふ障子の内より四十歳ごろりの尼のさち出で驟雨のはおだしさ左社や因じたまふらん此方へ入らせさまひてゆる〳〵晴間ば待たまへと懇ろゑいひ出せば其い忝けなし去りおがら外に人なき尼僧の室へ休息おさんもいらぐぞと打笑ひつゝのたまへば尼も俱ゑ會釋して男女の隔ていありといへど同じ慈佛の道ふ入り世を住をつる墨染の袖ゑいかで色香の殘るべき禪公も打うおづだ木の端炭の折ふひどしだ雲水一樹一河も佛の導さゆるさせたまへと二階堂といもゑ禪室に入りて尼ゑむぅひ其許いまだ若だ身のかゝる里離れの孤庵ゐ住澄しさまふ堅固の道心深き佛縁のあるならん願はくいきうんことを尼い此とき愁涙ば流し實や懺悔ふい十罪をも滅をと聞けばよしおだ尼が昔し物語りその一二を聞たまえ尼が父い河内國にて石川彌七兵衛とやせしが妾十八歳の春同國生馬權右衛門尉ゑ嫁ぎし後嘉祿元年の秋八月父彌七兵衛身沒りしが不幸にして同年の冬母おるものも世を辭して妾孤獨とおりぬれば愈々夫ゑ二心おく心のおよぶだけを勤めしゑ權右衛門尉が性稟心あくまで猛くして仁慈い自から薄かれば平常ふ狩ば樂しをとし朝暮山野に身をおきて鳥獸と殺すこと數多なり妾常ふこれを哭だしが一夕ふしぎの夢を見る世を去りたまひし我が父のいと淺猿し だまで痩をはて妾が枕上ゑ來りさまひ愧しおがら告ぐる事あ

りあれ前生の業より畜生道に墮罪なし妻おく雉子とおりはてゝ春の野ならぬ此山邊にあさる丹猶も因果のめぐり来て明日の暮あん人も多たに其許が夫權右衛門尉が矢先に命を縮めんとを予いうまもなく矢先を避けこの家ふ道れ来るべし其許夫をいひ慰めわが死状助け得さしめよと告ぐると思へば夢さめぬ其淺ました限りおけれど夢ゝ五臓のあつちひとも跡おきことを夢ともいへば憑むべ充ゝあらずとも疑惑こゝ丹まちく丹して夫丹を告とも告ざる間に夫弓箭を手挾みつゝ翌朝て狩に立出たり斯て其日も申刻過り家童下部が群々前よ後よと騒ぎ廻る何事ぞやとたち出て聞ばひとつの雉子の雄まよひ来て舘の内ふ飛入たりと言葉の下に大いおる雉子爰をのがれ彼方に飛こそ妾が膝下に来るとひとしく恐るゝ色おく膝上に羽を縮め震ふ容静こゝにおいて夢の告の空ごとならぬを始めてさとり我が父君とおもへば猶そゞろに悲しみ淺猿しく頭かき撫て春状接るに最嬉しかるありさまを下部等ふゝ物とらせよきにこしらへ伏籠に入れ餌状供へ小袖を被けて隱し置さしに夫權右衛門歸り来て即日ゝ獲物も多かりしと一入のよろこびなれば最上折節と昨夕の夢今日のやうを具さふ告げかの雉子と懐きて夫に見すれば夫ゝことふ打微笑み我乙日ふ此鳥を見付たびく的ひを定むれど如何ありけん仇矢とおり箭先をのがれし賢畜なれといひつゝとつて縋らんとす妾おどろき其手にすがり窮鳥懐中に入るときゝ獵人をらこれを捕へを殊さら見たる正夢の父の再誕とさくなれば此鳥ゝ妾ふたべ心行まで孝養なさんと種々詫とも且不通聞かで吾が手を捕ひ一舉締れば目口より血ゝど走り其まゝ死たり妾が悲しさ言むらりおくたとひ正おき夢に もあれ妾が再誕りの父といえゞよし愛憐ゝ加へゞとも害だにゆるしさまふべきをとおもへば恩ある夫おがら父の讐ふる思ひして人の心のたのみおく浮世の中の味氣なく出家遁世の志ざし止めがね薙髪せんことを夫にねがふ初めのゝどゝ取あへねど屢々これのみ願ひしを方見ことゝ思ひけん左あらば其まゝ出べしと怒りふ乘ゞて追ひ出を原より佛に仕ゆる身錦繡をのへりみる心もおく夫の敵

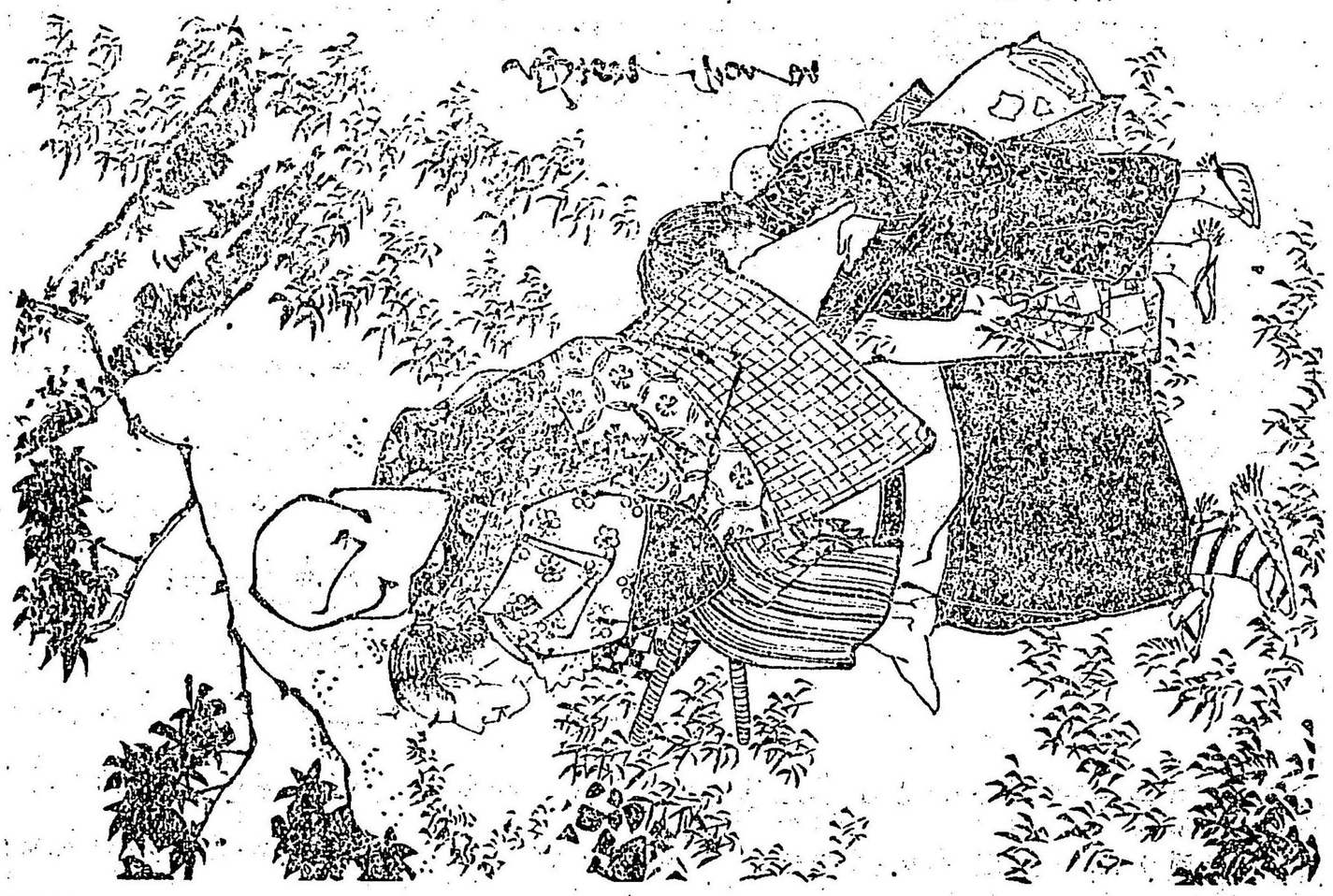
まを出離の門出この庵ゐ先住尼妾ゆゑのりのあるゐ便り本意のごとくゑ黒髪を殺ぎ明暮ゐ父母の菩提を祈り早七とせゑなりたれば心ゐのゝる雲もなく有がたき身とおりけるぞと舊懷の泪を流せば禪公も二階堂も俱ゐ衣の袖をひたし前業因果報的のおらひ今ゐ初めぬことおがら不測の話しを聞ものゥおゑのーおがら佛縁の然らしむる處いはゆる一子出家するときゐ九族天ゐ上る法語非業ゑ死せし鳥獸もすおえち惡因解脫ーて華の臺ゑのぼるらん頼もすくこそ思されよさてもおく遁世の身となるより絶て舊里の便りも聞かぞ此頃國人の來さりていへるゐ領主の殘忍なほ止ざるゐ愛妾の寵ゑ政事亂るなど惡ざまゑつぐる者有りしが其是非ゐ知らぞなどこさふるひまに定めなき白雨もいつしかれ至日もやうゝゑ傾けば禪公ゐ暇を乞ひ一所不住の行脚おればまたこそ參るおともあらめとねんごろゑ禮謝ゐーやがて此庵拭立出たまふ鎌倉ゐ歸國のゝち生馬權右衛門拭召し出ー殺生禁斷の法政を犯しあまつさへ妻の夢みし父の再生たとへ跡おきことおりとも無算ゑ生と

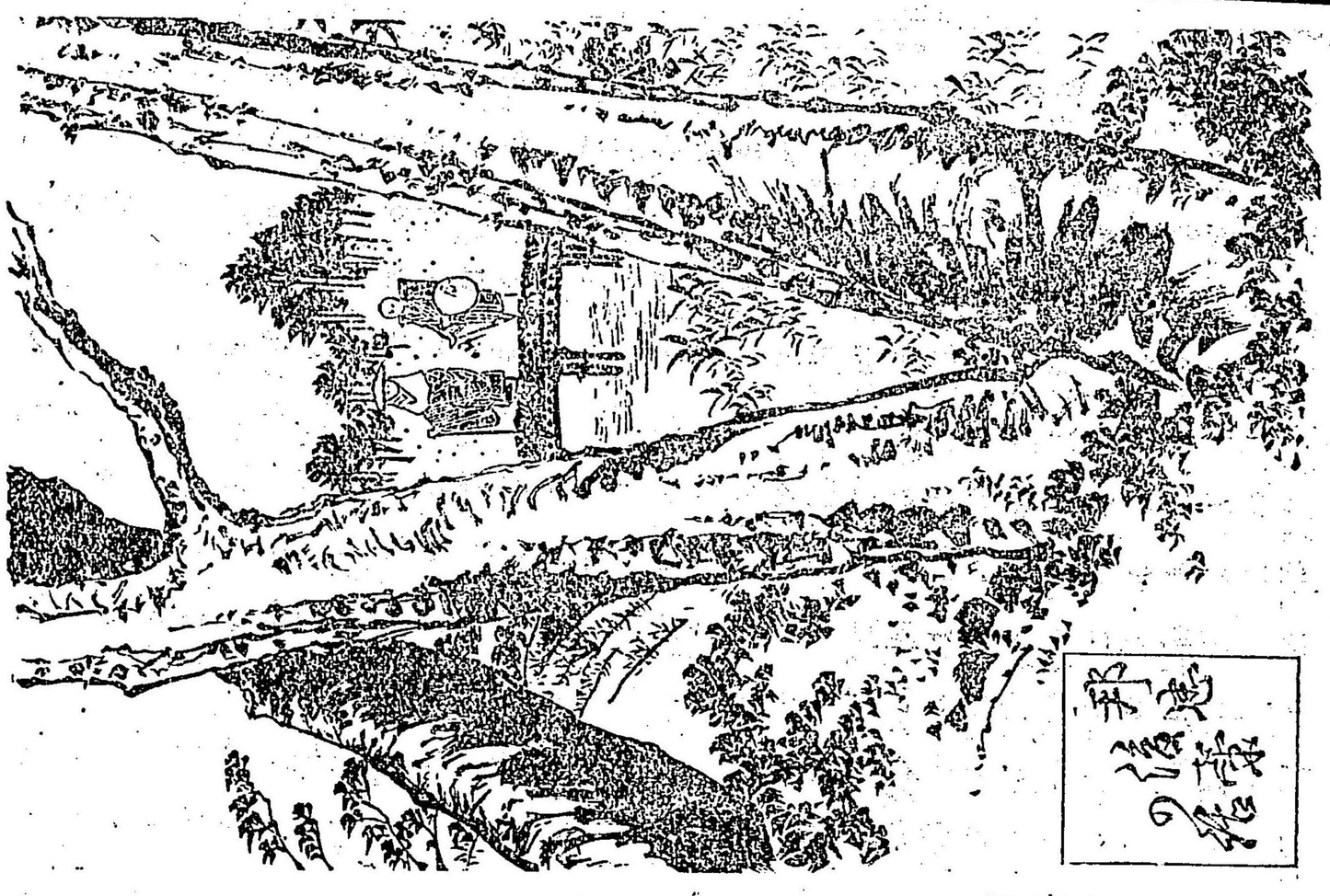
害する殘忍殊さら愛妾ゐ神心をどろゥし政事を亂る其罪をゥぞへ所帶を没收し重く追遣ひなしたまひまた播州の禪尼親孝あつきを褒稱ー生馬の所領の地をもつて佛供料ゑ寄附したまふといへり

○孝子邦忠老父を撫恤る事

并禪公老父と說話の事

紅葉の錦神のまに〳〵との神詠より以來世々の雅客の愛觀せらる大和の國龍田山の秋の景め實ゐ日本の秋の色こゝゐ寄集えたるごとく黄紅淡濃山姫の錦繡の衣をさらをがごとくこれがため遠近の貴賤群をおし楓下ゑ幕と張り花氈をつらね詩歌連誹おのがまゐ〳〵盃さと擧げて今樣を奏ー樽とたゝいて謠曲を諷ふこゝゐ三十歳ぞかりの壯士父ゑやあらん六旬にあまりたる老夫を脊ゑ負ひ里の小童ゐ荒莚小裹みをもたせこゝのしこの楓の下ゑ行そのすぐきたる烟光を賞しやがて老夫が指頭の方ゑ莚を敷せやとら老夫を脊より下し左こそ腰脚屈痛たまはんと脊を撫で脚を摩れば父ゐ其手をとゞ





め支へいや〳〵汝とそむる〳〵坂道重荷を負ひて苦勞ならんゆる〳〵と休息べしとさがひみ敬ひいつくしきやがて里の童子齎しさる一瓢の村醸一器の乾魚とり出をねんごろゐ勸盃さま節を亂さず親睦の形容傍らの楓の根よ腰うけたる兩人の旅僧別人おらぎ禪公主從なり先刻よゑ倩々この体を見たまひしが此どきよ聲をのけ花に親跡のへだてなしといへば楓下ゐもまた等しかるべし無て紅楓の名所とさけど思ひきや斯ぞのりの勝景おらんとゐ足下ゐ當所の人と見えさり秋ごとよゐ絶せぎと賞し給ゐんがうらやましと宣へば老夫も頭首おし先より接話せんとをれど尾羽を枯せし賤き身のものゆさんも無禮おりとためらひありしが嬉くも我よ言葉をたまふものうお耳遠からねど秋風の隔てあり荒筵に招請ぜんこと憚あるよゐ似たきども木の根石上よゐ増るべしこなたへ来りて息ひたまへ壯士ゐ身を起し禪公の前ゐいさり願くゐ不敬をゆるし彼方よ来たり息ひさまゐゑ老父も左こそ辱けおのらめと兩士が懸懃なる言葉よりをさあらば少頃席を汚さんと二階堂ともゐ筵よ圓ひし老翁ゐ脚痛おたまふと見えたりさぞお不自由に在ますらめ老夫頭を揮りて答ふるに貴命のごとく舊病よて筋骨縮まり一歩も今ゐ運びがたしされどもこれなる吾が悴事ふることの厚ければ四季のおがめ神佛まふで時とも日をも已がまよ〳〵脊肩をかりの騎馬衆輿昔し世ゐありし時よりもおか〳〵即今心易し兩位の大徳ゐ諸國經歷山川海陸の勝景或ひゐくさぐさの珍説奇事面白く二光を過しさまゐめ已ゐあたかも井中の蛙人傳にだよ聞まゐしといへれば禪公打あらひ藪家の雨ゐ出て聞と俚言あきど目を閉ぐれば万里を一瞬のうちゐ觀じ耳を押ゆれば善惡も一心に聽ゆきらに手足を煩らはさんや老士手を拍て曰實や羽翼おふして千里を翔り足脚おふして百里を走るの謂おらん面白し〳〵極樂ゐ西ゐありとゐ愚なりみおを母有りといふ事をおれ是ゐ己誤てり〳〵とたがひに禪味の答話のうち壯士ゐ茶を煎ぎさゝやのなる繪櫃を取出内よも外ゐも月雪もうえらぬ父子の咄し敵珍らしき話しもならざるゐ今日ゐさいえひ大徳母まみを父も樂しくおがをらん

怪しの一瓢も持たれど大徳ゐはゞのりあり手製の團子を煉たまゝ賤しのりとも召されんやと椎の葉ならで紅葉折敷兩僧と父に供へつゝ煎じ茶くみて勸むれゞ禪公ゐ其至孝を尊みこゝろよくおれを食し茶を喫し了て老父にむゝひ事卒爾にゐ似たれども壯士が至孝老士がふるまひ更ゐ賤夫とゐ見まゐらせぞいかさま由ある人おるべし袖の振合せも奇縁といへゞ其往古を聞せたまへ老士ゐ此と紀容体をあらさめ忘れて年を經しものをさらに舊懷の泪襟を浸をとやさんも面伏なれど何をか強てつゝむべき己ゐ安藤文吾右衛門邦久これなる悴ゐ新平邦忠とて先年叛逆の織名ゑ亡びし三浦泰村が一族おる能登左衛門尉行長が臣さりしが主君行長三浦が勸めゑよりひそかゑ泰村ゑ組せられしを某し仄ゐさつせしより數代の名家も斷絶の時節やこゝに到来せるゝと和漢逆臣のためしを曳てしむ〳〵君を諫めし折から時頼君の仁慈ゑより泰村等も先非悔ひ和睦平安と聞し嬉しさおゐも君ゐ恐尺して向後ゐ諫めさてまつりしゑ己が微忠を容さまひ不日ゐたゝび事を發せんと三浦より密使来れども先約にたがひ病ひゑ託し催促ゐ應じさまゐざりしを泰村が黨これをうたがひ間者をもつて實を探り己が諫めし始末をきゝ知り憎さとや思ひけん事ゐ托して某し伏三浦が宅へ招きよせ力者を伏て害せんとを己も豫じめおれを知りたれゞ力者兩人を其座ゐ切伏せとつも返し玄關まで出るゑ射人ゐ誰とも白羽の箭飛来つて某しが腰骨せめてぐさとたつ這哉卑怯おりとゐおぐり捨て馬上ゐ飛乘り一鞭呉れ私宅ゑ歸るゐ箭疵の痛苦ゐ君前をしばらく遠離る其隙に泰村いゐに謀りけんふたゝび三浦ゐ荷擔おゝつひゐ織名に家をうしなふ某し潔白おりとゐいへど流后ゐ逆徒の禄を喰へゞ生害せんとおもひしを親族さま〳〵いさむるゑ心ゐ猛くおもへども痛手ゐ動作もおし得ざれゞをめ〳〵人の分抱けを請け鑑倉を立退紀當國ゑ来りて後やう〳〵矢疵ゐ癒たれど筋骨を縮めしやらん歩行不通ゐかなたねば再び弓箭も取がたく元より二君ゐ仕ゆる心もおくいさづらゑ蟄居せしゑ日々に貧苦ゑせまるといへども悴が孝養ゑ心うきしく我ゑいさゝゐ不足おけ

れど悴を民間に果さんが口惜く鎌倉に登りて身を立よとおもへ〳〵いへど免
に角に父とをて、榮えをおもふに天の道に背くなりと曾ておもを承諾せぞ
といへ我れ〳〵る廢人其うへ既に老耄遠く母はおさんも心憂ければ昨
日と暮れ今日と過ぎ空しく二光を今日に送りぬと愁涙をうかべて物語る禪
公心中を感じさまひ燒野の雉子夜の鶴だ母子を思ひざるものやいある況や
人倫に於てをや吾儕等に世捨人の何の甲斐おき身なれども是より鎌倉に登
るおれば今日の奇遇に心懸てさるべ紀青雲の手便りあらば早速に知らせま
おらせんとねんごろに約をなし是に物がたりの面白さに紅日西山に春くを
わをる今宵の宿りもゐど遠みと厚く禮謝してこゝと立去りたまふ禪公鎌倉
に歸りて後安藤新平伐召し出し汝が父文吾右衛門逆徒行長が臣されば一旦
當國を追遣なをといへども汝親孝の厚きこと將軍聞し召しおよばれ其褒美
として父が遠國を恩免なし鎌倉に召返され汝はまた將軍家に奉仕おさしめ
秩祿許多を賜ふ旨を命じたまへば邦久身に餘る恩惠を拜謝し父を鎌倉に迎

へ其身に直參とおりて美名と四方にうぐゐやうし故郷へ錦をうざりしにまつ
たく至孝の譽れぞとうらやまざるにおのりしとうや

○最明寺入道高野山參詣の事

并修行者の咄を聞感じ給ふ事

山遠くして雲行客の跡を埋み松寒ふして風旅人の夢を破る扨も最明寺時頼
禪門に國々の名所古蹟神社佛閣の盛衰にもとより領主地頭地士ひをはじめ
民間匹夫匹婦にいたるまで邪正善惡を索りたまひさおきだに旅行の長途に
赴けば一日だに物憂く悲しきものを況んや何日を限りとし何國をあてと定
めさる方おく煙霞万里の道の末深き山路に分入りては青苔の筵に露をかた
しき郊原に行暮ては狐火狼聲を友とし身命伐天下の爲にあげうち心苦を万
民のさめに捨たまふに感佩うりける御修行おり斯て良日數を經紀伊國神谷
の宿に到り是より高野山に登山し靈場順拜しさまいんと山また山水また
水と分入りさまふに流石に身力疲ぢさせたまへば二階堂入道甲斐しく細手

を引き腰間を押し已に半腹まで登りたまひ免ある石上に腰うち掛休息したまふ折から丹同じ容したる獨りの修行者ゑい〳〵聲して登り来り倶に此處に杖とたて開しゐ倍る高山屈曲貴僧方も疲れたまはん吾儕も少頃し休みなんゆるさせさまへと傍らある芝生の上に平座して摺火と打て煙草を燻らせ何彼と説話りをる容さら丹言語にへつらひおくゑかも老賢のありさまゐ禪公もこゝろよく應答し足下いまだ壯年なるに如何なる宿縁に導れての斯く僧徒どゐおりまけん彼僧ゐほく〳〵點頭賢くも問ふ人のお吾儕が深衣の身とおりしゐ長々しかる由来何り路々語りやべしいざ當往貴僧たちと此處より三人打連だちまたも山路を分登る彼修行者ゐ後邊とうへりみ外に聞くべき人もあらねばさらば身上を語りやさん世にありがた紀人もあるえのかお愚僧ゐ下野の國小串谷を領したまふ平野佐右衛門尉善良が下郎なりしが主君善良元より廉直ゐして仁慈ふのく專ら領民撫育のため日夜心を苦しめたまふ或とき深慮まし〳〵て遽卒丹朱第の門外の松の柱に板屋根うけさせ倉庫の粮米三十俵を運び積せ閉りまばらおる垣を結しむ家臣等ゐ其意を得ぜ番士の員數をうかゞへばかおらぜ番人おくべからず寡人思ふ處あれば免角ゐ其まゝ閉けとのたまふ其夜ゐ何事もおかりしが第三日目の朝にいたつて積たる米俵過半とうしおふ臣等おどろきその旨をうつたへ番卒をおろんどうのゞひしに主君いさゝう心丹かけずなほ其まゝに捨ておのせたまふまた二三夜を經るうち殘米こと〳〵く紛失を臣等一圓ゐ其所以をおらぜ只粮米をうしおふこと拭惜み君に強て其趣意をうのゞふ君莞爾としてのたまゐく左こそ不審におもふらめ我公けの法令拭つゝしみ常ゐ領民をして嚴か丹守らしめ諭を丹勸善懲惡をもつぱらとをさいゐひにして久しく愁訴をきゝぜ然れどもおほ人心を試さんと斯はゝらゐせ樣し見るに夜々法令を犯しに物を盗むこれ我が政事の到らぜして國に困民あるがゆゑなり其うしおふ處の米穀ゐ我ゐ損あれども掠めし者に益あり我が為しむらくゐ其制の到らざると自ら殊丹慙愧したまひ以来いよ〳〵仁政を施し法制を守らしめた

まふこと三年其のち築宅修覆の料とて山林より竹木伐伐らせまた門外ふ積せらるゝ事三五夜ある夜また其半をうしおふ君ゐ事ともおゝしたまゐねど我々ひそゝにおもふゐ斯まで君の仁恵をありがさしとゐ思ゐをしてなほも掠むる奇怪さ何奴ならん見とめんとひそかふ五七人いひ合せかの竹木の陰ふしのぶ案のごとく十餘人の賤夫手拭もて面をおゐひはゞかる容体なく此處ふあつまり汝これもて我かれを否々其ゐ重し已これをとたがひふ力を惜み手分をる容かつて怖るゝ心なく殊さらふ魁首めける男大口開てから〳〵と笑ひ嗟呼智なるのお此領主前ふゐ米穀を積み今また竹木を置く此以後ゐ金銀を積おくべし代おをふ手間入らずと飽まで嘲哢大膽不敵我々見聞くふ堪忍しがたく憎き漢奴が雑言かないでや威しふ後日とこらさんと一齊ふ躍り出おのれ肝太くも盗みと働きそのうへ領主をさみする惡言ゆるし難しと飛のゝれば思ひがけざる我々ふ盗人いかでおどろかざらん竹木と捨て逃る中ふ彼魁首めける者突立て盗賊呼ゐり事笑し米穀竹木ゐ人倫の必用空しく大道に棄れたるを冥加をおゑふて取擧げたるを何がゆゑふ盗賊よばゝり聞もてならもをといふまゝに落さる木端を振まはし敵たいゝゝれば我々も憎き土民の言條かおと此時憤怒止めがたく我あやまつてゝの者ふ薄手一刀負せしゝば流石無頼もこきふ恐れ廣言ふも似ず逃失せたり日頃の鬱懐こゝふ散じ取り亂したる竹木を集め面々宅ふ歸りたるが隣縣ゐ北條家の領ふてすなゐち代官横溝郡治右衛門より翌朝使者をもつて申越をるゐ昨夜領分の百姓等數人所用あつて深更ふおよび貴筭の門前を通りし丹貴所の下部と口論ふおよび北條氏の領民ともはゞからず痛手負せしだん不届さの到りよつて相人の下部をわたさるべし思まゝ丹罰せんといふ主君早く此おとを察知したまふおゝ彼の使節に面會し叙ゐたび〳〵の倫盗これ北條家の領民とやおよそ盗賊を誅をること武門ふおいて珍しのうぢたとへ御領の士分たりとも倫盗なせる輩らを手を束ねて餘處ふ見んやこと更輕卒おがらも甚しが家乘法を犯を盗賊の報殺丹いかでまゐらすべ如法りあらんと取てもあへざる返答

に使者ふたゝび口を開かゞ赤面なして歸りしが横溝いかゞとゝりけん其後鎌倉評定衆より内々の使節立りてこの爭論を穿鑿ある主君前の件をもつて答ふ使者ひそかゐいへるゝ足下のくぶる處理非明白なり然れど相人ゝ北條家の領民私しの理を明らゐゐせんとゝきゞ北條家を蔑しろゝきるの理りならん乎其與ゝ諂んより寧寵ゐ諛よ必竟輕卒一人の命を憐れんで北條氏の憎みを請たまゝんこと然るべからゞこゝき私しの慮ゐあらゞみな評定衆の内意ゐきゞ執權の命ゝ同じゝうるべし主君謹んでたとへ私しゝ理ありとも公命いゝで違背をべき然きどゝ彼ゝ彼の君忠ゝしてさらゝ死ゐ宛べき罪あらゞ元をりゝゝる公命をうけたまゝることこれ我が政事のいたらざる所ゝして民状領する力足らざるゐり其任ゐあらゞして任ゝ何るゝ是君にいつゝる所ゐして不忠の至りなれば我即日冠纓を權門に懸け直ちゝ國を立さらんさらば北條家の武威をも倒さゞ横溝も本懷ゐるべしと室家を親族ゐ托し家財を臣等ゝ頒ち與へ夜ゐきゞれ家と出たまふ是ゝまつさくおほけゐく己が命ゝかはりたまふゝとおもへばいとゞ空恐ろしく主君が壽命長久を祈りつゝ己が犯罪消滅ゝた〳〵薙髮染衣と容を變諸國社閣を順拜し二つゝゝ主君の安否と尋ね侍るゝ人何つて善良ゝ野山の坊中ゝ蟄したまふと風の便をゝ聞しより何卒君ゝ再會し生涯薪水の勞を助け万部一の報謝せんと扨こそ登山をるところゐきど一伍一什限なく語るゐ禪公聞たまふまゝ〳〵心の裡ゝ一たび驚き一たび感じ更ゐ青砥が先言を思し合きゞ全身ゝ汗を流したまひて山徑屈曲もこれが爲ゝおぼえさまゝゞゞ字やく大門ゐいたりたまへば彼僧ゝ杖とゞめ俱ゐ靈佛を順拜せんとゞれど切りに主君の詮度ゐ心ゼかれぬれば爰より諸坊舍を尋ねめぐらん名殘をしくゝおもひながら慇懃ゝ別れと告ぐるゐ禪公も純忠老實を感じ再會を契りて立別れ禪公ゝ吻と息をつき思ひきゞ北條が權勢のゝる仁慈の英雄を斃さんとゝ是ゝまつたく空海大師我道崇が微志を憐みゝのらゞも邪正を告たまふならんとそゞろゝ落涙ましゝ〳〵けるさて此處より案内の僧を頼ゞまづ大塔に詣でさまふすゐはち安

置をる兩界の曼荼羅ハ平家の棟梁大相國清盛公の手づから書たまふ尊容と禪公聞たまい二階堂入道ヨのたまふハ積惡無慙の淨海公もいらなる宿善ヲ催されらゝる善根をなしたまひけんこれを以て昔しをおもへば暴惡のミヨえあらざりけり人ハ性善ヨして性惡ハおゝきどんゑのび難き一惡あれば史官ゑなはだしく記をゞゆゑ後世爪はじきして是を憎む十善ハ一惡を滅ず一惡ハ十善とおほふ人愼まぎんばあるべらぬを恐るべゝ〳〵と自らいましめ夫よりのぞ〳〵の堂舍祭内ゆつれて順拜ー落花雨と降ども笠を着ることなく深樹暮をあやまれども日ゆまだ傾のざればたゞちヨ興院へ參詣し大師入定の室の戸を拜しふかく志願の冥助を仰ぎ猶堂舍のこりなく拜禮したまふ丹四面に壘々さる五輪丹ハ舊苔みどをを顯ハし千々たる石塔ふハ其名多く滅し士農工商何人ら此土ヨ留まり貴賤男女誰か無常の風を免るべき七情六欲ハ人間の假の夢憂さよろあびも一堆の下ふ埋れ愛し惡も同じ黄泉の友なりといよ〳〵菩提の道を感じ一切有緣無緣の精靈佛果蓮臺の法施をなしたまふ爰ヨ一箇の石碑あり本性院曉和童子美濃國藤井氏俗名次郎五郎と墨漆もいまだ鮮のおるを祭内の僧指ーて老少不定の世の中ながら分て衰れおるハ此碑の主なり美濃の國ヨてハ戸瀨とゆふ所の領主藤井孫八郎といへる人男子二人持たりしゞ兄の次郎五郎ハすゑハち此碑の主ふて先妻の子弟次郎吉といへる召仕の腹おりしが本妻不幸ヨして死去のゝちこの召仕の女を以て後妻とを實世中ハ類ひ多なれど繼ーた中ゐど氣疎きハなーこの後妻繼子を惡むこと尋常ふ勝れてはなハだしく父ヨ纔訴ハ元よりふて佛丹願ひ神に祈りあらぬ修驗者丹黄金を與へ滅死せんことを呪咀おせども神鑑信を助け佛眼邪まを惡みたまふ理りわづらのおるーもあらざれば彌々身神をもだへ苦勞をかさねゐの諺ざヨ人ヨ咀はゞ穴二ツ堀れといへる如くらへつて瞋恚の焰ほヨ身と燒ども次郎五郎ハ何の障りもあらぬつひヨ志學の春ヨいたるに天性至孝仁慈ふかく後母のつらさを露怨みぬたま〳〵人あつて後妻が深心を告ぐれば次郎五郎さらにこヨを諾らハぬ他人さへ老さるハ父母の

ごとくに歎へどのいましめたとへ以前に婢女ゐもあれ父が許して後妻となし親子の名乗したるうへに時々ゐ折檻うくるともいかでか背きうらみんや我が孝養のたらざるを天より咎めたまふなれば慎うやまふに如くにはなしと少しも恨む心なし繼母にこれを聞くよりもいよ〳〵怒氣髪を貫く如く我と心ひ苦しめしが其辛勞の勞れまやまさに神佛の冥罰にや繼母にかりそめの勞さに臥しが時々刻々に病苦をまし晝夜に苦惱ひまもおくつひゐ三日といふ手足を張り兩眼を見詰て息切たり孫八郎に最愛の女に再の別れ兄弟の悲歎さとふる丹物おくやう〳〵寺門ゐ葬りて跡をとふらふ丹費や月日愁人丹管ちゐ日往月来つて百ケ日にあされば佛事作善丁寧に勤めてのち新靈ゐ供ぐたる餅菓と下げ孫八郎とはじめ兄弟親族等これを頒ちて食するゐ次郎五郎にことに泪と共に餅を掌ろゐさゝげ慎んで今にこれおん母の賜えのとうやまひ戴き喰たるに心身惱亂し鼻口より鮮血を流し虚空ひ掴みさちまち空しくなると共に不測や死体の口中より小さき蛇の出ると見えしが其まゝ形ちに失さりけるつら〳〵この形容を考ふるに座を同じくして食したる次郎吉および親族ゐ誰一人も災害なくひとり次郎五郎のみ命を絶しにまつたく後妻の怨念にて死後に本意を達せしゐやと衆人髪毛と寒からむ父の孫八郎に悲歎丹堪ゐねば我愛着の離れがさく執念きふのき女ともの知らで後妻と舉用しよりあたら男子を害せしに皆こゝ已が過りなりと幼稚の次郎吉と名跡とし後妻の兄藤九郎といへるを後見とおゝ家事ことく〳〵くこれ丹あづけたちまち剃髪染衣の身とおり兩妻嫡子の菩提のためかつに浮世の塵を除れんと諸國順參に出たりとおんかゝれば親類取計り此一石の碑を立て母子一蓮托生の作善憐れなることならずや禪公にこの説話耳を聳てゝ聞了りさて此施主に何人ありや禁内僧微音にて施主こそ彼伯父藤九郎おれさるに此頃國人の噂にかの藤九郎といへるもの其後次郎吉が後見に名のみにて家事已がこゝろまかせにし愛妾數多召抱へ晝夜淫酒を事として歡樂十二分に二光を送る嗟乎藤井氏を倒さんに風前の燈火にひとしなど聞け

り禪公うちうなづき左こそあらめおよそ祭奠ゝ鴆毒を和しこゝを勸めて殺害するゝ和漢ともに珍らしゝらぎいゝんぞ亡妻小蛇とおらん憐むべしこの小童惡むべきゝ藤九郎とゝの石塔ゝ打むゝひ本性院曉知俗名藤井次郎五郎頓生菩提と回向したまふ既ゝ紅日西ゝ落ち暮鐘耳ゝつらぬけば祭内の僧ゝこゝより歸し二階堂とゝも心靜ゝ下向道ゝ赴きたまひしが禪公杖をとゞめ二階堂をゝへりみ我志願のさめ斯く國々とめぐれば こそ此靈場佛地とも拜きゝ今哉空しくこゝを去らばふたゝび詣でんこと思ひもよらぎ今宵ゝ風温かゝ月また清しこひねがはくゝ興院ゝ登り夜とゝも大師冥助を仰がんこと弐二階堂も頓首なし貧道も同じ願心有がたきおぼし立いざゝせたまへと身を翻せば禪公も喜悅たまひ世離ゝし身ゝかろ〳〵ゝまた興院ゝ登らせたまふ

○燈籠堂ゝ通夜の事
并異僧と說話の事

禪公ゝ入道と俱ゝふたゝび興院ゝ登り大師入定の室前ゝある燈籠堂の椽上ゝ座を下て心靜ゝ念誦したまふ鐘聲半夜香山雨散入前溪楓葉秋と何玄が詠ぜし詩のごとく夜半の風の音雲間の月ゝげ心意ゝ清す種となり心嬉しく念誦の折ゝゝ鷲の山へざつる雲や深からん常ゝすむなる月と見ぬ哉と打唱しつゝひやう〳〵として來る者あり禪公二階道をつく〳〵見て客僧ゝ何方より參詣ませるやことゝ通夜の形容ゝ見ゆるゝいと殊勝ゝおるおんことおり禪公も月暉ゝすかゝ見るゝ六句ゝあまりたる老僧ゝおればねんごろゝ禮をゝし我ゝ東國の産ゝ〳〵てゝのねて當山參詣の志願なゝやう〳〵今日ゝゝゝ宿意を果したるが聞し丹增れる靈場佛地また來んことのはゝり難さゝ斯通夜ゝせる處ゝり大德にゝ當山常住の人ゝらんか彼の僧ゝ頭を振りいゝ〳〵我も抖擻行脚真如の月のをかしさゝ同宿ゝ宿坊ゝまたせ獨こゝゝみたちもとほるなり免させたまへと椽丹腰ゝけ抑當山の靈場といつむ釋の空海慈尊の出世五十六億七千萬歳のその曉ゝとまちたまゝんと彌勒の寶号を念じゝがら

入定の戸と閉ぢくまたまふ真言秘密の靈山おれば たゞへ凡俗の身なりとも
一衆に參詣をべきあるを況んや法流に浴をる僧徒いかで拜禮おさゞるべき
さても貴僧に東國とや今や關東八州のおかに相州鎌倉にいかおるこどう
時めくやらん夜とゝもに語りさまへ禪公こたへてさんに我々元より一所不
住の身ゐあれば くはしくに聞得ざるうへ去ぬるころ前執權北條時頼薨じさ
まへば今様風流さらにたえて佛事作善の外なければ何取難子たる事おくに
老僧うちうおづき賢に左もあらん去るにても其執權さる時頼朝臣その身に
武門の棟梁おがら佛門に深く歸入ありて供佛施僧のいとおみの大方おらぢ
と聞くにいのに禪公答へて我もこの地ゐ留錫ころ正く見聞くこともありそ
も最明寺禪門に佛法禪味をでゐ大悟し朝暮の勤行懈怠おく數ケ所に寺院を
建立し僧徒に供養なをこといと有がさき志ざしと感じたをまつる人もあり
また傍らにいへるに時頼武門ゐ生れ得て既に天下の執權として國家万民
治めんぢるゐ聖賢の道に薄うしを異端浮屠の教へに迷ひ破戒放逸の僧徒

を尊み國用ゐ充べき金錢を費し無益の寺院を新造せること愚なりと誹るも
のもあり我その是非知わきまへぢいうゐこれを辨ぜん哉老僧に莞爾として
凡寺と建僧を供養をる ゐ二箇の差別あり名利名聞を離れて一向に佛を尊み
まさ慈悲心の真實におくりて諸堂建立し施僧のいとなみあらんゐに仮令供
養の引導師破戒無慙の徒たりとも昏き街の燈燭のごとく其善心奚ぞ必ぢ菩
提の因とならざらん我慢名聞に造寺供養に大德碩學の知識長老百味千果を
奠供し香花莊嚴善美となをともいさゝか功德の基ゐとならぢ唐土の往昔梁
武帝達磨大師ゐ問て曰く我寺と建る事一千七百ケ寺僧尼拭供養をる事十万
八千人まさに功德あるべきや達磨こさへて無功德とのたまふこれ嚴心驕慢
より起るを以てかくに戒めたてまつるとなん是理に佛法のみならぢ民を治
むるもまた然りたとへ租斂を薄うなし倉廩を開き仁慈を施をも己が名利後
榮を思へば黎民かへつて後患を恐るまた一俵一緡の米錢だも側隱羞惡の信
拭もつてせば民をな是を歡樂をこゝをもつて見る時に儒佛奚ぞ分理あらん

や禪公此高論を聞が隨心勝の進むを覺えぎーていさぎき大德の教戒うおあへてまた問ふ時頼在せよ判斷ありし天下の政道若邪まを聞たまいぎや老僧こたへて佛意いさくことを得たまどん政事の邪正我これを知らぎされど我曽て聞事有り國家興隆せんとす。るとき必ぎ禎祥の兆しあり國家勤亂せんとをるときまた必ぎ妖孽あり然ぎば人の君たるやよし身を脩め德を養ふときは妖孽のへつて禎祥となり邦よく治まり民安し若驕佚放恣なるときは禎祥變じて災害となり家くつがへり身亡ぶ往昔商王紂がときふ城の隅ふ雀巣ず造りて卵を生じこまと養ふよ鵠とある臣下皆あやーんで奇とを太史奏して曰く凡小をもつて大を生ぎる國家正よ昌んおるの吉き兆しと祝ぎ紂王心ふ誇り我ふ德あるがゆゑ天これを祐くと已が心のまゝふせざる事おーかるがゆゑ天惡み人背ひて終ふみかたなさひとゝおりて國亡び宗廟を絶はまた殷王大戊の世ふ商の政やうやく衰へ諸侯よ畔くもの多し時ふ朝廷ふ桑樹自ら生じ七日よして枝葉繁茂し大樹となる太史奏して曰く夫桑は郊原に生る丶處おりおかるを今朝廷よ生じおかも枝葉盛んおるは禁闕郊原とおる凶兆ならんと大戊大いよ厳心恐怖ーたまひ身を慎み德を脩め下を禮し民を惠むこと一年先王の政ごとふたゝび隆んふなり人民信服し夷狄貢ず來服をること十六ケ國こゝよおいて天下おほいよ治まる是天惡むふあらを善らおめんがためおりこまを人民よ譬ふれば人の子あやまちあるときふ父母いかりて之と懲を子其あやまちず悟り向後とつゝしむと知は父母の怒りたちまち解け舊ふまして愛するがごとし若人君道おきときは天これと懲さんがため飢饉疫癘天變地妖山崩ま河渴ま さま〳〵あやーくふしぎを示す之を敬ーー之を慎むときは變じて國家昌大おらんこゝをもつて楚莊王は天變おばらくも不現ときは恐れ敬んで天ふ告げて曰く天其朕を捨たまふのいかんぞ怠りをいましめざると歎知たまふ今古ふ尊ぶべき人主さり此こゝろ時頼の心よありやなしや禪公は心裏ふ恐れ恥いりたまひふたゝび問はんとおたまふ折ら兩人の徒僧出来り彼の老僧が前よ頓首ー師の坊をみやかよ歸ら

せたまへ最早晨朝ゆ近しと急がせば老僧は禪公よむかひ今夜さいはひよし
て古今と論じ真如の月の影を見たりうたみゆ一所不住の沙門奇縁あらば再
會せん勉めよや禪師頼めよや此ときと禪公とふたゝび見返りつゝまた飄然
と下山したまふ禪公は怪然とその後影を見送りたまひ名殘よたえぬ覺しけ
れば彼老僧が跡を追んと遽わしく身を興しさまふ折から梵鐘の一聲耳をつ
らぬき目を開きて見たまへば是あん南柯の一夢よして燈籠堂の柱ゆ脊を倚
せ座前に袖香爐をもゑて薫香の匂ひ馥郁たり二階堂は公の睡覺しを見て君
前刻より睡眠なしさまふはいかさま山路の勞れよやとあざと驚うしさてま
つらぬ然ど山嵐夜濕の恐れも何れば香煙を絶せぬ護りたてまつるいさゝか
疲勞をなぐさめさまひしよや公は入道が計らひを喜悦し今見し夢の始終を
のたりつら〳〵こゝを考へ見るよ頼めやこの時の一言に我時頼の守の含め
たる金く大師のおつげおらめと信心肝よ銘じつゝさらよ寶前ゆ禮拜あゝ早
東雲の空近く草葉の朝露うち拂ひ名殘をしくも當山と下りたまふ

○禪公美濃國へ到る事

并一男を懲し一女を救ふ事

禪公は辛勞よ何かぞ飲食をいとはで國々の山川まで潜行したまむ今日美濃
の國邊よいたりさまふ實や秋の日短景く紅日いつしか山岫ゆ隱れ宿り烏塒
らよ潜み誰彼どきも早過ぎて比も八月廿三日宵闇の空のうち曇れば星の赫
光ざよへだゝりて一歩も前途見え分ねば禪公二階堂をうへりみ求むべき宿
ふは三里ばかへざて過ぎ越方も三里と聞く殊よ身体もやゝ疲れさまば今宵は
松下ば宿とおし一夜の夢をも結ばんと櫻木おらで常磐おる松を主と座を定
め引數物よは衣の袖笠を枕よ夜もすがら念誦の外はなかりしよ伏待月のや
うやく昇るゆ左方右方ば見たまへば卒都婆五輪たて連おり手向の水よ蛙な
き榕の葉よだゆ鳴虫のいとゞあはれゆ物凄き容形こは三昧ゆてありつるよ
如何よ入道御覽ぜよ此世は仮の夢のうちつひよは西方同行おれと生ば訪ふ
ものは多く死をとふらふ者は少くたちならびたる卒都婆五輪みゆ苔むして

篤かづら這まとゐる丶容形ゐとふ、らふ人も稀ゴして大方ゐ無縁おらめ憐む
べ〜〜と入道諸とも合掌お〜南無幽靈出離生死頓生菩提と懇ろゴ讀誦お
したまふ丹不測やのおたの草叢に怪しきまでの物音し五輪石塔の物間ゴ白
き陰の散亂〜とし且つ顯えうつ隱れ或ひゐ突然と起或ひゐ倒れ其容体尋
常おらぬ怪しきゐだん〜ゐ近く来て廣み丹出をくと立るを目とめて見れ
ば壮ばかりの痩たる女裾短おる白帷子を着し四度お圧裳搖合せ爰かしこ
見巡らし禪公兩位玖吡と見てする〜と走りより禪公の袖ゴすがり我と助
けてたびさまへと只慄々と震ふさま凡俗虚弱の輩たらんにゐ驚怖轉倒おす
べきを強勇の二階堂大徳の禪公なれば些しもおどろく氣色なく汝が五音阿
吽の息氣迷魂靈鬼の類ならぬ其爲躰く不測なりいかおる者ぞ始末をうされ
苦難を救ふゐ出家の勤め邪正ゐよりて助け得させん女ゐ數回額突て苦げな
る息をつぎあへぬ妾ゐ丶より十餘町あなた瀧本といふ里の者おり去ぬる
頃より端なくも風の心地ゐ打伏しが日々ゴ病苦の彌増り已ゐ死べくおぼに

しが夫よりさらに物を辨たぬ今不圖心われに歸り父母を呼ども諾へおくこ
とゐ寒冷のいふばかりおく四方を探ぬば箱の内はじめて我が身夙死して埋
葬らぬしとおもふより怖さ悲しさ遣かさおく蓋と覺しき上の方を力を出し
て押のけしがさいはひにして這出ることを得何さり見ぬば無てより見覺え
たりし三昧おれど夜陰のことゝいひ精力つきておか〜いまゐ歩みがたし
希がむくゐ父母丹妾が蘇生しを告げてたべと息たえ〜ゴ動靜をかされば
そゐ不便なり父母の愁傷も扨こそとおもゐるれかた〜送りつゝゐをべし
とやをら座玖立んとする折から一人の惡僧三昧より躍り出おのれ死損ひの
女郎め遁るとてのがをべきかと持たる棒をふり上てかの蘇生りの女をうさ
んとを二階堂其腕を腔と握りやよ待汝られゐ何の罰あつて囘生りしものを
打んとする哉彼もの利腕を拿らぬながら入道を撲地と白眼いらざる痩坊主
の留だてうお渠奴ゐ昨日埋葬し亡者およそ墓守の法として一度三昧ゐ送ら
れし身埋葬荼毘の差別おくたとへ其期ゐ蘇生すとも直ちゴ打殺してこれを

助けず若其亡者を活して歸せば其墓所のあらぎ絶るといふこのゆゑふ墓を守る者新葬あるべ後四五日晝夜三昧を廻りあらたむゝる定法あるあれば今彼を打殺さんふ何の仔細かあるべ死ぞ離せ〳〵とのせれども無双の大力ふ握られ丶拳麻る丶むかりは覺えしゝば猶凝ずまふ左手して二階堂ゞ真額うたんせす入道其手をも丁と丶り兩腕脊ふ捻まぐるば禪公かると面をあいせ汝い幼名小次郎今い空阿ふあらぎやゝの者もまた目とさだめ我が幼名を去るる汝い何奴禪公い面を背け二階道は目したまへば入道心得其まゝ腕骨伐丁と一擧はうんともいむず息絶えさり二階堂い襟上引提三昧の興ふ捨ゐきて驚き怖るゝ女をなぐさめ今い後易丶いざゆゝんと二階堂は手を曳せ靜かはこゝを立たまふ二階堂いぶゝらしく斯ばゝり仁愛を垂たまふ君のゝの基守は死をさまふ其所謂の解けゞたくひそかはおれを問たてまつる禪公い莞爾として早くも忘失たまひしの先年由比ゞ濱邊ふて父の讐討てる小童は其と紀後來をいましめしは案のごとく殘忍無頼いはゆる世上の害あれば早く暇をとらせしぞ穴賢とぞのさまひけり斯てやう〳〵瀧本はいたるその夜すでに丑刻なり爰ふん我許と女のいふは禪公表をほら〳〵と叩く内ふい父母ゞ愛子の死別はありし事ども搔口説いまだ寢ぬせぎ佛名を誦し菩提を深くとふらふ折から表を叩く板戸の音いぶゝーふから老母立出で誰そ何ごゝ咎むる聲は是い諸國修行の僧當家に疇昔世を辭せし息女のことはより來りたり老母い不審りおもへども女のことはより出家の來りたまふと聞き何とやらん胸騒がれ門の板戸伐細めに明て外面の容形をうかゞふを待設けたるかの女板戸無体はおし明て母上喃と取りすがる死し娘の容貌見るよりいかでおどろかざらん覺えぞわつと聲を上げ飛のきて庭はひれ伏たゞ南無阿彌陀佛〳〵とわふふ紀震ふ禪公微笑してさなおどろ紀そ是の小女かふらぞ幽靈迷魂ならで死せし娘の蘇生りたるぞ老母い猶もおそる〳〵女の腰足搖ふでていゝさま足元もたしゝはあれば幽靈ふらで真實まことふ我が娘にてありけるぞ其い夢か現ゝ夢ならで千歳も覺なとゝき口説たがひ〻手

を組を抱さあひ嬉し泣まなさけるが父なる者も始終をもれ聞飛立ばかりのうましさをさを兩僧の手前ふて心をしづめ懇懃ふ座敷に請じ禮謝とのべ偖其始終とたづぬるまに兩僧および女も俱まありし事ども落おく語れば父母い疊をふ額ををり若兩僧のいまさずばのの墓守が手ふ死してのく再會い得ざらまじ實まに再生の恩人と手の舞足の踏としらずこの隙まに老母心得娘が靈供まに貰ひ得し干湯波蒟蒻千鰯などいろ〳〵を煮て湯漬を勸む父いさらふ禪公にむかひ高惠まよつて娘の再生明朝い宿坊ふ達すべきが彼墓守が死をいかふせん禪公い打笑ひ彼い己まに定業ふして三昧に野倒死たるかれば渠が事い述るまおよむず只墓を穿出て歸らんとせしふさいはひ旅僧まに出合此宅まで送らまし、とのみやべしもつとを我思ふよしもあればかあらぢ其許まに仔細いあらじ老父猶さら恩惠を感佩すうくて夜も明仄と明わたれば暇を告げて立出たまふを夫婦さま〳〵止めまゐらをるを再會を契りこゝ状別またまひけり

○禪公山中ふ迷ふ事

并隱者の語を聞驚く事

斯て禪公い所々を廻り越中ふいたり行方しらぬ山中を覺束なくもたどりたまふまに斜陽すでにうくまを然も雨さへ降出たるが行先人里何りとも見えぢいうぶいせんと杖を立て四方を見廻らしたまふまたるうの木間まちら〳〵と灯火の光り見えけまば心嬉しく灯火を目的にやう〳〵爰まに至りて見れば荒いなる山守の孤家おりされど樹下石根ふいまさるめれと柴結ふ門戸ふたちより一宿を攝せんことを乞さまふ内より荒布の裾短なるを着たる賤男の一人たち出てかくる人稀おる山中ことさら雨の暗夜ふ何人おるぞと咎むるまに禪公い腰を折り見たまふごとき雲水の兩人跡の宿まに日高かりしも雨雲早く日を晩し行先とても不知案内衰れ一夜状惠みたまへうの賤男も容貌まに似氣おく夫い蒲まーき御事おり左いあまど見そなはばごとく壁崩れ屋根やぶれ我身をだまも入がたく今少し往方まい我が主おる者の庵あり是も破屋

まゐ侍れども己が住家ゐ増るべしいざ案内なしまゐらせんと松明ともしゑ先路にたちこゝゑ蟠木あり彼方ゐ巖角など分抱おして行程ゑおよそ一町むのりと覺しくて柴垣結圍し庵ありおむらくこゝゑ俟せさまへと禪公二人と門邊に立せ其身ゐ入りて おゐ〳〵と語る主と思しき聲さゐやゐゐ夫ゐ能こそ誘ひやたりわき今天象を見るゑ不審の氣色あらゐれたるをひそかゑこれを卜筮するゐ天下を掌握をべき人我が家ゐ近づきたまふと表れたり其修行者こそ凡人ならざきうやゝしく請じやせと命ずると禪公牆をへだてゝこれを聞き心中ことゐ驚きたまひ二階堂の袖と曳きゑ暗夜をさいはひ足を早め此處ゑつまづ紀彼方ゑ轉び松吹風も人や追 梟 鳴聲も呼ぶのとおそれ足をばゐりゑ馳たまひやうやく程も遠ざかれば禪公はじめて心をやをんじ杖をたてゝ息をつぎ聞きしゐ二階堂いゐしへ人皇六十五代の帝花山天皇とやせしがゐねて御遁世の厭心深く殊さゐ觀音薩埵の靈場三十三所を順拜たまゐんと寛和二年六月廿三日の夜半ひそかゐ王城をおのび出たまひ計らぎ安倍の晴明が館の裏を通りたまふ隨從の士指先てこきこそ晴明が居宅なきとやゑ天皇何の御心おく窓より覗き見たまふゐ時しも苦熱頃なきば晴明館ゐ端居して涼しき風を待取しが不圖宿星を見て大いに恐きゑ今宵まさしく天皇の何きの方ゑか潛行ましまを暫時もさゝおきがさき大事といそがゐしく朝服を着し内裡へまゐらんぎるさまを見て天皇おどろき其所をのがれさせたまひ晴明が其道ゐ長ぜしを始めて感じたまひゝとかや今彼山中ゐ住る者もとさ〳〵こきゐ劣らぬ卜筮已ゑ我が數年の志願一朝ゑして破れんとせりいゐおる者の蟄せるおらんと其名床しくおぼさきけり後ゐ聞くこれなん天文博士磯野定久といふ者ゐて陰陽頭重雅と諍論ゐより双方とも解官せられしよりこゝに蟄居せしとなり禪公鎌倉ゐ歸館のゝち彼定久を召し出され過し雨夜ゑいみじくも我が至れるを策り知る神機妙筮感稱するゐ堪たりすゐゐち前官ゑ任叙せさせ食禄許多たまゐりて鎌倉御所ゐ留めさまひけり

○禪公佐野の庄へ到り給ふ事

弁常世が宅に止宿給ふ事

光陰射る箭のごとく日月走る馬に似て今年も早く師走の中旬例もより雪の繁しく見る〳〵四方の銀世界趣べき峯も白妙の雲ゐ閉さる心地して禪公ハ左よつゑ右ハ入道の肩を力よつもたる雪を踏分〳〵外ゐる木蔭ゐ立休らひ適ま往来ふ里人に國處の名を問ひたまふに下野國佐野の庄と答ふ禪公入道のたまふハいとしへ中納言定家卿あし引の大和路ゐる佐野のわたりの雪

拭愛て

駒とめてそでうち拂ふかげもおし
佐野のわたりの雪の夕ぐれ

と詠ぜさまふそれハ大和こゝに下野處ハ異れど實景幽吟爰ゐ感稱あまりあるとゑばらく不を詠めさまひしが寒風凜々として肌膚を斷ち臘雪飄々として簑笠重く降とふる雪見るがうち積るが上ゐつみて尺餘ゐおよべば何方を道とも分り兼ね最早一歩も進み難ければこの邊りに宿るべき家居やあると

右見左見一町餘り彼方ゐこそ雪堆らく見えたるハ如何さま家とも思ゑまて やう〳〵こゝに近寄り見れば萱が軒端の朽がちに松の柱竹の垣夫さへ斜めに傾きたるハ人住べくも見えざるに雪ハ鬱毛ゐ似て飛で散亂し人ハ鶴鷺を衣て立て徘徊をとうち誦する聲ゐ人住る状よろこび雪ゐ閉たる柴折戸に音づれ諸國行脚の僧徒なるゞゑらぬ旅路に降積む雪のゑゐも日陰のくれなんとす憐ま一宿をゆるしたまへとねんごろゐ乞ひさまへば四十歳ゑのりの女立出で夫ハ扨おそ困ゞたまえん御宿ハ易きことゐがら住ざるいぶせき我が屋外に夢結ばせん便りもなし左あれ主ゐ問ひたべらんと内ゐ入りて斯と告ぐるに五十歳ばうりの痩れたる男足半ゑきて門邊に立出妻ゐる者ゞやごと く誠に見ぐるしき住居ゐて御宿まゐらせんも愧しけれ爰より十町ゑかり彼方ゐ山本の里といへる美ゑ旅亭も多のれば急ぎさまへ心よく夢結びたまひてよけん禪公ハ腰を折て疲れ果たる雲水の佗しき床のいとふべきや曲て厚意を垂たまひ軒下をだに免したまハゞ此ゐ増さる悦びなしと猶ひたきらゐ

乞ひさまへば主は諸手拭額あて御痛しきかぎりおく殊さら佛躰を具した
る兩位我々宿因つたなくてかゝる困苦ふ果るともせめて來世の善緣に願ひ
ても止宿ん本意なれど如何ゝせん斯る寒天氷地ふ炭一塊柴一本も身ゝたく
はへし物もなく袖搔合せ寒さを凌ぎ勿論明旦の糧ざゝえ無く世ふも苦しだ
ていたらく御宿は免したまふべしと身を哭ちたる夫婦が愁涙禪公も憐きと
おぼし我が苦しさふ人を思ひぞあばしも心勞掛けるは我過てり〳〵よしさ
らば如何ゝもし其山本ゝいそぎなんと夫婦ゝ厚く禮を做し眞袖の雪を打ち
ひ身を蠕へし足重氣ゝ二階堂ゝ手拭曳れ縣路〳〵として歩みたまふ容他
見ふさへも痛はしく夫婦は門邊ゝ見送りつゝ嗟呼あれ世ゝある時ならば一
夜はものかは十夜百ケ日飽まで供養なをべきをかゝる貧苦に堪かねて無下
ゝ斷る遺念さとは知りたまはで如何ぞやり邪見の者やと恨みたまはんこひ
ねがはくは免も角ぞかし一夜を明させたまはんことをと打ち歎きさる妻の
ことばゝ夫も同じ舊懷の泪は袗ゝ氷柱をなし徒忙然と後陰隱るゝまでと見

送りしが禪公は尺餘の積る雪ふ行き惱みつゝ爰彼ゝ杖をとゞめて立休らひ
〳〵ではまた歩みやう〳〵一丁ばかり行さまふゝ心は剛にましませども流
石錦繡ゝまとをれし御身四肢も龜り肌膚も氷り苦寒心魂を貫ぬけるがたち
まちだうと轉びたまふ二階堂鷲妃いだき起せど神心恍惚とし脚力たちかね
雪中ゝまたも斃れさまふを夫婦はるのゝ見るよりも妻はあやと聲を上ぐ
夫は見るふ堪かねけん息拭ぬがらゝ走りつき二階堂とばかり禪公を脊ゝ負
ひて急ぎ我が家ゝともふひ婦り半朽たる荒筵と引がさね押ならし脊よりや
をら祥公を下したてまつれど未だ言葉さへ出したまはぬ息ざしもまた絶
〳〵なり二階堂は頭陀袋より香藥を出しのませたてまつり脊を撫で胸を摩り
さま〳〵介抱なしおがら如何ふ女性氷雪ふ凍えたまふあれば燒火してまゐ
らせたし何ゝまれ燃べきものはあらざるやと乞るゝ詞ゝ女は恥らひ前ゝ夫
が中せしごとく柴一枝さへおきが淺猿しされども斯る危急なきば何がふ燒
火の料となさん免や爲ん角やと立まよふ折から夫は一束の雪持る木をかゝ

へ来てこれを燒火とおーまゐらせんと角なる石ゑ凹みたる金打合せ〳〵心せゐれば附ゐぬる燧の走り火やう〳〵と付木ゑうつして燒つくれば初めゐ煙る生柴もやう〳〵火勢盛んとなるゑ旅僧の傍ゐもち行けば入道ゐ禪公を抱ゑ起ー手足を暖めたてまつるゑ女ゐ心得燒火の傍ゐ怪しきまでゑ埃びたる鈎鍋とのけ置たり良ありて禪公ゐやう〳〵心氣我にのへり息脈慥のにおらせたまへば世ゐゑ嬉しゑ形姿ゑて其許達が厚き情けもて絶べゑ命を保てること金く夫婦のたまものゐり此恩いつか忘却るべき主ゐ額ゐ汗を流し見たまふべき茅屋ゑてゑかも物ひとつあらざれば扨こそ情面やせーのど豈計らんや寒氣ゑ閉られたまゐんとゐ斯織れたる荒莚も雪の中ゐゐまさるべしと伴ひまゐらせはべるゑ夕餉ゑさてまつるべき物もおしこれゐ粟の粥の侍るを妻おるゑのゝ心して今の燒火ゐ暖めたれば此がお食し召さるべきのと器を幾回となく洗ひそゝぎ粥と盛て兩位ゐ出せば禪公ゐ莞爾として是ゐ珍らしき粟の飯嘗て我等が好物とて快くこきを食しさまふ夫婦ゐさらゑ恥らいて其往昔ゐ我儕さへ粟の飯の名さへ知らぬを好物ありとのたまふ事有がたさよと歡べば禪公あらさめ主ゐむかひ先に宿ゑを求めしとき折燒柴だにおしと聞しが今我さめとたまゐりし燒火ゐいのでなしたまふや妻も夫ゐむかひつゝ連の御僧の何と哉燒火ゑおさんものおさやと尋たまひー其と抔ゑ兎やせんかくやと思ゐ折ら柴をいだきて来たまひしを最いぶのしく思ひはべると尋ぬる妻を主ゐ白眼女のさし出事を正すゐ賓客へ不禮さりおがら先言ゐ似ざる折燒柴事をいつゐるゑ或ゐまた他ゑ盜める哉の狐疑もまさんの是見たまへと仮起て側への破障子ひき明れゐ軒ゑならべー鉢植の三ツ並べたるが三ツながら真木根元より押伐たゑ兩僧ゐこれを見て扨ゐ鉢の木を持されさるの主愁涙ぐゝてさんひゐ某ーが世ゐありし程ゐ諺ざゑいふ馬鹿樹好との譬へのごとく生得鉢の植を好みつゝ數百の花木をうゑ並べ四季の詠めゑ飽ざめしが一朝子細の事により斯く蟄居せる我が身ゑゐ人の思ゐんゐども有れと親類友人ゐ聯りしがのゐ〳〵の其中ゐ梅松櫻の三木を愛ー

今はおちぶれ朝夕の煙の代もなき身おがらなほこの三木ゐ土養水涵ぎいつも常磐の色のへぞ榮ふる松よ身はあへでやつれ果たる我が袖は何時を春ともあらねども花實は時を違へぞと魁きうへるうめが香の袂ゐよゐふ白妙の咲の盛りのさくら花のどけき影を三ツの樹に愛ずちあをれ愛求せど迚も二度花さかぬ我儕が春を待さんより大徳の危急ゐ充まゐらさば元より心なき草木もみのりの種ともおらめやと殊に此頃積る雪に正しく雪山の薪ぞとおもへば更ゐ惜のらぞ燒火の料となしさるおりと切おる主の志しゐ兩僧ふのくも感じ入り斯ぞうり秘藏の鉢の木を己が爲に伐たまふこと生々世々よ忘るまじ偖も其許等夫婦のふるまひ由ある人と見しは僻目かこひねがはくは其名を聞かん主頭を打ふりていふ〳〵吾儕等氏もなく賤山賤と御覽ぜよ禪公うさねていうぞうり包み隱させたまふとも花は櫻木の色こそ見ゆれ何の苦しうさふらはめさゞ明白よ名乘たまへ大徳に深く包まんは後の世の罪重のらん恥かしおがら其古へは鎌倉どのゐ仕さる佐野源左衛門尉常世夫婦がおれの果ようていぞ兩僧心裡に扨こそと佛平太の物語りよおもひ合せど禪公は猶おぼし召すことありけん夫はふしぎなり佐野氏は仁惠深き人と聞しがいかでうかゐどにまで零落なりしぞ常世おたへてわが亡父の弟なる同苗源藤太藤榮おるもの頭人衆ゐ因みをむすびこれゐへつらひ常世こそ健忘症扨發したれば佐野の相續なしがさく領氏撫育の任ゐ堪えしのみおらぞ動もをれば道ゐ背けるふるまひありて人氏こも〳〵怨みを含み鄕里殆んど治りがたし願くはしばらく其領地をあづのり常世を閑處よ情を養はせんと跡方もおき歎訴なし無体ゐ某しと追出しつひよ本家を押領せらまーおり禪公のたまふは左まで無法扨何がゆゑ鎌倉殿へ訴へて明白の沙汰は請たまはぬ常世答へゞ夫はおほせまでもさふらはねど某が運の甲斐おさは仁慈賢才を無備しさまふ時頼朝臣逝去したまふ上はとても明白おもひもよらぞ如ぞ自ら健忘とおりて世の動靜をうかゝはんよはと天晴月日を徒らよ過し今此困苦も前世の業此世にて宿業を充し後世の榮えを願ふのみなり如是武士の身

ながらも女々しさものと思さんか今ふもあれ鎌倉ともしも御大事ありと聞うゞ是御覧ぜよと夫婦掻たち納戸の破襖引ほけて縅しの糸の爰彼處結び付さる具足を取出妻ゝ錆たる長刀持出で地裂て用ゝおさぎとも素肌ゝ益るこの鎧とつて抛のけ錆たれども長刀とつて打かつぎ一番ゝ馳參じ目差敵と指違へ討死おさゞいたづらゝ飢渇ゝ堪えで死なんより何程武士の本意なれと無念の涙襟を濕せゞ兩僧ゝ零落をあゝれみ義賭感ゞ衣の袖を濕したまひ元より其許の明白おる誠の月ゝ村雲の少頃へだてゝありとても聽て隈なく晴行ん必ぎ時節ゝ待たまへと入道諸共いさむる折から遠の八聲の鳥おさて峯の横雲晴あたれゞ禪公旅の支度おし常世夫婦ゝ厚く禮謝し名殘惜氣ゝ立出たまへゞ夫婦ゝさらゝ袖を濕しはじめ惜みし宿ながら今ゝ別れの悲しく門邊ゝ出て兩僧の影見ゆるまで見送ゞ禪公入道こと更ゝ數回跡を見返り〳〵東國さして登りたまふ

○浦尾が奴僕廣川ゝ亂暴の事

并浦尾が奸計廣川を陷る事

劒ゝ利といへども勵ざれゞ斷ぎ才ゝ美なりといへども學ぎんゞ尊らぎ凡四民其職ゝありといへども勤ずんゞ功をおさぎ宜うお前執權時頼入道道崇治國平天下のため雨露霜雪を犯し飢渇憂臥を厭ずて諸國巡行の志願粗その功を遂たまひ上野の國より武藏の國ゝ杖と向けたまふ爰ゝ野武の間境おる櫛谷といへる山里を通りさまふゝ路傍ゝ結ぶ草の庵柴の扉も今暫し住ばうりなる軒の窓ゝ香煙風ゝ和して薫ゞ念誦耳をうがつて聞えし、のゞ禪公ゝ何とおく心耳ゝ徹して殊勝に覺しけゞば立寄て破窓よりひそかゝさし覗き見入たまへゞ壇上に地藏尊を安し六旬ゝ闌たる老僧一人餘念おく寶号を誦し心を澄すありさま丹禪公信心肝ゝ銘じ入道とゝもゝ庵内に入りて老僧に向ひ三禮を被の僧も去づかゝ念誦をとゞめ座とおし直り禮を返し大德と見たてまつる歴々のいかで貧道を禮したまふ哉禪公こさへて我々志願おるゝよりあまねく諸國と脚行せしゝまだ大悟の聖に會せぎ今窓前を通りしゝ

圖らずも香薫誦聲を聞きたちまち心魂よ感通しおぼへず禪位をおどろかすよ至る希がはくゐ貴僧の俗性および道世の善因を聞かん彼僧何おもひけん目を閉て答へず禪公再三尋ねたまへど其と充やうやく目をひらき我が生来我が因佛いうん汝が菩提の種とおる哉といひ棄て座を後し本尊に向ひて再びものいはず禪公この一言を聞よりもたちまち慙愧の色見えしらば二階堂ゐ其無禮ゑいうり氣色して突立を禪公おどろき引とゞめ流泉岩よ鋼て遥し清風松を吹て聲あり我あやまてり〳〵と深く前非を悔てあづ〳〵として庵室と去たまふ必竟此僧何者ぞ其ゐ後回よ説ゑ侯べし去る程ゐ禪公ゐなゐ東西南北を順行し志願大方よ成就なせば今ゐ鎌倉よ歸りなん哉と入道と商議したまへば二階堂ゐ無てより公の心強ありといへどゑ三年を重ねし旅の空まさすが身心疲勞したまへば一向歸館と勸めたてまつるゐ禪公もやうやく決心したまひ武藏路を登りたまふ同國小山の里ゑ通りたまふに門塀立派よ建たる家のいかゞ成けん爰彼處壞ち門扉倒れんとをるまで荒廢せし動形いかさま他より亂暴のていたらく禪公杖立て之を熟覽したまふゐ内よゐ痛哭の聲さへ聞ゆるよ禪公いよ〳〵不審おし突と内ゐ入て見えたまへば男女愁苦の色を顯し額を聚めて商議なせしが兩僧ゑ見て一驚し旅僧等ゐ何人よて何地より来訊なるぞ禪公こたへて見らるゝごとき雲水の徒今此處を過りし冉門塀荒廢牆垣頽破正しく亂暴の形容我ゐ懸念のことあればこそ更よたづぬるおり願くゐ始末を明分ゐせよ圓居しうちより家刀自と見えて四十歳ばかりの女會釋して夫ゐ渡りゐ船の有ゞたさまづ此方へと請ずるゐいお昇るゐもおよぶまゞと庖厨口に腰うけたまへば家刀自も進み出て此原来を委曲にのべんゐいと永さことなれば詮をることのみあら〳〵ゆさん抑も我が夫ゐ當所の鄕士廣川貫二とゆもの彼方冉有るゐゐが郎女朝江と中一人者春秋已ゐ二九の春を迎ふ斯艶おき田舍女おまどさいゐひゐ婚を乞ふ人多のれども家ゑ嗣べき男子おけまば他ゐ嫁せんことを辭れるよさらば何某の息吳がしゞ弟と紹介の人もまた澤おまど貫二物堅き質冉て老賢仁慈の者おらでい

聟がねにおさゞと果さず爰丹又隣村の郷士浦尾丹吾といへる者おさりゐ娘を乞ふて止ず聟取といひことにまた丹吾ゞ其性正直ならゞ斜邪非道數々おれば固く辭して取敢ぬを渠かねて意恨とせしゐ一昨夜更闌て門打たゝき數人の聲して榮治をうへせ甦て戻せとの、しり騒ぐ夫をはじめ家の奴卑等一圓其意を得ぬなれば何者なれば斯騒々しとゞ其いふことも分ちがたくことさら夜中のおとなれば翌日こそ来れと答へさせしゐ何翌日ならでゝ戸と開ゞ左あらば打破つても返答さかんと棒千切木もて見たまふごとくたちまち門塀を破り亂入す家の奴僕もこらへ得ゞ同く得ものを引さげて強くこゝを防ぎしのば門内までゝ亂入すれど家裡までゝおよばゞして一齊ゝさつと引と得たりと奴隷等追んとをるを夫つゝく戒めて破たる門屏を閉さんとをるゝ一人の男園内ゝ竟きりよく〳〵見れば外人ならで浦尾が別家の手代おり其死相己ゐ日を經嗅氣さへ鼻を穿つ是ゐ浦尾ゞ仕業をしり即時に使を以て言しむるゝ今宵存外の狼籍といひ剩さへ死體を我ゞ門内ゐ棄置おと其意を得ゞ早くこの死骸を引取狼籍の趣意うけたまはらんと述たるゐ丹吾使ゐ出會て狼籍無道とゝ汝ゞ主人一昨夕榮治を使とし女を娶らんおとを求めしゝ承引せゞんば爲ぬまでよ何ゞゐゝ使を打擲せしゞ榮治歸つて此むねをのべ打れし痕の痛疾丹堪らね四苦八苦して息絶たりまた今晩の始末とゝさらゝ我が知る事なら彌ど察をるところ同輩の奴僕等渠が非業の死とあゝれみその罪と問へるおらん丹らへつて我を狼籍とゝ奇怪千万の中條此うへ徒ゝゝ止ゞがたく早く歸つて斯言へよと立蹴ゝ嘲と蹴倒せば使ゝ怖ゞて走歸て其いふ處をつぶさに語るさゞが寛仁の夫貫二も其仕業の無頼といのり明朝ゞ領主ゐうつたへんとをるゐ其夜ゐ丹吾讒訴せしゐゞ今朝とく歩卒の群来り一言の問答ゝもおよばゞ夫を高手ゝ縛めて其まゝ引て歸りたり夫ゝ元より無寃おれども如何ゐせん彼丹吾ゝ鎌倉評定衆丹内縁あれば領主ゞら常に彼を恐るさらばわが夫いうゝ陳ぜるとゝいので明白の裁斷ならん極めて無寃ゝ天壽を棄さまゝんと泪をおさへて始終をのたれば禪公不便丹思

しながら左お歎さおもひそ神佛のいうでか正さを助けざらん吾儕等緣由お
しといふともかゝる無寃を無下にせん哉我たゞちヨ領主の許ヨ行主の助命
を計ふべしかおらぞ愁ふることなうれとのたまへば家刀自娘ハ合掌唯々よ
ゝはらひたまひて夫を助けてたびたまへと泪と共ヨこひねがふ奴婢等
こゝを聞くよりもたゞ大德の慈悲と以て主人を救ひたまへゝと主にひゝ
伏こひねがふハ常々慈愛を施せし貫二のふるまひさへ察知らる斯て禪公入
道を將て領主市坂權之丞が許ヨいたり我々ハ一所不住の身直訓せん事ある
がゆゑわざ〳〵高位を驚かせりねがハくハ面會あらんことを權之丞いぶゝ
しおがらたち出てたがひヨ初會での應接了りヨ禪公ハ懇懃に貧道ハやさぞ
とも雲水の身ヨヨ今日計らぞも廣川氏の門前ヨ立て鉢を乞ふ處女兒抔集り
て愁涙ヨ沈む其故をとへば云々と聞ヨ不便さ見るに忍びざるゆゑに領主ヨ
見えて貫二が罪名を問ひたてまつるのぞむらくハ彼をたまハることを得ん
哉權之丞心裡ヨおもふハ信哉廣川の類族ガ僧徒を頼んで助命を計ば天晴活

命の報謝ならめとひそかに喜悅し面を和らげ其ハ貴僧の大慈尊くおぼゆさ
れども丹吾うつたへ正しくして貫二の答へ胡亂ならるがゆゑヨ已ヨ貫二
ハ解死人の罪名遁れがたし云ー貴僧敢ヨまた助命得させん意あらば我また
意ヨてこゝを計らん禪公ハ其厚意を謝し凡人命の尊さおとハ貴賤高下の差
別なく謝禮千金をもつて換べきの權之丞ハ笑み伏含を左らば貫二をあたへ
んと突と身を起をを禪公とゞめ見たまふごとき貧僧ども殊さら諸國順參の
身我たゞちヨ鎌倉ヨ赴ケこれを調へ今日より五日を際限とおし人をして贈
るべし其期まで貫二を質とし預けんかおらぞ鹿略ヨしたまふべからぞ權之
丞心中相違をれども纔か五日の間おれば澁々にこゝをうべなふ禪公猶後來
を約しヨ立出たまふ禪公いのなる深さ慮のある斯て禪公道をいそぎ翌日相
摸の國分寺ヨ着したまひ笠深々と引うつぎ本堂の椽ヨ休らひたまふ

○時頼禪公鎌倉歸館の事

却て說鎌倉ハハ執權相摸守時宗朝臣青砥左衛門尉と志ざしを合せ政事を明

白にし法例を正し上ゐ尊敬を厚ふし下ゐ慈惠を施したまへば上下常鎮ゐ天日弑あふぎ壞を擊の樂きをなをところゑ昨夜何うたともなく青砥が筆ゐ一封の飛札を呈するものあり家臣等いぶかしく思ふといへども暴黒ゑ直覽とさへ書たれば其儘主人藤綱ゑさてまつる藤綱豫かゞめ之を知りたりけん謹んで押戴き開封してたゞちゑ夜を犯し北條亭ゑいたり時宗朝臣に拜謁し御父時頼御志願成就し明日歸館の赴きを言上を時宗朝臣ハ無てひそかゐ藤綱より聞たまふ處なきゞ歡びのあまり出迎へんとのたまふを青砥これを押とゞめ君御出馬あらんにハのへつて人民驚動をべし願くハ臣ゑ任せたまへさらば汝過不及なく其節きを計るべしとさゞち丹近臣丹其設備を命じたまふ近士の輩ら青砥が言上今また執權が命を聞面々いうでおどろうざらん夢ゑ夢見る心地してゑいうゑ袴の裾をうゝげ素袍の袖を括りあハせ彼方へ馳り爰方へ廻り男女奔走いふばかりなく時の間に莊嚴設備善美を盡せり青砥藤綱私宅ゐ歸り翌朝わづゝ召具し十餘人素質もつむらゑ立出でんとを藤綱が長臣等これをいさめさをがゐ前執權の御歸館なきゞ路途非常の警衛かたゞ召具數多嚴重ゑ出立せ公の御乘輿をも備へたまハんや藤綱微笑しもつともの申條去りながら我がおもふところあれば其設備ゑハおよぶまじと其身も歩立ゐて立出らる去るほどゑ時頼朝臣先年逝去ありしとハいつゝりに日本を順巡し國々領主および士民其善惡を窺ひたまひ今日既に歸國したまふ赴きたちまち鎌倉中ゑ聞えしゝば諸侯御家人の面々いかでおれゐ驚ろざらん半信半疑ゐすどころゑ早く藤綱御迎ひゑ國分寺まで至りしと聞き云ひ合すとなく我も〳〵と人馬立派に裝ひて御迎ひゑ馳る者引もきらも農商工ハ天ゐ悅び地ゐ喜びいうなれば我々ハかゝる時節ゑ生き合てふたゝび昔の春ゑ逢ことよとたがひゐ芽出度〳〵と元日の慶賀を述ぶるごとく老若男女勇みゐいさみ將哉三年經ゑて仁君の尊顔を拜まんと老を助け幼なたを懷き歸館の路頭ゑ疊々たり斯て左衛門藤綱ハ道をいそぎて國分寺ゐいたり見れば禪公ハ行脚のまゝ本堂の縁ゑ腰とうち掛二階堂とゝもゑ物語りし

たまふゐ藤綱從者を門外にとゞめ獨り階下にいたりて低頭をれば禪公ハ世ゐも嬉しき氣色ゑて將軍御所御安泰なるや汝ゑ勤勞滿足とのたまへど藤綱ハ禪公の容貌羸瘦ーたまふを仰ぎ見て只さめ〳〵と落涙し諸々とのみゐ詞を發し無ねぬ二階堂階下ゑ馳下り藤綱の手ゑとりて俱ゐ落涙おしたりけるかゝれば諸侯昵近の面々おひ〳〵當寺ゑ馳參ゞ門前ゑ馬乘捨て堂前狹ーと伺候おし門外にハ數百の從士馬の嘶き夥しきに當寺と守衛孤獨の住職元より少く耳聾きが斯ること、も露ちらざれど此物音と幽ゐ聞き何事おらんとうゞふゑ多くの武士堂前ゑ群集し椽上の旅僧と守護する容躰罪犯人の露顯して取圍まるとやおもひけん矢庭ゐ戒杖ゑ引提て本堂内より躍り出禪公ゑ撲地と白眼這哉是の雲水等胡亂織げおる醜容をして堂上を穢し寺院を騒がを賣僧奸盜早く寺内を立去べしいうゑ囚獄官の人々よ願はくハ寺地を除て門外ゑて納めてたべと戒杖取伸べ禪公をあハや椽より打下さんとを二階堂椽上ゑ馳上り住僧を取て引伏せ聲あらゝげ執權北條時頼公と見忘れたるやといふ聲の頭上ゑ雷の落るかと覺えさちまち魂ひわが身と離れびつくり驚天轉々と椽より階を轉び落ち仰向ゑ噇と倒れおがら目を開き見ゑば藤綱が膝下また悶りし起んとをれど五躰痲れて動き得を助けたまへと倒きながら嘆く禪公微笑しさまひ住侶免をと宣まふ聲心魂ゐや徹しけんやうゝ魂ひ我ゑ返りおぢ〳〵と起上り砂上に低頭震ひゐる藤綱さらゑ言上するハ長途の疲勞ましまをといへども態と車駕をたてまつらを然しながら尊慮のほど好何あらん禪公莞爾として賢さはうらひよく我が意にうなふ北條殿まで〻抖擻行脚いざ二階堂來たまへと共まゝ椽ゑ突立さまへば二階堂ハかしこまり御側に下せし負を負ひ御後邊ゑ隨身を藤綱免許を蒙りて先供に立て警備ハ禪公ハ垢濕たる苔の衣ゑ竹の杖脚半草鞋取も換を心うろ〳〵と歩みたまへば御迎へとて馳あつまりし數百の諸侯昵近衆公の形容ゐ驚きて乘輿駿馬を速ざけつゝ皆徒立おてうしろゐ順列る衣紋立派の人々ハ中々人目の妨嫌て脱も更たき風情おり侯設けたる貴賤老少歸路の左右ゐ充滿せしが誰

嘗めねど一同み膝を折伏頭を下げ密よ公の尊容を拜まるゝ山嵐海濕み顔色黑み苦難勤行ゝ容姿屢れさまふを見て嗟呼常ゝ錦繡を褥綾羅を枕とし玉樓錦殿に起臥したまふべき身を人民快樂おさしめんと三年の間憂艱難とい知らぎして我々い夜々ゝ枕伏高ふ足を伸せ〳〵い冥加の程も恐怖と心おき匹夫匹婦ゝ泪を流し合掌せ伏拜まざるいなりけり

○國々の四民正邪賞罰の事

并市坂權之丞の事

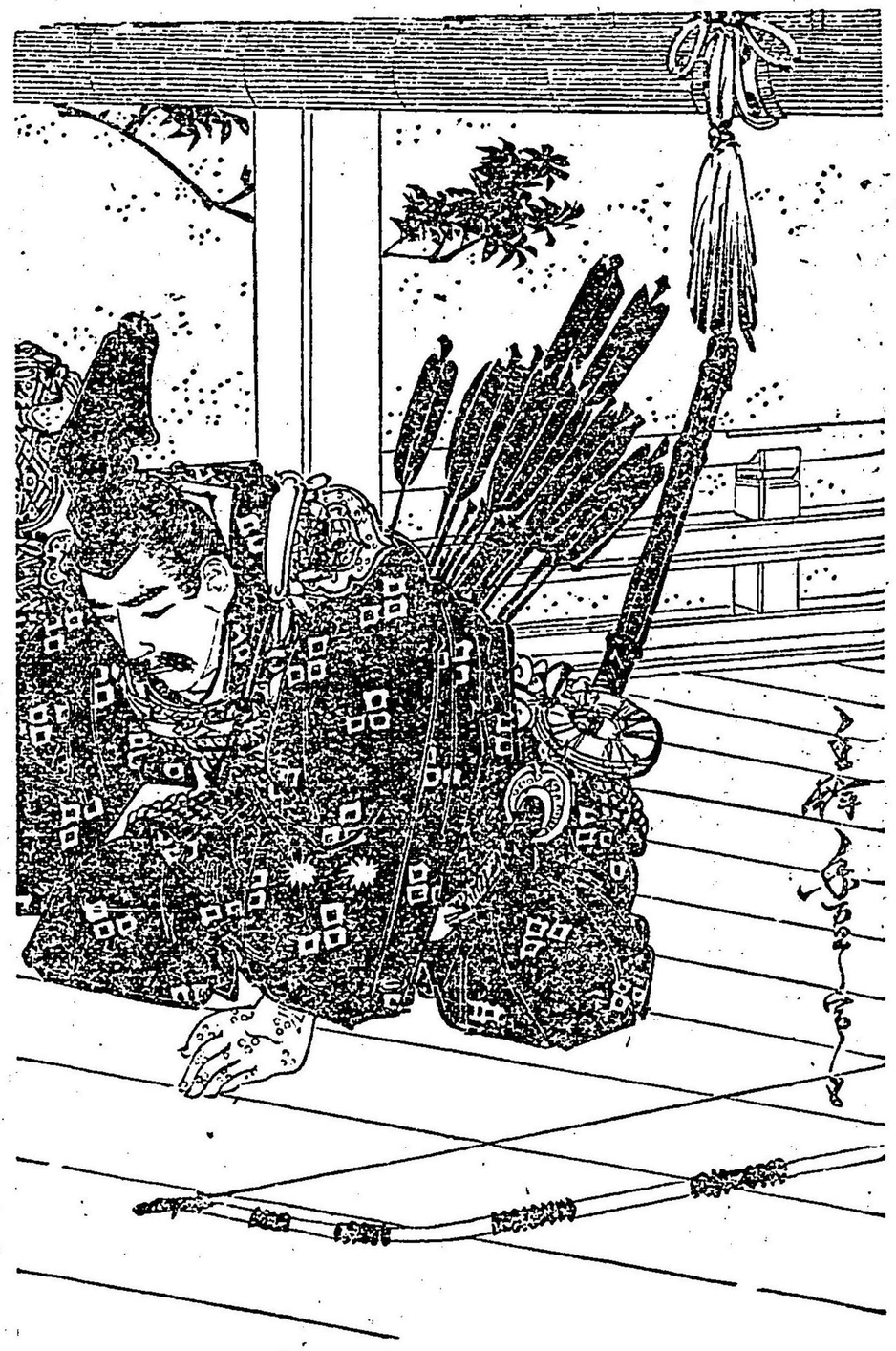
抑も最明寺時頼入道正嘉二年の春鎌倉を忍び出正元元年文應元年の秋まで三ケ年諸國を經廻し四民の行狀を探りさまふみ探題目代領主をはじめ無道奸惡の徒ゝ三百四十餘人を記帳し時宗朝臣青砥二階道其外頭人評定衆列座ふて科の輕重と判斷したゞちゝ諸國ふ召狀をもつてこゞ〳〵鎌倉ゝ呼び登せて善惡邪正明白ゝ詰問しあるひい追放まさい遠島そのはなはざしきい死を賜ひ刑伏加へまた賢躰顧直あるひい忠貞の輩ゝい褒賞加恩まさい再任相續ねどいづれも慈惠を施したまひまさ頭人評定の輩らおよび昵近の衆中依怙の沙汰贔負のはゝらひせし者いそれ〳〵ゝ蟄居逼塞なさしめたまひ勸善懲惡ことゝ嚴重ゝ賞罰ありしゝばかねゝ其奸曲伏怨むといへど北條の近士また職任をおそれ齒を齧下めし面々も積年の怨恨一朝ゝ散じまさい私曲の頭人評定ゝ媚へつらひし輩らい往事を慄き後來を慎みこれより諸士正風に歸しゝりそめの出入りをもこと分明ふ弁じ理非潔白み裁判おせば四民たゞひゝ和合おし己を慎ミ人を敬し有がた充代とおりさりける爰ふ武藏のかたいらおる市坂權之丞い廣川貫二が活命の禮謝千金をゝてせんと約せしより日々指を屈めて晝夜をかぞふるふ第五日ゝあさりしかば今日こそい千金を得めと俟ねどゝ人あつて告けるい最明寺殿二階堂伏召つれ修行者と容形をやつし國々の領主の邪正を探り當國より目出度歸館したまひぬと聞より權之丞大いゝおどろき猶その風姿躰形と聞くふ過日の修行者ゝ紛れおけれぞふるひ慄戦起つ居つ貫二を早々家ゝ歸し妻子珍寶をも打すて

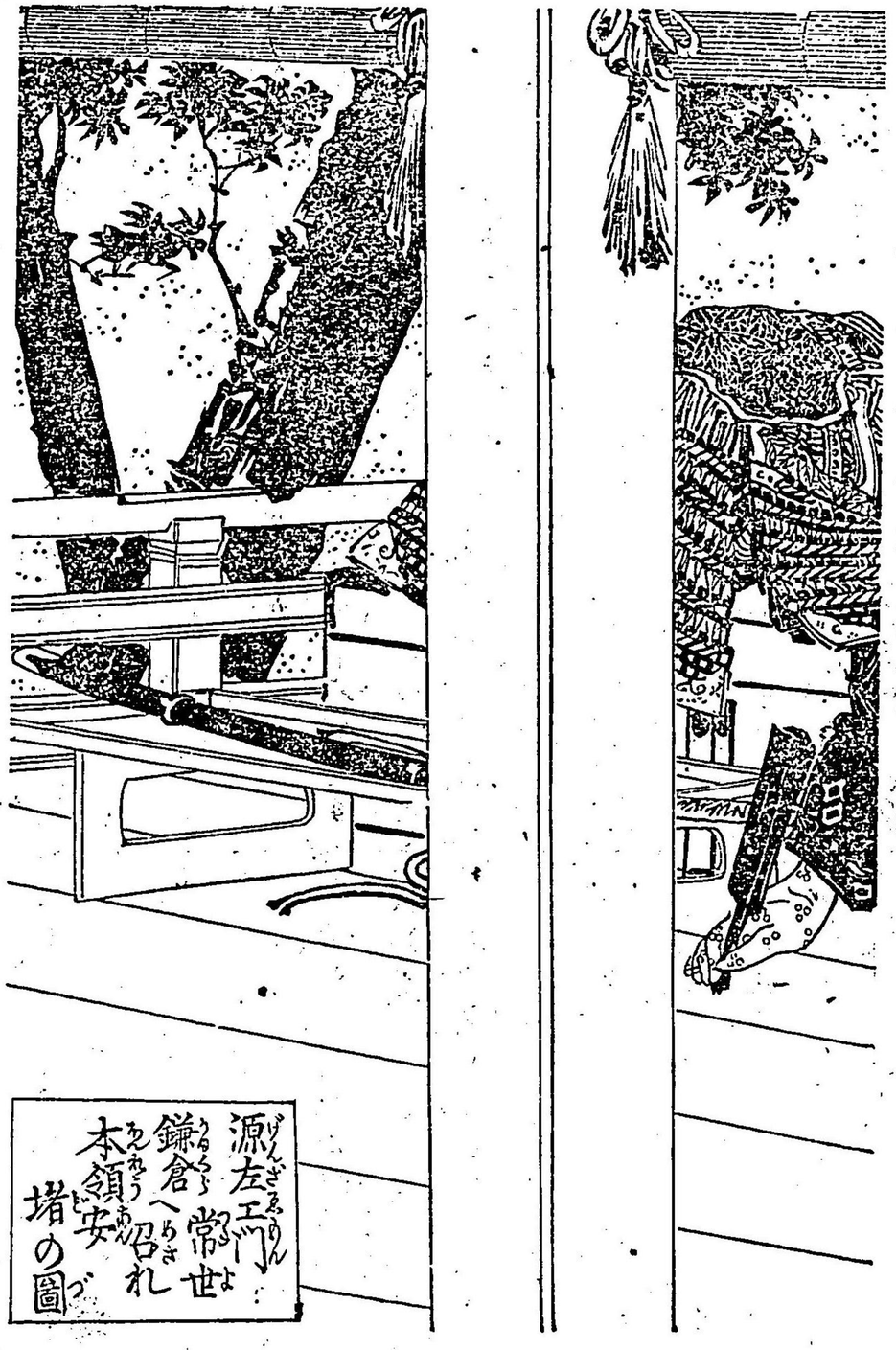
ハ何國ともなく出奔を斯る處へ鎌倉より貲二丹吾等を將て權之丞まゐるべき召使の來りけるゝ權之丞ハ出奔し丹吾も續いて逐電せしかば召使庄官と計り權之丞が悴彦太郎おなじく女房廣川貲二丹吾が女房手代榮治が女房等を引て鎌倉ゑ歸り兩人出奔のよしを言上を禪公出座あつて榮治が女房ゑ其死を糺したまふ始めハ兎角ゑ陳ずといへども禪公の威勢ゑ恐れ夫榮治永く齊癖症ゑて病死せしを主人斯々せよと云つけゑ是非おく僞りたてまつると白狀ゑ言上すれば左あらんゑハ始めより知るこれ死をもつて生をむさぼる奸計ことさら人家を頽破の罪輕からず丹吾ハ遠島家財没收せしめられ權之丞が幼稚の悴女房にのたまふハ權之丞儀一郡の領頭とし人民撫育の心おく罪なき貲二を罪ゑりとしうへつて丹吾を罪おゝとしことゑ大切の人命を私ゝゑ金錢ゑ代ること無道とやいはん人外とやせん極刑たるべきところ其身のあやまちを知て亡命せゝハいさゝうその罪をつぐなふゑ似たりよつて死罪一等をゆるして逐電のまゝ遠島申付け家財没收せゝむ去りおがら我貲二が活命の謝り千金を贈らんと約せゝなればをおハち市坂が田圃家財あらためて嫡男にあたへ家名相續申付べゝもつとも千金ゑ不足あらんまゝ丹吾が田圃家財二ツゑ別ち其半を加ふべしまた廣川貲二ゑと無て行狀老實ゑしてもつぱら仁慈をほどこしがうへ今度丹吾が奸計に罹り縲紲の中ゑありおがら其理りをゑらそハきして死生を天ゑ任するその温順のふるまひ感ずるところ其褒稱のため且ハまた門塀修造の費として丹吾が田圃家財とう半を汝ゑあたふべゝと理非明白の御下知ゑ市坂廣川兩家の者有がた涙を落りける

○佐野源左衛門本領安堵の事、

并佛平六肥田を賜はる事

爰ゑまた上野國佐源左衛門尉常世同く源藤太藤榮太和國なる佛平六等を召出されまづ源藤太が罪を貰へ遠き追遣ゑ處せられをおハち常世を原のごとく本領安堵せゝめ又何よりも切なりしハ大雪ゑ閉られ人事をわりたざる





源左エ門常世鎌倉へ召れ本領安堵の圖

と救ひて我が家ゐ負ひらべり燒火の料ゐ秘藏おせ｜三の鉢の木ゑ切て充し其志ざ｜の切なること何の世まらい忘るべきと三階堂入道と諸ともに青砥以下評定衆ま其始めい｜かゝなり其終りい斯樣〳〵と其時の容靜隈おくかさり此恩賞さして本地の外に加賀ゐ梅田庄越中ゐ櫻井上野の國に松枝庄合せて三ケ庄を下したまふまた佛平六と召ま汝常世ゞ舊恩我が功稚の微惠を忘れゞ兩人が肖像を持佛ゐらけもつとも古主ゑおもふ切なる志し是まさ感ぜるゐ餘りありと公自らら彼ゞ老實舊恩を報ぜる始末を常世まのさり無て用意置し從が黃金今衆の歸宅の費ま充て永々佐野の家臣とすべ｜えつとも忠心厚き褒稱として平六に肥田數十町をたまふ常世平六公の恩惠を感佩し直ちま舊領ま引移り平六の字ゑ其まゝ性号とし佛平六郎と名乘主從慈惠を下ゐ厚ふせ｜らゞ領民自ら繁昌せり扨美濃の國の三昧にて甦へりし女を救ひたまひし時墓守が定法なりと罵りしを憎みすゐはち藤淵と商議お｜て れゐ類せ｜流弊百ケ條を書出し其第七ケ條目に凡墓所ま於て蘇生の者たとひ古采の法たりとも私しま殺害ゐること非道の至極といふべ｜重ねまかゝる無道あらゞ其身ゐ死罪從類までも曲事たるべ｜と堅く制詞をたてゝ諸國ゐ是を觸たまふ美濃國の領主この條目をうけたまわりて扨ゐ領民の女を救いれしゐ禪公おしま墓守がふるまひを憎みこらしたまふ處おらめと是彼を考へあはせ舌ゑ卷てゞ怖ける

○禪公老僧の物語を聞給ふ事

并原田常直歸城の事

禪公追々諸國の士民賞罰畢てのち下野の國おる老僧ま使節を厚ふして北條亭へ招請し應接了て禪公の曰く去ぬる頃我貴庵まいたり大德の生國および佛因をたづねし｜言の返答我慙愧ま堪たり然ま汝貴僧ゞ容貌をつら〳〵案ぜるまさらゐ平民の産おらぜかるがゆゑに敢て猶こまを問んとす願はくゐつゞらま聞せたまへかの僧流石ゐおどろきて我眼昏ふ｜て禪公を察知ぜおもゐざるの不敬陳謝をるま辭なくさいゐひに高免を垂さまふべ｜貧

道が父は鎌倉殿の譜代の臣筑前の國の城主原田次郎常直が遺腹の悴なりと言上を時頼おどろ紀其常直といへるは我さらに知らぎ汝その由来を知るや欲僧さらふ流るゝ泪拭おさへ貧道未生のことなきど亡母の物語り聞るまゝあら〳〵言上仕つるべし其ころは建久年間故右大將頼朝卿御治世三代將軍實朝公いまだ千幡君と稱せし頃夜々寢殿の屋根とおぼしく怪異の聲あるよばれ鳴弦つかまつるべき由命じたまふ常直面目身に あまりをおはち暮目の神法を以てたちまち妖怪を退けしかば若君御悩平愈ましまを頼朝卿御感のあまり御召替おる白糸縅の鎧に行光の太刀一ふりをたまはり目出度歸城なさしめたまふされば常直が射術の名いよ〳〵世上に高くして西國の諸侯武家の輩ら悉皆父に隨順せり去かるふ隣國筑後の城主山名筑後守好秀とゆゑるは代々射術の家にして鎮西にては我より外に弓取えのあらじと誇りしふ今般の鳴弦常直ふ命下りあまつさへ首尾十二分ふして錦拭かざりて歸國せしと好秀遺恨ふやおもひけん建仁二年四月廿五日好秀自國の軍勢二百餘騎にて不意に常直が居城を圍み一言の問答も無く短兵急に攻たつる常直も家士を下知しこゝを詮度と防戦れども渠は晝夜ふ調練の軍兵味方は不意の防禦なればつひふ一方を攻破られ今は斯よと見えければ常直わが母に申やう我が運命もこれまでなり其許さいはひふ懐胎たれば何卒當城を落延て産る子は男女ともひそのに養育長人ば我が遺念を晴させくれよと倶に冥途の魁せんと死と極めたる母をいさめ腹心の郎等に託しやう〳〵城を落延させ今は心易しいざさらば最期を潔くおさんとて既に自害せんと做に流矢来つて常直が右の臂にぐさと立を這哉何奴と左手に其箭をぬきもて太刀取直せど痛手に腕力甲斐おき折柄早敵軍のみざれ入り山名が郎等小野九郎行安ふあへおく生捕れさまひたり殘る味方の軍兵は大將討れたまふとおもひ我劣らじと敵兵と撰ばず花々しき合戦しこと〳〵く討死おしたるふ山名はなるも軍兵に下知し城を焼立灰燼としさて常直を牢輿にて當鎌倉に引来

り好秀評定所ゐ言上せるゐ隣國ゐる原田常直君命ゐよつて鳴弦つかまつり天晴の勸賞をうふらんと計りしに其恩賜の薄きを怒り反逆の色弑顯ゐせしらば強大ならぬ其うちと自國の勢もて誅伐せし旨披露をるゐ頭人評定衆もいらゞありけん虛實邪正の決斷もなく其まゝ常直を獄舍ゑ籠らる偖わが母ゐ郎等の助ゐはるゝ山城の北白河ゐいさりこゝゐ隱れて月日を送り秋八月ゑ甚しを誕み幼名を亀壽と号けとやうくやとして養育られ漸々甚し十歳の秋不圖母心地なやましく日々ゑ累歳の疲勞發れやがて黄客ゑ員へんとをる其枕邊ゐ貧道をまねき先より述たる父の素性身の成行を初めてうたり父の遺命とまもらんこと元より子たる者の道なれど杖と頼める郎等も夙ゑ死し我も命期の近ければ明日ゐ孤獨の身とならん殊さら父が仇なる好秀外ゑ配せる罪ありと遠き島守とおるると聞ば如も汝ゐ出家おゝ大悟大徳とおりたまゐゞ九族天ゑ生をる佛敎これに益たる孝養おゝとくれゝ命ゞて果身さりき已幼心におもふやう父のいつくしみゐ高けれど生來母の養育ゐて

やゝ〳〵東西を覺えたる身母の遺命守ること矢張父への孝おらめと自問自答ゐ心を決し泉涌寺の長老ゐ隨從し一向螢雪の功を積ゑ十五歳の春得度して我ゑ可もおく不可もおき不二房と自稱おし十八歳の春ゑいあり斗藪行脚の身とおをを靈場佛地順拜しまづ九州筑前ゐいたり父が居城ゑ登り見ゑば絃管變ゞて山鳥の弄と成る綺羅留まりて野花とおつて開く有爲天變の世の容形と觀じ夫より東國と經廻し今住む庵の荒はてゝ本尊の香花さゝぐるものおく蛛絲内陣ゑ羅網を張り鼠糞尊前ゑ盛りて供のごときゑ錫ととゞめ朝暮延命尊祇念ゞ父常直世を辭しなば上品上生の佛果を得せしめ若いまだ此世ゐましまさば一度逢見んことを願ふより外おくゐと言上し衣の袖もて泪を拭へば公もそゞろゑ流涕なし去ばこそ初めより凡人おらぬ思ひ一天晴武士の胤おりけりさらば常直の生死と亂さんと青砥藤綱祇召され常直が始末を語りたまひ谷々の獄舍祇探らしめんとを藤綱うけたまわりつゝしんで存ゞ寄ざる大徳の俗姓うけたまわつて驚き入りもつとも獄を索るゑおよい

ず原田次郎常直いまざ存命つかまつる將面會を敢させんと郎等ふ志うく命ぜれば程なく八旬ふ更たる老法師藜杖ふすがり庭上ふ來ればいかふ不二房大德此老翁こそ常直なれ生前の父ゝ對面あれと藤綱が言葉ゝ不二房ハ緣より合破と飛て下り我こそ法師が子ふ不二房と申者なれと常直が衣ふ縋り潸然と流涕をるゝ常直も遺腹の我が子と聞より愛着の絆ゝ曳れ不二房が脊と搔撫て舊懷の涙袂ゝあまりけり禪公ハ藤綱ゝむかひ汝いろにして常直の始末をゑる哉さんハ甚し嘗ゝ評定所の舊錄を点檢をるに常直の一條始めあつて終りを記さゞかるがゆゑふ密ふ人どもつて谷々の囚獄闇を探らしむるゝ朝比奈ゲ谷ゝ永籠りの老賊一人あると申をかハち自宅ゝ呼び出し其實否をたづねしゝ始めハ愧らひ告ざるどゑねんごろふ尋ね默止がたく哉次郎常直なるを名乘其禁獄の始末拭聞どゑ今あきらかふ正邪を糺さば公いまだ御未生前ふてさらふ知ろし召を事おらねど恐れおがら故右大將家および義時朝臣の御政道明白おらぬを今さらふ世ふ觸知らすの理ゝ當れば既ゝ奸敵山名好秀天の冥罰其身ゝ下り頼家卿の御密意ふ組せしおとの露顯て隱岐の島守と朽果ーうへハさらゝ常直遺念も有まゞかたく以て此まゝに天壽を安々つくさせんと獄舍と稱ー一庵を結びこまゝ朝暮を隨意せしめしゝ豈計らん哉遺腹の子あらんとハ此上ハ免角とも公けの判談ゝ仕ぜたてまつると理非分明ふのべられば禪公不二房常直も藤綱が政事および君忠慈惠を兼ー全計を感じをなハち禪公あらさめて我今般諸國と巡行しろく革命の折うらなさば不二房が純孝および大德ふ免じて常直ゝ先非を許し常直ふ本領安堵なさしむべしと言を正ーく命ゞたまふ常直法師ハ再拜ー君命辭をるハ恐れおまゝども臣ハ八旬ふあまる老耄一子ハ既ふ佛門に歸入ーて外ゝ嗣べき男子おしこひねがはくハこのまゝふ餘命を安く眞へんことを禪公ハうち默頭もつともの申條なまゝ去りおがら我にまさ思ふむねありいのに藤綱汝が次男を我に得させよ我が養子としてまた常直ゝ與へ原田の家名相續せしめなば如何ふ常直藤綱諸ともゝ深充慈惠を感佩し兩人等ーく御請と申上すなハち藤

綱が次男十五歳なるを禪公自ら首服と加へ原田次郎時直と名乗らせ常直法師に賜はれば急ぎ城郭と造營し故郷へ餞る錦の袖に若木の花の香をそへて筑紫の國に春をむかふ不二房は積年の懇願爰になりて生前の父に逢事まつたく如來の本願と深く佛恩を拜謝し一つゝ本より行學勲修の聖才をみやかに三界の火宅をのがれ永く九品の淨土に生ぜんこと試願ひすおはち下總の舊庵に歸り朝暮おこなひ澄しつゝ弘長三年に大往生試遂しとなん

○時頼禪公更に法制を建らるゝ事

時頼禪公國々において見聞の士民夫々賞罰嚴重におしたまふより召ふ預からざる管領探題領主代官にいたるまで今日哉召るゝか明日哉罰せられんかと已が所行を自らかんがへ猶後采をつゝしみて他よりも自國の稅斂を薄く人より領民の困苦救ふがゆゑ國ふ怨むる士民なく家ふ空しき夫なく太平の瑞氣こゝふ顯はれ日月星辰も光燿を倍がごとくにして曇らぬ御代となりしかば禪公は猶二階堂青砥其外頭人評定諸職役の面々をあつめ我いやしくも青砥が一言に發起し三年が間國々順行し毋不仁不義の輩多くやうこれが邪正の賞罰をあのれどもおゐ外は正しくとゑ内に邪あるときはまた亂るゝ基ゐとして禍ひ蕭牆の本ふおこらん既に頭人評定以下の面々内緣または賄賂により依怙の執成せし輩みな悉く逼塞せしむ今出勤の面々毋おいてはさらに不義の臣おらねど如何ふせん五慾のおほはれ所る試希くは賢聖の教戒試守り事々其理分明なるらんことをさてまた義時朝臣の定めおかきたる奉行頭人評定の輩たゞ往昔より聯連せり一家一門毋限るべからぢ當時智慮あつて然も勤學し老實にして尚慈しみあるを撰ミ出其職役ふ補をべしと定めたまふしうるに近年はこれに戻りその補その任を家の職として子孫愚鈍毋して理非を辨ぜぢあるひは奸佞毋して依怙所りとも同僚また制し退ぞくることを得ずかるがゆゑに事の爰毋およぶ自今以後舊制に復古さとひ連綿たる家格おりとも不學不才の者は憚るべくまた下劣微々なる者とても任にたゆべきは登庸せしめ日夜國政に怠慢有べらぢをとねんごろ

ふ教戒し無て定めおのる新法制二十三ケ條（長文なれば こゝは略す）を藤綱をして讀しめたまひ連書の起請文を召されしうば奉行以下の人々も謹んで肺腑より銘しこれよりかりそめの私曲もなく制度もつむらふ行る爰より弘長元年十一月三日從四位上前陸奥守重時朝臣行年六十四歳にして卒去ある法名極樂寺殿とぞ申ける此重時は義時朝臣の三男にしてもつむら仁義を守り政道正しくこの神儒佛の三教を學びて賢君と稱せらる身も無常の風導卑を撰ばず一朝の嵐賢愚ふ管せず空しく一基の主とならせさまふよと四民諸も惜みたてまつる將軍宗尊親王にもことに哀悼まし〳〵て追悼の和歌をさへたまはりける 抑宗尊親王は敷島の道ふ秀でたまひ朝には八重垣のもとに心をよせられ夕には淺ちぬ山の井の水ふおもひ拭うつし春は霞の衣ふ芳野初瀬の花の梢をしのび秋は霧の籬に須磨あかしの月をかこち柿本山邊の舊さいにしへと學び定家家隆の新たなる今の軌にしたがひ常に諷詠吟謠の窓と離るさまはず去ぬる建長五年より正嘉元平ふいたるまで詠吟有りし和歌を集め初心愚草と名号たまひまた今年出詠の内より三百六十首をえらみ出前民部卿爲家に賜ひしに彼卿もふかく感慨せられしとぞ

○最明寺禪公北の新亭に籠り給ふ事

并逝去の事

月去年来つて既ふ弘長三年天下まを〳〵靜謐にして諫鼓苔生し蟾蜍も斧を藏をこゝにおいて時頼禪公もやうやく心を樂しましをさまふに累年人民のために神心を痛めさまひし疲勞にや同年初冬の頃よりかりそめに病狀につきたまひしが日夜に重らせさまふよを醫官湯液補瀉の術を盡し陰陽は日月七星の祭祀を抽んで其外諸諸山の神主高僧延命の奉幣護摩祈禱さま〳〵手をつくし行なるれどもさらに快方に赴のせたまはを時頼禪公は其天數かねて察し知りたまふにや一朝子弟一類および重臣等を集めたまひ夫々遺命没命を示し夫より後は新に建おかるたる最明寺殿の北亭に籠り心靜うに臨終出離をすべしと御側ふは尾藤太入道淨心宿屋左衛門入道最信兩人は召し

おかれ其外の出入を堅くとゞめ既ゐ十一月廿二日浄心ゐ仰せて香染の衣袈裟を着し最信兩人ゐ助けられて繩床ゐ上り稍暫時座禪したまひ次ゐ辭世の頌を誦し給ふ其辭ゐ曰く

業鏡高懸三十七年　一槌打碎大道坦然

弘長三年十一月廿二日　道崇珍重

と自ら書了りて筆紙と捨兩眼と閉定印状結び口ゐ辭頌をとゐへ即身成佛の瑞相を顯して行年五十七歳ゐして往生の素懐を遂さまふ嗟嘆惜むべし悲むべし寛元四年より康元元年まで前後十一年執權ゐ居て天下の政務ゐ心を委ねたまひ落飾のゝちまさ七年總て十八ケ年の政道正しく就中正嘉二年より弘長元年まで諸國巡行ゐ難苦難行したまひ後やう〳〵一年餘り天日を仰ぐおもひをおしさまふ事古今例し稀おる賢君おりけり已ゐ臨終のゝちもいさゝか印相と變ぜず跌座少しも亂れぜかくゑ遺命におたがひ北條氏一族および諸家臣いふゐ及ぜず鎌倉中の道俗男女ゐ拝禮を許さましかば老少男女貴賤を論ぜず我も〳〵と群と爲し此尊容を拝したてまつり慈母の子をうしおふがごとく哀哭の涙諸ともゐ袖おぼしざるいおかりけり將軍宗尊親王もはおいだ痛哭おしたまひ哀情の和歌百首状詠じ時頼が靈牌ゐ手向させたまふ京都へも早馬をもつて時頼卒去を奏しさてまつれば今上　龜山天皇も殊ゐ　厳心といさましめたまひ右少辨經任を　勅使として鎌倉ゐ弔せしめさまふ天下の貴賤愁傷せざるいおくおのづゝら八音歌密し鳥の音をさへ止めたりけり

○相摸守時宗執權相續の事

故時頼朝臣嫡子式部大丞時輔い北條重時の次男陸奥守時茂とゝもゐ京都兩六波羅ゐ居て畿内西國の政道を行いるかるがゆゑゐ次男左馬頭時宗うねて故時頼朝臣の明鑑ゐよつて家督をつがせたまふ此とき未だ十三歳ゐてすおいち相摸守ゐ轉任し北條第六代の執權と仰がれたまふ理りおるかゐ時宗朝臣天性篤實ゐして仁德ふかく禮節自然其よろしきに合ひければ此父ゐして

此子ましますと諸侯昵近ゐ元より怪しの匹夫匹婦まで歎びたのしむ時津風
枝を鳴さぬ天が下幾久しかれと仰がぬゐおかなりけるとぞ
因みゐいふ時宗朝臣ゐ本文ゑのぶるがごとく文武兼備の名將にして四民
これゐ隨順ーかるがゆゑゑ將軍隱謀を企て北條の一門教時々宗をそむき
將軍に荷擔おー既ゑ干戈を動ゥ𪜈といへども將軍および教時ゑまゐる者
おくことくく時宗が味方を敗をかるがゆゑゐ將軍ゑも御落飾ましく
京都へ歸らせたまひ教時も一向和を乞ふて時宗ゑ降る弘安七年時宗逝去
ーて貞時七代の執權とかる貞時また才智聰明ゐして天下歸順をおほ平天
下のさめ正安三年執權職を師時ゑゆづり剃髮染衣とあり故最明寺殿ゐる
らふて天下を潛行ーて諸士の剛柔邪正を糺ーさまふ八代師時まさ勉めて
政事を正しうせーゑ北條宗方一族ある北條時村を害すかるがゆゑゑ師時
止むことを得ゐ宗方を誅せーに宗方怨念惡鬼とおつてさまく師時をお
やまーてつひゐ師時怪死をよつて高時其職を續て九代の執權とある高時

その性おろのゑーて仁慈の心なく日月ゑ奢侈風流ゑ長ゞあまつさへ犬を
愛して天下の猛犬をあつめこれを鬪ゐしめて樂しみとし國政とゐしいま
ゝゑるがゆゑゑ天下の諸侯こもく叛を　後醍醐天皇これを逆鱗あつ
て誅伐のため日月の御旗を擧たまふゑ鎌倉を離れて官軍ゑ屬をる輩日月
ゐ益しゐば〳〵爭戰におよびつひゑ正慶二年夏五月新田義貞がためゑ高
時鎌倉ゑ亡さる文治二年北條時政はゞめて天下の執權と成てより正慶二
年まで百四十九年ゑして九代連綿せー北條の家系こゝゑ滅亡す其事蹟諸
書にありといへども編者閑を得ゐ又編次の期もあらんゥ

明治十九年三月十三日御届
同　年五月　出板

編輯者　未詳

出板人　東京府平民　西村富次郎　京橋區幸町七番地　高塚兼太郎方同居

發元兌　自由閣　日本橋區本材木町壹丁目

印刷所　東京金玉出版社

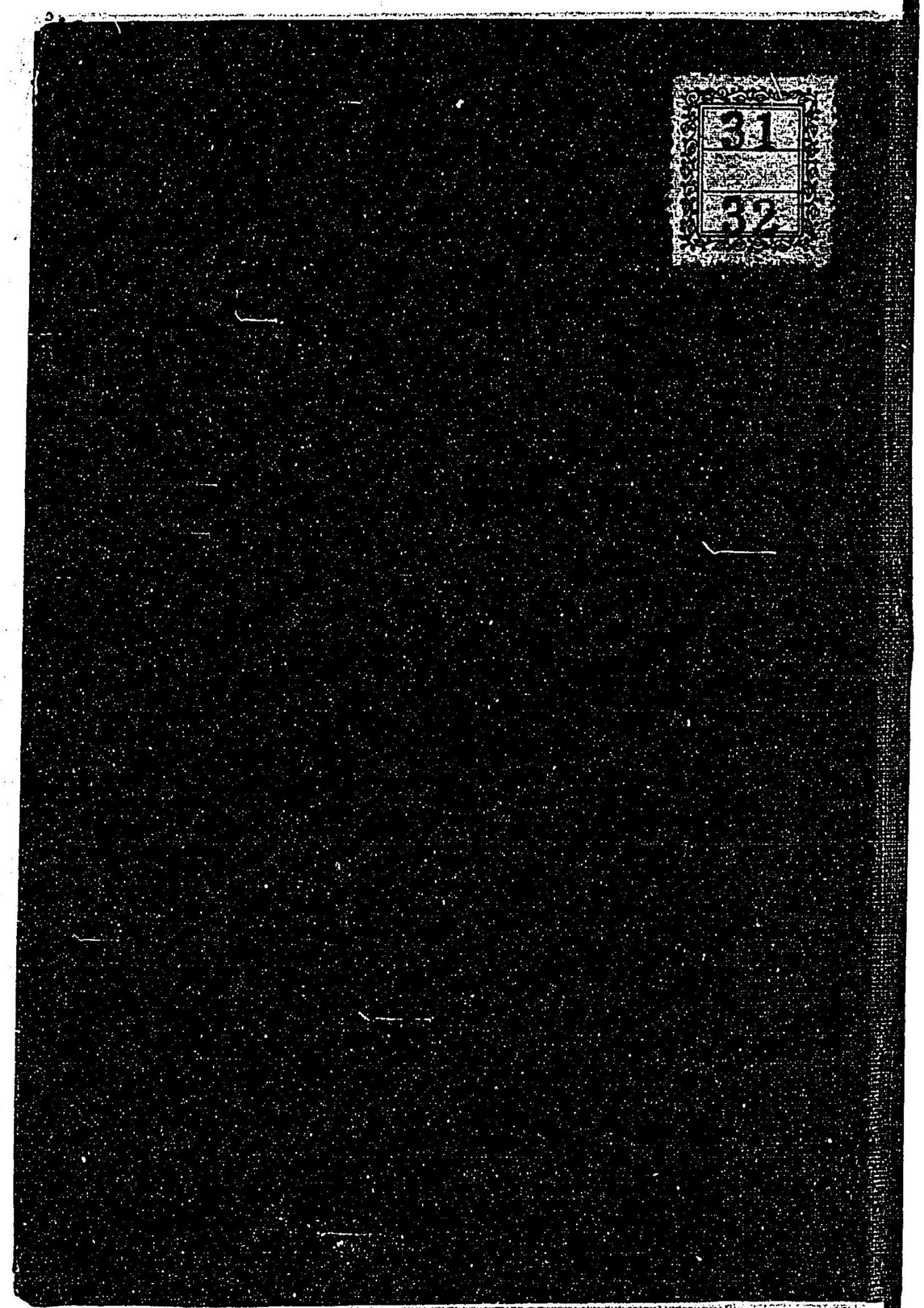
府下大賣捌

辻岡屋文助　鶴聲社　うさぎや
春陽堂山口屋藤兵衛　上田屋
丸屋鉄二郎　櫻堂　鈴木喜右衛門
永昌堂金二郎

三百五十二

（定價金貳圓）

31
32



090127−000−9

31−32

絵本北条時頼記

自由閣

M19

DBN−0468